平成２４年度　調査研究

教師が身に付けておきたい技術

福岡県教育センター

目　　次

第１章　授業に必要な技術　P 1

第１節　教材研究（P 2）
第２節　１時間の展開を考える（P 6）
第３節　発問と助言（P 9）
第４節　板書（P14）

第２章　実践事例　P19

○　国語科（P20）
○　理科（P26）
○　音楽科（P32）
○　外国語活動（P38）

第３章　各教科の授業技術　P43

・国語科（P44）	・外国語科（P56）
・社会科（P46）	・図画工作（美術）科（P58）
・算数（数学）科（P48）	・生活科（P60）
・理科（P50）	・技術・家庭科〔技術分野〕（P62）
・音楽科（P52）	・技術・家庭科〔家庭分野〕（P64）
・外国語活動（P54）	

第４章　学び方などを身に付けさせる技術　P67

Ｑ１　どうしたら、しっかりと話を聞かせることができますか（P68）
Ｑ２　どうしたら、学習に対する集中を持続させることができますか（P70）
Ｑ３　どうしたら、たくさんの子に発言させることができますか（P72）
Ｑ４　どうしたら、上手なグループでの話し合いをさせることができますか（P75）
Ｑ５　どうしたら、速く丁寧に文字を書かせることができますか（P76）

第５章　配慮を必要とする子どもへの技術　P79

１「困った子」でなく、「困っている子」へ（P80）
２　支援の基本「シンプル　クリア　ビジュアル」（P81）
３　環境整備における支援（P82）
４　学習具・掲示物における支援（P83）
５　かかわるときの支援（P83）

－第　1　章－

授 業 に 必 要 な 技 術

“たくさんの発言が生まれ、思考が深められる発問”
“教える内容が整然とまとめられた板書”
“子どもが真剣な表情で考えたり、話し合ったりする授業”

授業が上手な先生は、長い経験で培った学習時の「技」をもっています。それは、主に経験から生まれています。失敗したことや、先輩の先生がされた授業に感動したこと積み上げた結果です。

こうした先生に共通していることは、子ども達が「先生の授業はわかりやすくて楽しい」と言ってくれる授業をしたいという強い願いをもっていることです。

ここで紹介する技は、先輩の先生方が培ってきた技を集め、指導過程の基本に沿って授業づくりと教科特有の授業技術に分類整理したものです。

本著をもとに、なぜこのような技が必要なのか？　どうしてうまくいくのか（いかなかったのか）？　と、実際の授業に活用してください。

第1節　教材研究

学習内容の校種や学年の配当、配列、授業時数は変化します。私たちは変化する学習内容に応じて、選択して授業する必要があります。こうした授業の設計を教材研究と呼んでいます。授業設計は主に次の５つです。

○　なぜこの学年、時期にこの学習内容を実施するのかという理由を明らかにする。
○　この学習内容を指導するにあたって適切な教材をつくる（選ぶ）。
○　学習内容をとらえさせるために有効な子どもの活動を考える。
○　この学習活動を実施する上で準備すべき場や学習具（教具）をつくる。
○　子どもの学習意欲を高める発問や手立てなど、教師の働きかけを考える。

１　教材研究の3ステップ

(1) 指導要領解説の内容を具体化する

子どもが学習内容をとらえたと判断するためには、授業後に何が、どのように高まったかを具体化することが大切です。そのためには、考えが変容したり、技能が定着したりしたことを判断する物差し（評価規準）をつくる必要があります。小学校国語の代表的な教材文である「ごんぎつね」を扱った授業を例に、指導要領解説の内容を具体化します。

学習内容（ウ　文学的文章を読む＜小　国語解説　P64＞）
○読む内容：登場人物の性格や気持ちの変化、情景など
→（具体化した内容）さびしがり屋のごんが、兵十に親近感を覚え、近づきたいという思いを強めていく様子を読み取る。
○読み方　：各場面の場所、時間、人物の位置や動作を関係付けて読む
→（具体化した内容）場面ごとのごんの行動や兵十との位置関係を読み、ごんの気持ちの変容を読み取る。

この話には「ごんはさびしがりやで友達がほしいと思いました。」という文章はありません。だから、ごんの行動や兵十との距離を表した叙述から気持ちを想像することが学習内容になるのです。たとえば、４・５場面では以下のように叙述からごんの気持ちを読み取らせます。

※ごんぎつねの本文については「青空文庫」からDLできます。http://www. aozora. gr. jp/cards/000121/files/628_14895. html

1　着目させたい叙述	2　想像した情景	3　想像したごんの気持ち
・月のいいばんでした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。 ・ごんは、道のかた側にかくれて、じっとしていました。話し声は、だんだん近くなりました。 ・ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。	・村人にいたずらばかりするごんは、捕まるとひどい目に遭うので、見つからないように息を殺して隠れていることがわかる。 ⇕それなのになぜ？ ⇒ ・月夜で明るい上に、振り返られると捕まる距離にごんがいることがわかる。	・栗や松茸が家にあることについて兵十がどう思っているかが気になって仕方がない。 ・たとえ見つかってもいいから兵十の気持ちを知りたい。 ・兵十にだけは自分もひとりぼっちでさびしいことに気付いてもらいたい。

実際の授業の流れ →

← 授業を考える流れ

実際の授業では、1場面の様子がわかる言葉に着目させ、2そのときの情景を想像し、**「見つかったら殺されるかもしれないのに、どうしてごんはぴったりと兵十の後ろにいたのかな？」**という発問で3子どもは想像したごんの気持ちを発表するという流れになります。

ですが、この授業を考える順番は子どもが最後に発言する3をまず先に考えてから2→1の順番になります。つまり、授業はゴールから考えることが大切なのです。

(2)　本時主眼（ねらい）をくわしく書く

3にあたる部分が指導案に書く「本時主眼」になります。本時主眼は、授業内容が変化するので、毎時間変化します。また、他の教科でも用いられるような文章では本時内容ではありません。ここではとらえさせたい学習内容と、内容をとらえるための学習活動を例として紹介します。

【本時主眼】
①　「自分の気持ちを兵十に気付いてもらいたい」とごんの気持ちを想像することができる。
②　ごんが兵十に捕まるかもしれない距離まで近付いた理由を話し合う。

①は「授業の最後に発言させたい言葉」です。板書の「まとめ」にあたります。この言葉が出てくるための活動が②になります。つまり、危険であるにもかかわらず、ごんが兵十に近づいた理由を話し合うことで「気付いてもらいたい」というごんの気持ちを想像させることができれば本時の主眼は達成できたことになります。

(3)　本時主眼達成までの道筋をはっきりさせる

感動する物語にはクライマックスとなるヤマ場があるように、授業にも一番じっくり考えさせたいヤマ場をつくることが大切です。そのために一番考えさせたいことを聞く中心発問を考え、そこに向かうための発問と、最後に行う発問の順番で考えます。そうすることで、徐々にクライマックスへと向かい、余韻をもって終わる起承転結がはっきりした授業になります。

段階	発問の目的	発問例	発問を考える順番
導入	①重要な叙述に着目させる	・どんな場所でだれがいますか ・何をしていますか	3
展開 前半	②叙述から情景を想像させる	・なぜごんはかくれてじっとしているのかな ・月が出ているかどうかで明るさはどのくらいちがうのだろう。 ・かげぼうしを踏む距離ってどのくらいだと思いますか	2
後半	**（ヤマ場）** **③想像した情景からごんの気持ちを想像させる**	（中心発問） **・なぜごんは、見つかると殺されるかもしれない距離まで兵十に近付いたのだろう**	1
終末	④次時への方向付けを図る	・がっかりしたにもかかわらず、どうして次の日もごんは栗を持っていったのかな	4

終末は、次の時間の導入にかかわる発問を行います。「気付いてもらえるまで届けよう」というごんの気持ちを想像できた子どもは、そのために撃たれてしまうという悲劇に大きく心を動かされるのです。

2　学習意欲を高める資料や教具を準備しましょう

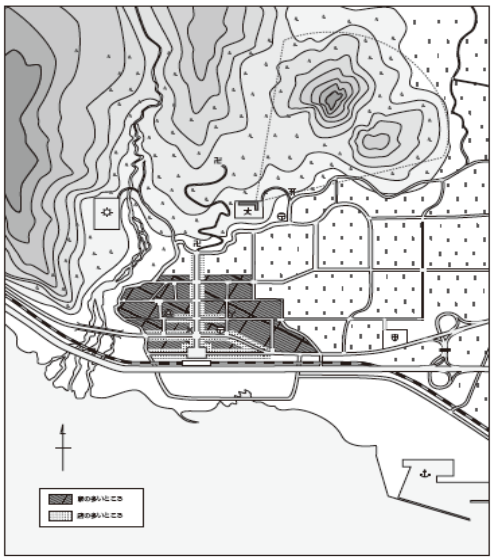
資料とは、考えをつくったり、深めたりするためのグラフや写真などの情報源です。教具とは、子どもが操作して考えたり、作品を制作したりするときに使用するための道具です。

これらは知識や技能を身に付けさせるための手立てですので、どの場面で、何を目的として使用するのかを明確にして使うことが大切です。

(1) 資料提示のポイント

ア　じっくり読み取らせる

社会科などで使われるグラフや統計、地図などは「見る」のでははく「読み取る」ための資料です。グラフであれば事象の変化からその理由を予想させたり、地図であれば土地の高低や交通の様子など、様々な情報をとらえさせたりすることが目的なので、じっくり読み取らせることが大切です。



この地図からは、以下のことから人々のくらしの様子を考えさせます。
○土地の高低・斜面の緩急
○土地利用の様子
○建物・施設・交通の様子

イ　見せている間は発問しない、発言させない

個別活動を始めたら、静かに資料を読み取らせます。そのためには次のことが大切です

・疑問が生まれない説明をしたり、説明の後に質問の場を設定したりする。

・途中で質問したくなったり、分からなくなったりしたら挙手させ、個別に対応する。

ウ　精選して見せる

一つの資料からつくった考えをどのように深めたいかを具体化して、次の資料を提示するタイミングや新しい見方への着眼点を考えることが大切です。

【複数の資料を組み合わせて順に提示し、考えをつくり出していく授業の例】

【資料１】つねに安い魚を求める消費者

「当然だ」という反応を期待する。

【資料２】枯渇する水産資源

安く売ってもうけるためには、たくさん獲るしかないことに気付かせる。

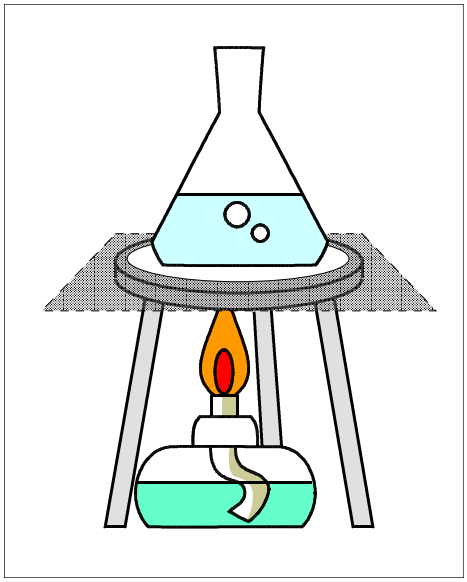
【資料３】年々減り続ける日本の漁師

獲っても安くしか売れない上に、そもそも魚が獲れないから漁師をやめるしかないことに気付かせる。

↓

今後の授業のあり方について考えるめあてへと導く。

(2) 教具を使用させるポイント



ア　操作の仕方と手順を理解しておく

例えば理科学習で使用するフラスコなどの実験器具は、実験の目的や使用する状況によって設置の仕方や加熱のタイミングなどを事前に確認しなければなりません。正しい順序で正しく操作しなければ主眼達成に必要な結果が得られないからです。そのために、必ず予備実験を行うことが大切です。

イ　操作の仕方に慣れておく

安全上、気を付けなければいけない教具（彫刻刀・薬品・包丁など）はその操作を先生が使い慣れて、子どもに正しく、安全に操作させるためのポイントを、先生が落ち着いて操作しながら示します。

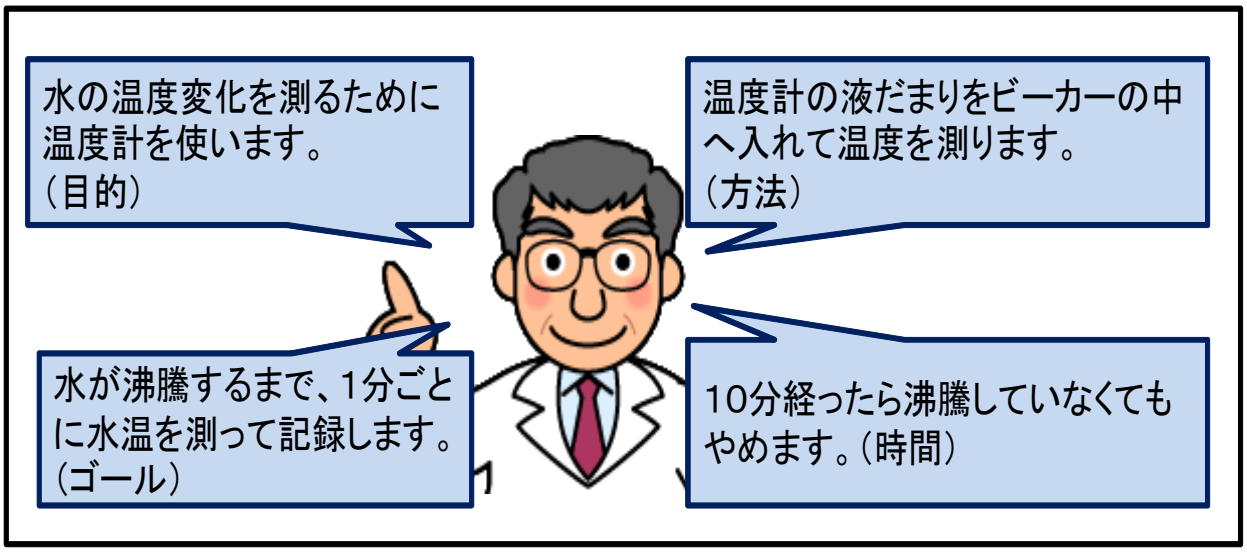
ウ　操作ができるまで繰り返して指導する

例えば音楽ではリコーダーの基礎的な技能がなければ、表現を工夫して演奏できず、学習内容もとらえることができません。一定の技能が必要な教具（楽器、筆、裁縫道具など）は繰り返し指導し、徹底して身に付けさせることも大切です。

エ　指示を明確にする

何のために使うのか（使用目的）、どうやって使うのか（使用方法）、何ができればよいのか（活動のゴール）、どれくらい使うのか（使用時間）を子ども達に明らかにしてから使わせましょう。

下の例は、小学校理科で、温度計を使って水の温度変化を測る時の指示です。実際にすることを見せながら説明することが大切です。



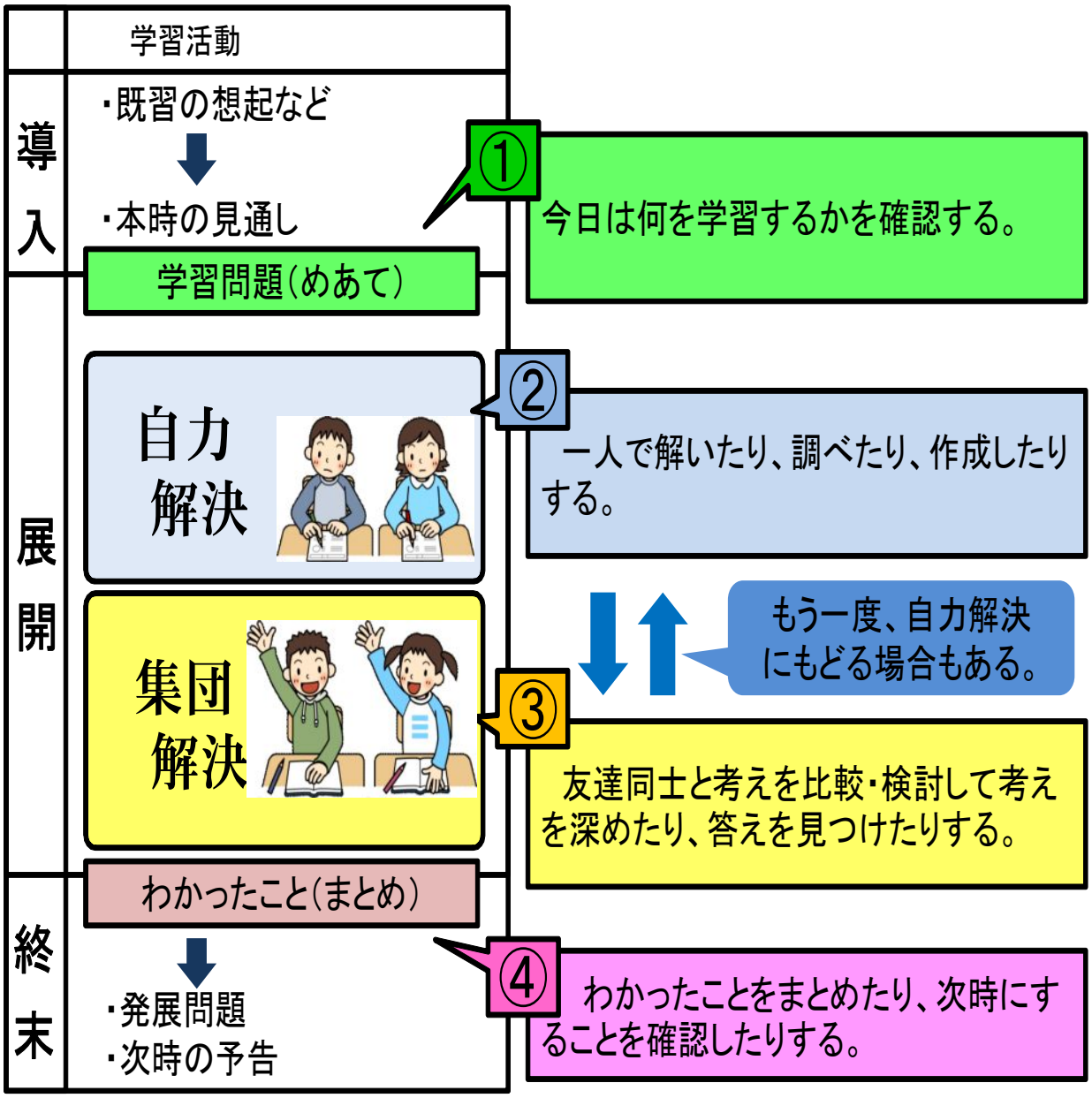
第2節　1時間の展開を考える

展開は、ゴール（終末段階）をはっきりさせてから
からスタート（導入段階）に向かって考えます。

1　1単位時間のしくみ　～導入・展開・終末をはっきりさせよう～

「授業はドラマだ。」と言われます。物語のように「起承転結」がある授業は子ども達も引きつけられ、時には大きな感動を伴います。そのためには授業の流れをつくる必要があります。

基本的に問題解決的な学習は、導入・展開・終末の３段階でつくられます※。さらに、展開段階を前半と後半に分け、「自力解決」と「集団解決」を行い、学級全員が納得して理解したことをまとめます。



※子どもが学習意欲を高め、学力を身に付けることをねらいとした授業展開の例として紹介しています。

２　「めあて」と「まとめ」がぶれないように

今日の授業で何をする（考える）のかを表したものが「めあて」です。反対に、今日の授業で何がわかったのか（できた）のかを表したものが「まとめ」です。めあてとまとめがぶれると、子どもの問題意識がずれてしまいます。「まとめ」とは、本時の主眼を子どもの言葉になおした授業のゴールなので、**ゴールから先に考えて授業をつくります。**

授業のゴール（本時主眼）

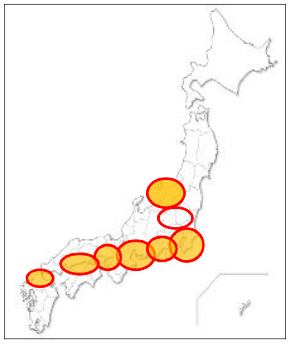
主な工業地帯が海沿いにあるのは、船によって大量の原料や製品を効率よく運べる港があるということを資料からとらえることができる。

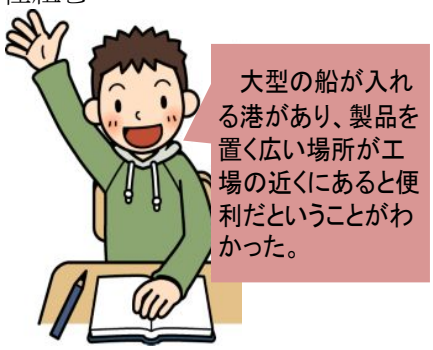
↓これを授業の最後に発言する子どもの言葉にしたものが「まとめ」になる。

まとめ　大きな工業地帯が海の近くにあるのは、船で原料や製品を大量に運ぶ必要があるから（ということが地図や写真からわかる）

↓このまとめが子どもから出るようにするためには・・・

日本の工業地帯の分布図と、主な工業地帯で製品を積み込む様子がわかる写真を提示してとらえさせる活動を仕組む





↓この資料を使って考えさせる目的をもたせるためには・・・

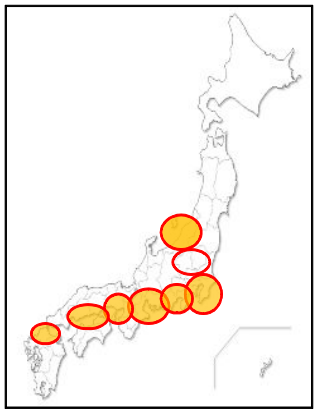
めあて　なぜ、大きな工業地帯は必ず海の近くにあるのか、地図や写真を見てわかることから考えよう。

↓この問題意識が生まれるためには・・・

日本の様々な工業地帯の生産額を表した表を提示して、上位の工業地帯がある場所を地図上に赤鉛筆で記入させ、海沿いであることをとらえさせる。

順位	場所	生産額
1	京浜	55兆円
2	中京	48兆円
3	阪神	30兆円
4	北関東	25兆円
5	瀬戸内	24兆円
6	東海	16兆円
7	北陸	13兆円
8	北九州	7兆円

場所を記入する。



３　導入・展開・終末段階に応じてすること

(1)　導入　ーめあてから板書までー

めあては、「どのような内容を」「どのような方法で」学習するのかを記述します。

めあて　なぜ、大きな工業地帯は必ず海の近くにあるのか、地図や写真を見て考えよう。

学習意欲を高めるために、子どもが考え出したように仕組むことが大切です。そのために、以下のような導入でめあてをつくります。

＜例１＞

① 前時までに学習したことを思い出す。
② 前時までの学習では解けない新しい学習問題に出会う。
③ どうすれば答えを見つけられるか話し合う。

＜例２＞

① 身近な出来事など自分達が知っていることと大きく違う事実を紹介して驚かせる。
② 「なぜ？」「どうすればいい？」と問い返す。

＜例３＞

① やってみたいことやつくってみたいものを提示する。
② 手順やポイントを説明して「できそうだ」という見通しをもたせる。

(2)　展開　ー前半で自力解決し、後半で集団解決しますー

① 展開前半（自力解決）

写真やグラフからわかることを調べたり、問題文から式をつくったりする活動は、個人で行います。この間、教師は机間指導で、子どもの様子をしっかりと観察し、困っている子には個別に支援します。

② 展開後半（集団解決）

前半の自力解決で考えたことをみんなが出し合います。基本的には、代表数人に発表させ、いくつかの考えがあることを確認し、分類・整理して考えを焦点化させます。主な発問は次の４つです。

【選択】どちらが（どれが）一番いいかな？
【順序】どちら（どれ）から先にやった方がいいかな？
【根拠】なぜするのかな？／しないのかな
【仮定】もし、これがなかったら（あったら）どうなるかな？

(3) 終末　ーわかったことをまとめたり、次の時間へつないだりします

主眼で示した子どもの姿を表させる最も重要な発問です。具体例を示します。

・今日のめあては「○○○○について考えよう」でしたね。どんな考えをつくることができましたか。
・みんなの考えをまとめると、どのようになりますか。
・（新しい問題を提示して）今日わかったことを使って解けそうですか。
・（まとめに矛盾する状況を提示して）おかしいですね。どうしてでしょう。

第3節　発問と助言

発問・助言は、授業中に教師が音声言語を用いて思考や理解を求める子どもへの働きかけです。発問は問いかけにより思考をうながします。助言は示唆、指示、説明などにより理解を求めます。どちらも主眼達成のために必要不可欠な教師のツールです。

１　発　問

授業は、発問で進行します。発問が悪ければ子どもの思考が停止したり、教師が意図しない方向に授業が進んだりして主眼達成もできなくなります。子どもに何を言わせたいのかをはっきりさせてから発問を考えましょう。

(1) 発問の目的と方法について

① 何のために発問するのか

発問は既習内容を問うもの（想起発問）と、考えをつくったり深めたりするために問うもの（思考発問）に分けられます。

（想起発問の例）学習したことが身に付いているかを確かめるため

「鎌倉幕府は誰がつくりましたか？」

→「源頼朝です。」

（思考発問の例）理由や根拠を求めて考えを深めるため

「なぜ頼朝は、鎌倉を政治の中心にしたのでしょう？」

→「貴族の権力が及ばない場所で武士中心の世の中をつくろうとしたからです。」

→「源氏ゆかりの土地だったので平氏に対抗する意味で中心にしたからです。」

→「周囲を山と海に囲まれ、守るのに都合がよい場所だったからです。」

② いつ、どのように発問するのか

想起発問は求める答えが決まっていることが多いので、授業の導入場面で既習を再生するときに用います。

思考発問は、子どもが考えて問いに答えます。そのため一問多答となる発問になります。子ども達が自分の結論と根拠を述べる展開後半、集団解決場面で用いられます。

(2) 発問計画を立てよう　－発問は、流れの中でつくられる－

１時間の授業「導入、展開、終末」の流れで子どもは学習意欲を高め、学習内容を理解していきます。こうした展開の道筋をつくる発問をつくる手順は、まず主発問を活動ごとに一つ考え、次にその間を補助発問でつなぎます。次のページに、具体的な算数の授業を例に、一つ一つの発問の役割と順番について紹介しています。

小学校　第5学年　算数科

平行四辺形の面積の求め方の発見をねらいとした授業の発問例

1　導入段階

１と２が前時に学習したことを思い出させる想起発問

「指示」とよばれる助言の一つ（4ページ参照）

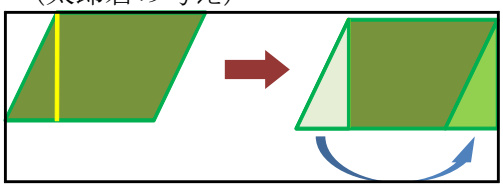
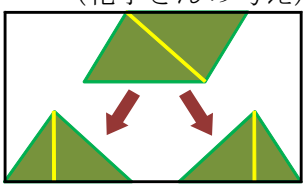
理由について考えさせる思考発問

解決方法について考えさせる思考発問（めあてを引き出して展開段階にうつる大切な発問）

	発問	子どもの反応
1	前の時間は三角形の面積の求め方をどうやって求めましたか	三角形を長方形に直して面積を出してから２で割りました。
2	今日は、平行四辺形の面積を求めてみましょう。（図形を提示） 	底辺×高さ÷２の公式を使って求めました。
3	今まで学習した面積の求め方は使えませんか	使えません。横の長さは測れるけど、たての長さがわからないからです。 三角形のように高さを決める頂点がどれかわからないからです。
4	**＜主発問＞ どうすれば求められそうですか**	**三角形の時と同じように、前に学習した図形に直したら求められそうです。**
5	今日は、どんなめあてがいいですか	「面積を求められる図形に直して、平行四辺形の面積を求めよう。」です。

2　展開段階

「指示」

	発問	子どもの反応
	めあて：面積を求められる図形に変形して、平行四辺形の面積を求めよう。	
1	では、自分の考えをノートにかいてみましょう。時間は、１０分間です。	
2	それでは、自分の考えを発表しましょう。 （太郎君の考え） 	（花子さんの考え） 

子どもが発言した後は、「なるほどね」「よく考えたね」など一言でいいからほめましょう。（はげましという「助言」の1つ）

黄色い線の左側は直角三角形になります。それを反対側にくっつけると平行四辺形が長方形になりました。 だから、たて×横で求められると思います。

対角線で平行四辺形を二つに分けると大きさが等しい三角形になります。 だから、その面積を計算して２倍すれば求められます。

本時のねらいを達成させるための発問（ゆっくり・はっきり発問します。）

3	**＜主発問＞** **平行四辺形も式を立てて求められるでしょうか。**	**＜太郎君の考え＞** **黄色い線は、長方形のたてと同じだから（たて）×（横）になります。** **＜花子さんの考え＞** **三角形が二つだから（底辺）×（高さ）÷2×2で（底辺）×（高さ）になります。**
4	平行四辺形は「たて」の辺がないので、三角形と同じように「高さ」と表します。だから「横」になる辺は「底辺」と表します。	
5	ということはどのような公式になりますか	底辺×高さになると思います。
6	今日のめあては「面積を求められる図形に直して、平行四辺形の面積を求めよう。」でしたね。まとめはどのように書いたらいいですか	「平行四辺形は、長方形や三角形に変形すれば面積を求めることができる」です。

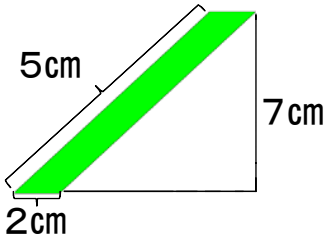
これは「説明」です。具体的に、簡潔に伝えられるように心がけます。

もう一度、今日のめあてを確認し、子どもがまとめを言えるように、促します。

まとめ：
平行四辺形は、長方形や三角形に変形すれば面積を求められる。
公式は「底辺×高さ」となる。

3　終末段階

次の時間にすることを予告することで、次時への見通しがもてます。

	発問	子どもの反応
2	**次の時間はこの平行四辺形の面積を求めます。求められそうですか？**  	**あれ、高さはどこだろう。** **底辺は2cmと思うけど、高さは５cmと７cmのどっちだろう。**

2　助　言

助言とは、子どもの学習理解を助ける子どもへの働きかけです。大きく「指示」と「はげまし」に分かれます。指示は、学習の方向付けを明らかにして子どもに見通しをもたせるために行います。はげましは、自信をもたせたり、成感を味わわせたりして次の目標をもたせるために行います。発問と異なり、子どもの反応を求めることは少なくなります。

(1) 指　示

子ども自身が今から何をすべきかを明確にできることが大切です。また、どこまでできればよいのか、できないときはどうすればよいのかと詳細に示します。

①大切なことをわかりやすく言う。

・一指示一行動

家庭科の裁縫など､長い時間の活動はスモールステップで行います。一つの指示を出した後は、その作業が完了するまで次の指示は出しません。また、指示を出した後は机を回って個別に声かけを行い、全体の進捗状況を把握します。状況によっては一度作業を止め、再度修正した指示を出すことも必要です。

・一指示多行動

理科の実験や家庭科の調理実習などのグループで取り組む作業は、子どもが全体の工程や手順を見通すと効率的に活動できます。工程表などを提示して各段階の作業内容やかかる時間などを説明した後に行動させます。

②説明と指示は明確に区別する。

することだけを指示するだけではうまく伝わらないこともあります。何のためにそれをするのかや、使う道具・結果の様子などの説明が必要な場合は、指示と説明を明確に区切ります。

③学ぶ順番をはっきりさせる。

・易しいものから難しいものへ（例：リコーダーの練習）
指が１本で出るシの音から練習し、２本、３本と増やしてラ・ソを出す練習をします。次に右手の指も使って音を増やしていきます。

・段階を明らかにして（例：みそしるの作り方）
まず鍋に煮干しを入れて沸騰させ、だしをつくります。
次に煮えにくい順番で具材を鍋に入れます。
最後にだし汁でといたみそを鍋に入れます。

(2) はげまし

子どもの学習意欲を高めるためは、子どもへ何ができればよいのか明確なゴール像を示すことが大切です。その際、子どもが自信をもって考えたり、活動したりできるよう以下のようなはげましを心がけましょう。

ア 支援：学習に自信がない子どもに対しては机間指導のときにかかわる。

間違っていたり、分からなかったりする子どもは、その実態に応じてヒントを出したり教えたりします。また、個人で作業する時などに「間違っていないから自信をもってね。」というメッセージを伝えることが大切です。このとき、しゃがんで子どもと目線を合わせ、うなずきながら聞いたり、後ろに寄り添って声をかけたりすることを心がけます。

イ 容認：間違えは悪いことではないことを伝える。

正しい答えを見つけること以上に、その考えをつくる過程が大切です。

たとえ、間違えた子どもが間違えた理由を他の子どもに説明させ、その子だけが思いついたアイデアなどはおおいに誉めたりして、結論を見つけるまでの過程が大切であることを伝えます。

ウ 賞賛：何がどうしてよかったのかを具体的にほめよう。

ただ「よくできました。」と誉められても理由がはっきりしないとうれしくありません。　賞賛は評価であり、次のステップに向けた方向付けです。具体的な根拠を上げて伸び具合を示し、よくなった場合は指摘して改善させることが大切です。その後で、次の課題を出すことも、学習意欲の向上につながります。

第4節　板書

板書の役割は、子どもの活動の見通しや考えの道筋を示すことです。考えの足跡を見ながら学習を振り返ることで分かり直しが図れます。

具体的には、以下のような役割があります。

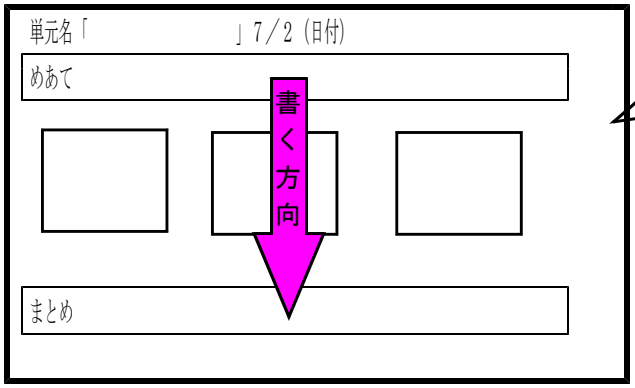
○学習の流れをつくる：どんな学習をするのかを確認したり、どう考えたらよいのかを方向付けたりすることで学習意欲を高めることができます。

○考える場を与える　：子どもの発言を掲示して、比較したり分類したりすることで考えを再構成することができます。

1　板書の作成手順

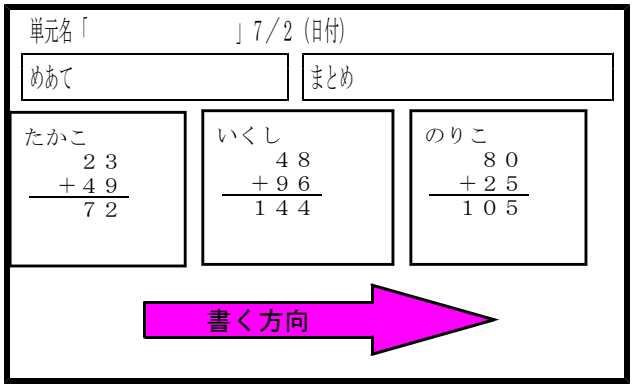
(1)　基本的な形式

横書きの場合：１



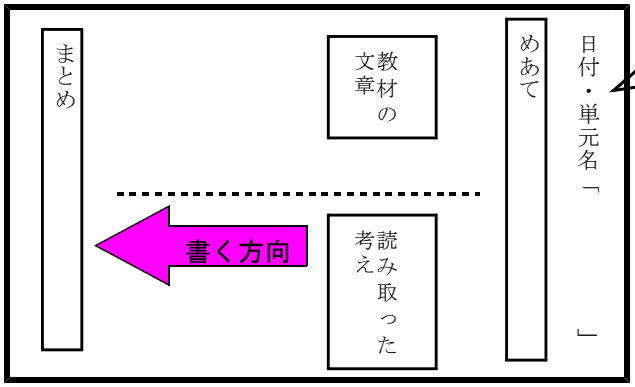
・わかったことや考えたことを整理して書きます。
・写真やイラストは文字数を少なくして見える大きさにします。

横書きの場合：２



・子どもが書く場合は、スペースを広くとります。
・「まとめ」は右下に書くこともあります。

縦書きの場合



・上下や左右に分割して対応させると授業の流れが見やすくなります。（左図は上下分割の例）

(2) 発達段階に応じた文字の大きさにします

ア　文字の大きさを考慮します。

字の大きさは、一般的には低学年で10cm　中学年6cm　高学年4cmとし、漢字を平仮名に比べてやや大きく書きます。

イ　ていねいに書く

子どもは先生が書く黒板の文字をお手本にします。書き順に気をつけ、しっかりした筆圧で文字列が整うように書きます。

2　指導効果を高める板書のポイント

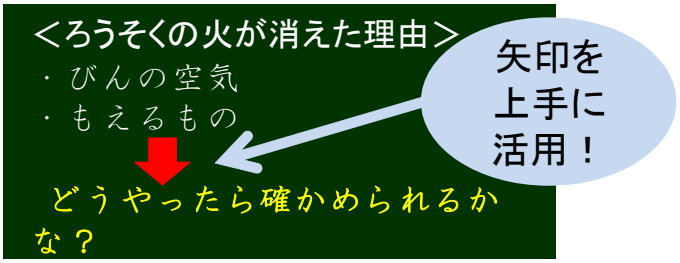
(1) 文ではなく、言葉を書く

子どもの発言をそのまま書いてしまうと、時間がかかります。その間子どもは思考を停止させますので、必要な言葉（キーワード）で簡潔に、書きます。

そのまま書いた例

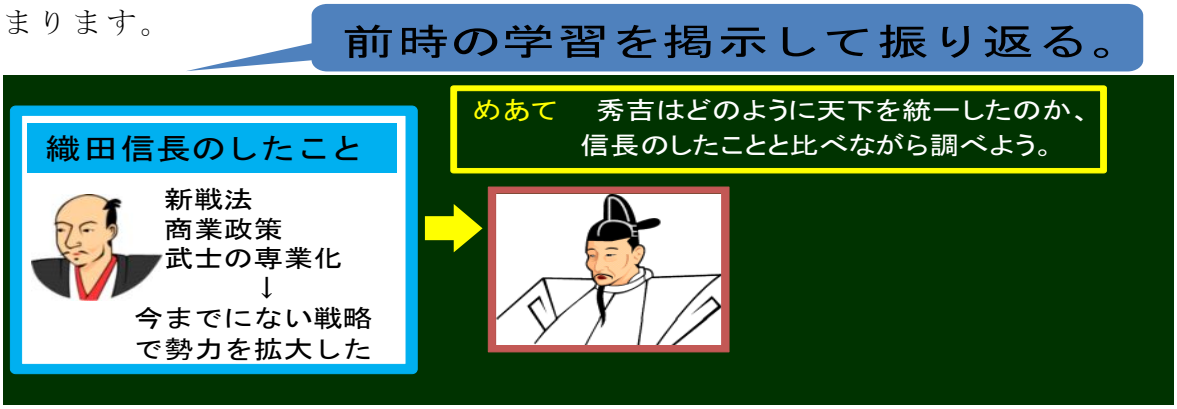
<ろうそくの火が消えた理由>
・びんの中でろうそくが燃え続けて中にある 空気がなくなったから
・びんの中にある物を燃やすものがだんだんなくなって消えた

必要な言葉で書いた例



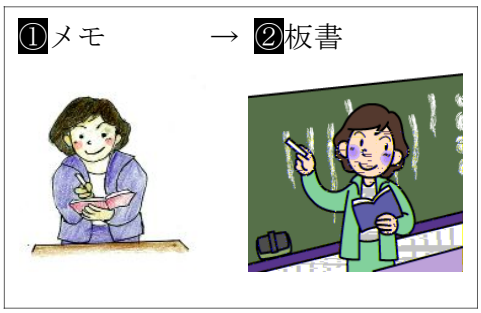
(2)「掲示物」を使って学習の流れを整理する

すでに学習したことや、作業手順などを掲示物としてまとめておくと指示や説明内容の理解が深まります。



(3) 子どもが発言するときは書かない

子どもが説明しているときは板書しません。きちんと目を見てうなづきながら聞き、発言が詰まったときは助言できるよう心がけます。発言が続くようなときは、①その内容をメモしながら聞いて４～５人を発表させたら一度切り、②要旨のみを板書します。

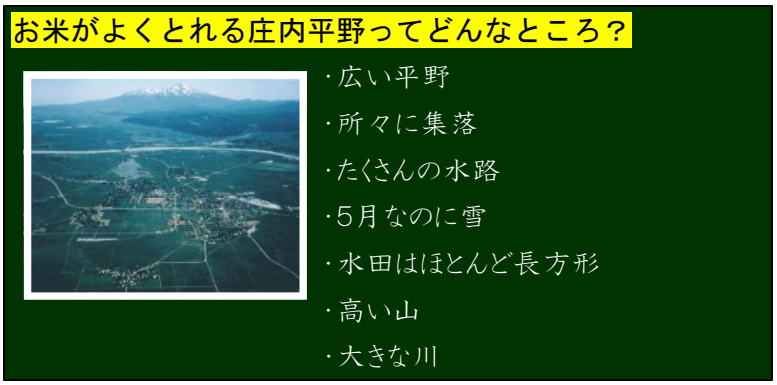


3　授業の目的に応じてレイアウトを工夫する

(1) 分類整理しながら板書→解決への見通しをもたせる

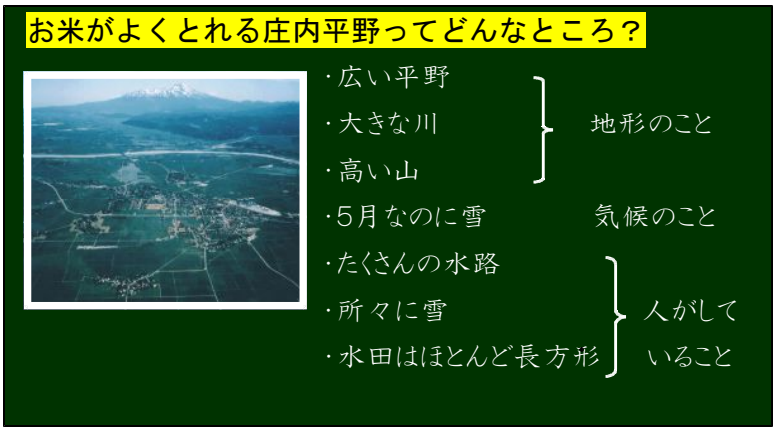
たくさんの考えを出し合い、それらを整理して考える方向性を見つける板書です。単元の導入段階などに効果があります。

STEP1　たくさんの考えや言葉を出す



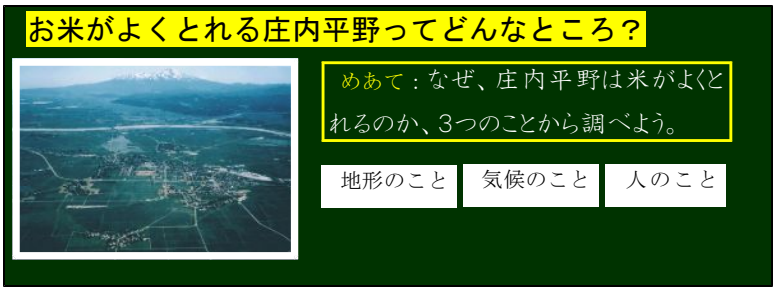
・どんどん発表させて、その順番に板書していきます。
・見てわかることのみを発表させ、発表への抵抗感をなくします。

STEP2　仲間分けをする



『「広い平野」は地形に関係することだね。他に地形のことはないかな？』と発問することで仲間分けに意識を向けます。

STEP3　これから調べたい視点としてまとめ、めあてをつくる。



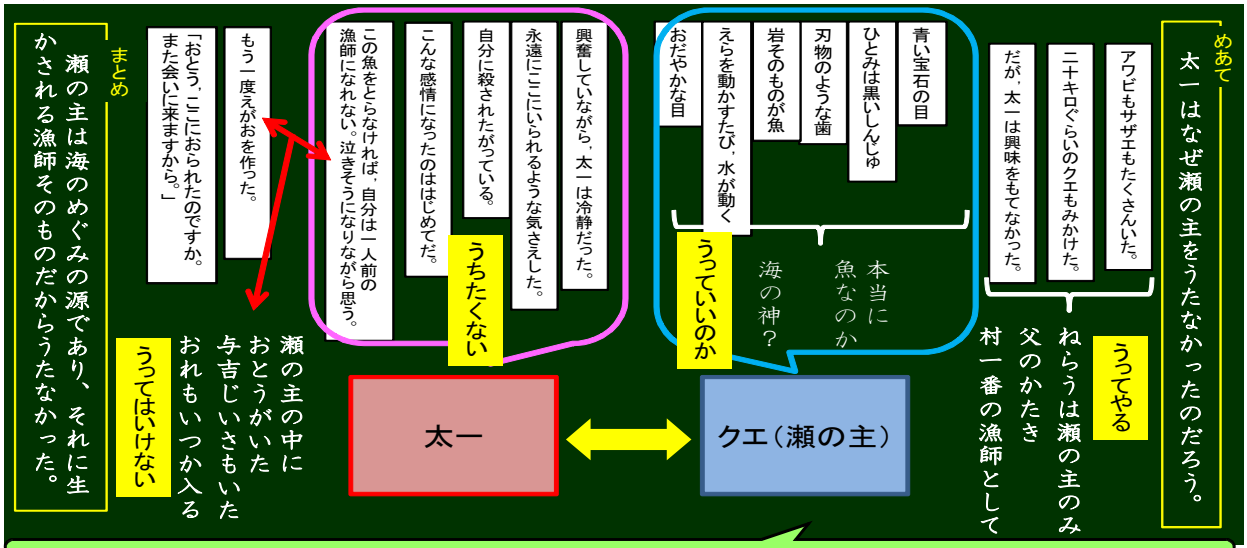
庄内平野が米所である理由について、仲間分けからつくった３つの視点から調べるよう指示をします。

(2) 体系的板書→知識･技能を確実に習得させる

情報を整理して意味づけしたり、キーワードをつけたりして、知識を習得させます。

(3) 構造的板書→思考力･判断力･表現力を育てる

黒板全体を一つの図として構成したものです。書かれた一つ一つの要素が次第につながり合い、全体の意味がわかるようにしていきます。比べたり、関係づけたりして考える授業には特に効果があります。



主人公の漁師である太一が、村一番の漁師だった父のかたきであるクエと出会い、葛藤した末にうたなかった場面における心情の変化を表しています。（小・国語６年「海の命」立松和平　作）

4　チョークの使い方

(1) 色づかいをマスターしよう

文字は白で書き、ます。黄や赤は白に比べて目立つため、枠囲みやアンダーラインなどで使うよう心がけます。

青や緑は黒板の色と似ているため、教室の後ろからなどはよく見えないことがあります。使う時は、濃くはっきりとした線をひきましょう。

(2) 持ち方をマスターしよう

ア　親指・人差し指・中指の３本で持つ

チョークを包み込むように持ちます。黒板に対して寝かしすぎず、先を回しながら削れる部分が一定になるように書きます。長さが半分以下になったら替え、短いものは枠囲み用として貯めておきます。

イ　しっかりと、正しく確実に書く

力を入れて、ていねいに書かなければ薄くなってしまいます。後ろに座っている子どもが見えるくらいの濃さで書きます。書き順に気を付け、くせ字は直します。（書き方もお手本です）

コラム：先生の「立ち位置」

授業中は、全員の子どもを視界に入れ、表情の変化やつぶやきなどに気を付けます。学習についてきているか、体調が悪い子はいないかを確認するためです。特に、小学校低学年の子どもは急に体調不良や、トイレへ行きたくなったりします。

基本的には、発問や説明などの話をする前に一呼吸入れて、全体をぐるりと見回します。全員がこちらを向いているか、集中しているかがわかります。その上で授業を進めます。

＜基本的な３つの立ち位置＞

○全員に話すとき

教室の中央に立ち、全員に目線を合わせながらゆっくり、はっきりと話します。身振りや手振りを使って、表情豊かに話します。子ども達の反応を確かめながら話すことが大切です。特に、つぶやきは聞き逃さないようにします。よい反応があったらたくさん誉めます。

○板書するとき

黒板に対して４、子どもに対して６の割合で体を開きます。子どもに背を向けて板書するなど、黒板に話しかけないようにします。また、黒板の下部に書くときは、自分の体で手元が見えなくなるので、しゃがん腕を伸ばしてで書きます。

○子どもが発表しているとき

黒板の端に立ち、発表者へも目線を送ります。

この時、先生は「なるほどね」「どうしてそう思ったの？」と声をかけ、「みなさんはどう思いましたか？」と助言をして他の子どもの発言をうながすと話し合いが活発になります。

－第　２　章－

実　践　事　例

第１章の内容をもとに、１時間の展開を具体的に説明します。どのように授業の流れをつくったらよいのか、その中で大切なポイントは何かを紹介します。

○国語

中学校第2学年　単元「きずなを読む（字のない葉書）」

○理科

小学校第5学年　単元「電流の働き」

○音楽

小学校第5学年　題材「様子を思い浮かべながら、リズムの特徴を生かして歌おう」

○外国語活動

小学校第5学年　単元「できることを紹介しよう（Hi,friends!2 Lesson3 I can swim.）」

1　教材研究をしよう

(1) まず教材となる文を読もう

国語科の教材研究の第一歩は、教師自らが教科書に掲載されている教材文をしっかり読み込んで、教材文の価値や特徴をとらえることです。

そのうえで、子どもの発達段階・興味・関心に応じて、その指導の過程をどのようにするかを考えます。以下のような４つの方法で読みましょう。

〔方法〕場面や段落の「間」のとり方を考えながら読むこと
〔効果〕文章の時間的、空間的な場面の展開、視点、登場人物の心情や行動、情景描写、表現の美しさ、力強さ、リズム、言い回しなどの明確化

〔方法〕①　重要語句、主述の関係、文と文の接続、会話文などを分類しながら、全文を１行ずつあけて視写すること
②　視写文の行間に、「語句の読み、意味や用法」、「思ったこと・考えたこと」、「わかったこと・わからないこと(疑問)」、「関係付け」、「浮かんだ言葉(感想や解釈)」などを書き込むこと
〔効果〕子どもの反応や疑問を想定した発問・板書計画などの明確化

〔方法〕①　例えば、「暴君」や「キャラコ」など日常生活ではなじみのない物の言葉の意味を、辞書などを使って調べること
②　言葉の背景にある社会の出来事を明らかにすること
〔効果〕登場人物の心情や行動、情景描写などの明確化

〔方法〕①　空間や時間の変化に着目して、場面分けを行うこと
②　主人公がしたことを要約すること
③　主人公は何を考え、何を求めているかを読み取ること
→作者の希望、願い、信念、意思などは主人公の言動に託しています。
〔効果〕文章の時間的、空間的な場面の展開、視点、登場人物の心情や行動、情景描写、書き手のものの見方や考え方などの明確化

(2) 学習指導要領解説（以後、解説）の内容を具体化します

教材文の概要をつかむことができたら、次は「解説」の内容を読んで指導内容を確認します。教科書教材では、教材文の後に学習課題が示されています。この課題をヒントに単元目標を設定することができます。この単元の学習内容は、学習指導要領解説で下記のように示されています。

ア　抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読むこと。
イ　文章の全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。

イ(ｲ)　抽象的な概念を表す語句、類義語と対義語、同音異義語た多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を磨き語彙を豊かにすること。

次に、学習活動の具体化を図るために、「解説」の指導内容を教材文の内容と照らし合わせて、「子どもがどのような活動や発言をすれば、学習内容をとらえたと判断できるのか」といった授業のゴールを設定します。ここでは、下記のようにします。

※　「＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

何を読むのか：抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などを読む。
どう読むのか：辞書を活用するなどして具体的な中身、論の展開、読み手自身の体験や読書経験を生かして読む。

何を読むのか：文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味を読む。
どう読むのか：各段落が文章全体の中で果たす役割、情景や人物の描写、登場人物の言葉や行動、話の展開や作品全体に表れたものの見方と関係付けて読む。

何を読むのか：暴君ではあったが、反面照れ性であった父が、普段の家庭生活での様子や私への「手紙」や末の妹への「葉書」にまつわるエピソード
どう読むのか：父と娘（私、末の妹）にまつわる２つのエピソードを中心に読み、そこに書かれている人物の言動や様子を描写する表現から、「父」の娘への深い愛情を読み取る。

このように、①から②へと解説で示されている指導内容を、教材文の内容と結びつけることで授業を具体化します。この作品には、「暴君ではあったが、反面照れ性でもあった父が、実は娘への深い愛情を秘めているのです。」という文章は教材文のどこにもありません。そんな「父」の心情を、普段の家庭生活や父と娘にまつわるエピソードで描かれている情景や人物描写、言動から読み取るのです。

この作品では大きく二つの部分から構成されており、前半は筆者が女学校１年生で初めて親元を離れたときの「父からの手紙」にまつわる思い出で、後半は末の妹が疎開したときの父がもたせた「字のない葉書」にまつわる思い出が書かれています。

これらの思い出を通して、暴君で表向きは家族に厳しい父の、普段の生活からは決して

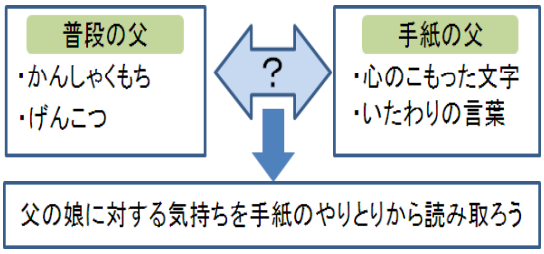
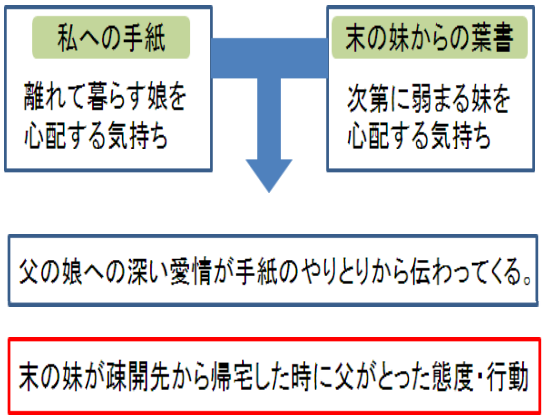
うかがい知れない娘たちへの「愛情の深さ」や「家族のきずな」が見えてきます。

つまり、「家族のきずな」は、文学的な文章における「描写」の効果と、「登場人物の言動の意味」を考えることで、理解を深めることとなります。

また、指導内容等の確実な定着を図るために、国語科固有のポイントとして、今回の実践では単元のテーマを「『私』の父への思いの変化をとらえ、発表しよう」として、言語活動を行うとともに、次のような単元の指導計画を立てます。

(3) 単元の指導計画を立てます

（全４時間）

			ポイント
一			
二			
三			

(4) 目標を達成できるように読みの視点をはっきりさせます

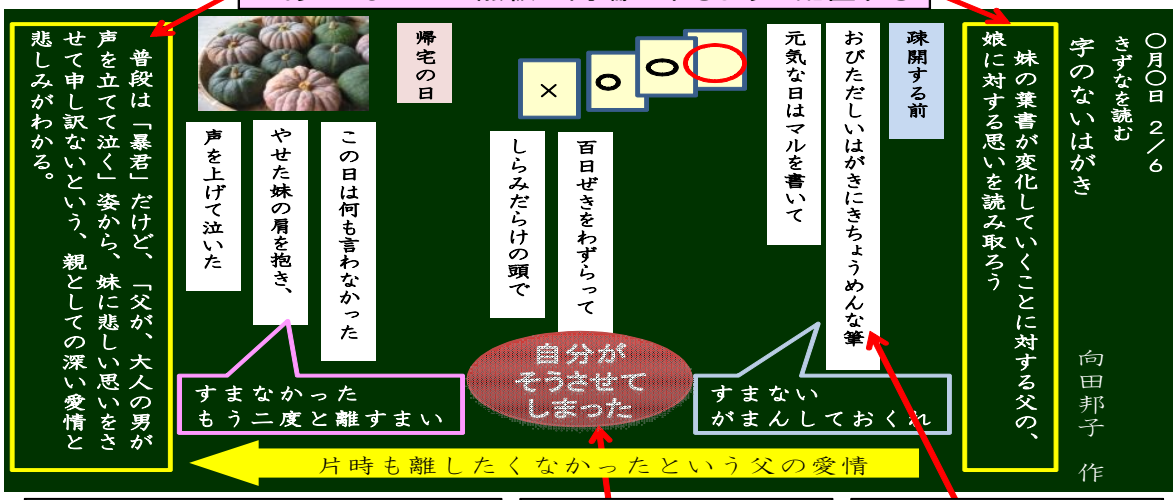
視点①　心情や情景を表す語句に、自らの体験や知識を重ねて理解し、自分の考えをもつ。

「

視点②　描写の効果や登場人物の言動の意味などを考えて、作品の内容を理解し、自分の考えをもつ。

(5) 板書計画をします

めあてとまとめが黒板の両端に来るように配置する



上段・・・叙述文
下段・・・読み取った気持ちを整理。

特に気付かせたい気持ちは中央に

叙述の文は短冊にしておく

コラム:「文学的文章の特徴」

多くの文学作品の場合、たいていの主人公は作品冒頭部分にすでに『何らかの問題』を抱えています。「字のない葉書」では、「暴君ではあったが、反面照れ性でもあった父」の言動がそれにあたります。そして『何らかの問題』が結末部分では見事に解決されて物語は終わります。その『何らかの問題ー解決』のために必ず誰かとの出会いと交流があります。「茶の間に座っていた父は、はだしで表へ飛び出した。」「やせた妹の肩を抱き、声を上げて泣いた。」がそれにあたります。この『何らかの問題ー解決』のプロセスの把握をしておくと、文学的文章の教材研究がしやすくなります。

２　１時間の展開を考える

(1) ゴールから先に考えて授業をつくります（★第3時の場合）

【自力解決のための手だて】

①葉書のエピソード（疎開前と帰宅時）に表現されている父は、どちらが愛情深く表現されているかを問いかける。

※父に関する会話、行動描写、情景描写などを示す色カードや短冊を示す。
（前時までの学習プリントも活用）

②末の妹が「疎開に出発する前」と「帰宅するとき」の父の行動や態度から父の思いを考える。

※自分の知識や体験と関連付けて書くように助言する。

【集団解決のための手だて】

③なぜ、葉書のエピソード（疎開前と帰宅時）が並んで書かれているかを考えさせる。

※単に「家族思い」「愛情深い」という言葉だけでなく、２つのエピソードを対比させ、交流させる。

④愛情深い父を表したいのであれば、疎開前のエピソードはいらないのではないかを問う。

※末の妹に対する父の深い愛情をとらえさせる。

妹の葉書が変化していくことに対する、父の娘に対する思いを読み取ろう

○　前時に学習した「父から私への手紙」のこと、暴君である普段の父の姿や末の妹が学童疎開に行く前に葉書を準備する姿、返信される葉書に対する父の思い、疎開から帰ってきたときの様子などを対比し、交流することで普段の父からは想像できない娘の対する深い愛情や思いをとらえる。

(2) 本時の展開

暴君の父が、末の妹が出発する前に葉書を用意する姿と、妹の帰宅時の言動から、本当は家族思いで優しい心をもっていたことをとらえる。

段階	学習内容と活動	発問と手立て(例)
導入	1　前時で学習した父の人柄や心情から、末の妹に対する思いを振り返り、本時の学習課題を設定する。	・父の行動や態度（情景描写）から伝わってくる父の思いを考えて書かせる。
	妹の葉書が変化していくことに対する、父の娘に対する思いを読み取ろう。	
展開	2　登場人物の言動や様子を描いた表現に着目して、父親の人柄や心情、家族それぞれの心情を読み取る。 【自力解決】 (1)後半部分から最後まで音読し、末の妹が「疎開に出発する前」と「帰宅するとき」の父の行動や態度から父の思いを考える。	・子どもに音読させ、父の行動や態度を表す部分に傍線を引かせる。 ・前時までの学習内容と比較しながら、父の行動や態度から考えられる末の妹に対する父の思いを書かせる。
	【集団解決】 (2)(1)について、自分の考えを発表し合う。 ・末の妹が出発する前に葉書を用意する父の姿や返信される葉書の状況、帰宅したときに「はだしで表へ飛び出した」という父の姿から、戦争中とはいえ、幼いのに１人で寂しい思いをさせてすまない。 ・「私」が父の泣く姿を、初めて見たので、行動や態度では見えないけど、末の妹のことで居ても立ってもいられなかった。	・相手の話を聞き、気づいた部分や考えが深まった部分を書かせる。 ・自分自身の体験や知識からも父の思いを書かせる。
終末	3　「私」の目に映った父の姿から家族に対する心情を読み取る。 (1)２(2)の意見交流から、自分の考えをまとめる。	・「父が、大人の男が声を立てて泣くのを初めて見た」という記述を取り上げ、教師がこれまでの父の言動や姿を振り返ることで、「私」の目に映った父の姿から家族に対する心情を書かせる。
	(2)次時の学習内容を確かめる。	

小学校理科　第５学年

・単元名　「電流の働き」

１　教材研究をしよう

(1)「解説」で、指導する内容を確かめます

教材研究をするとき、教科書を使って教える内容と方法（観察・実験）を確認します。そのときに学習指導要領解説は必読です。その理由は、学習指導要領解説に、教科書に記載されている内容と方法（観察・実験）が何のために、どのように行うのかが詳しく書かれているからです。

学習指導要領解説を読む順は、下記のとおりです。

① 学習指導要領解説の目次から該当する学年を探し、学年の目標を確認します。
② 学年の「A 物質・エネルギー」「B 生命・地球」にかかわる目標を確認します。
③ 教科書の単元名から、該当する内容を確認します。

まず、学習指導要領解説の目次のページを開きます。目次から指導する学年のページを開き、学年の目標を確認します。次に、「A 物質・エネルギー」「B 生命・地球」にかかわる目標を確認します。さらに、教科書の単元名に該当する内容が示されているので、その内容を確認します。

ここでは、小学校理科単元「電流の働き」を例に説明します。「電流の働き」は、第５学年の指導内容です。第５学年の学年の目標、「A 物質・エネルギー」「B 生命・地球」の目標、学習内容「電流の働き」と読み進めます。「電流の働き」は、下記のように書かれています。これが指導する内容です。

電磁石の導線に電流を流し、電磁石の強さの変化を調べ、電流の働きについての考えを持つことができるようにする。
ア　電流の流れているコイルは、鉄心を磁化する働きがあり、電流の向きが変わると、電磁石の極が変わること。
イ　電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻数によって変わること。

(2)「解説」で、指導の方法を確かめます

指導する方法については、学習指導要領解説のＰ４７の中段付近を見ます。そこに指導する内容のア、イに関して、その指導方法（観察、実験）が示されています。

ア　コイルに鉄心を入れて電流を流すと、鉄心は磁石になる。また、コイルを乾電池につないで、乾電池の極を変えると電磁石の極が変わる。これらのことから、電流には磁力を発生させる働きがあるとともに、電流の向きを変えると電磁石の極が変わることをとらえるようにする。
イ　電磁石をつくり、乾電池をつないで電流の強さを変えると電磁石の強さが変わる。また、導線の長さを同じにして、巻数の異なる二つの電磁石をつくり、一定の電流を流すと、電磁石の強さに違いがでる。これらのことから、電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻数によって変わることをとらえるようにする。

── 線が観察、実験を示し、 〰 がとらえる内容を示しています　── 線に示してある観察・実験を実際に行うことになります。

(3)　目標を決めます

目標は、下記ア～エの４観点から設定します。目標設定の留意点は以下のとおりです。

a　自然事象への関心・意欲・態度

自然事象への関心・意欲・態度の基本的な目標は「自然に親しみ、意欲をもって自然の事物・現象を調べる活動を行い、自然を愛するとともに生活に生かそうとする。」です。「自然に親しむこと」「自然を愛すること」は、理科の学習全体で培っていくことです。そこで、単元レベルで培うこととしては、「自然事象に興味・関心をもつこと、進んで調べようとすること、生活に生かそうとすること」が考えられます。「電流の働き」では、指導する内容が、ア　電流には磁力を発生させる働きがあるとともに、電流の向きを変えると電磁石の極が変わることをとらえるようにする。イ　電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻数によって変わることをとらえるようにする。の２つです。この２つを整理すると、電磁石の導線に電流を流したときの現象と電流の働きを調べることになります。そこで、「電磁石の導線に電流を流したときの現象に興味・関心をもち、電流の働きを進んで調べようとしている。」という目標を設定することができます。

b　科学的な思考・表現

学習指導要領解説のＰ８に問題解決の能力が、下記のように示してあます。そこに示していることを参考にすると、科学的な思考・表現の目標を設定するときに役立ちます。

学年	問題解決の能力
第３学年	身近な自然の事物・現象を比較しながら調べる。
第４学年	自然の事物・現象を働きや時間などと関係づけながら調べる。
第５学年	自然の事物・現象の変化や働きにかかわる条件に目をむけながら調べる。
第６学年	自然の事物・現象についての要因や規則性、関係性を推論しながら調べる。
中学校	観察・実験の結果を分析し、解釈する。

「電流の働き」は、第５学年の単元です。第５学年の問題解決の能力は「自然の事物・現象の変化や働きにかかわる条件に目をむけながら調べる」です。教科書には、電磁石の強さと電流の強さや導線の巻数との関係を調べる実験、電磁石の極の変化と電流の向きについての関係を調べる実験が示されています。電磁石の強さと電流の強さの関係を調べる時には巻数を同じにしておく必要があります。また、電磁石の強さと導線の巻数の関係を調べる場合には、電流の強さを同じにしておく必要があります。これらのことから、実験方法を計画する場面で、「電磁石の強さと電流の強さ、導線の巻数、電磁石の極の変化と電流の向きについて、条件に着目した実験を計画し、表現している。」という目標を設定することができます。

c　観察・実験の技能

観察・実験の技能の基本となる目標は「自然の事物・現象を観察し、実験を計画的に実施し、器具や機器などを目的に応じて工夫して扱うとともに、それらの過程や結果を的確に記録する。」です。この基本となる目標と実際に行う観察・実験から目標を設定します。「電流の働き」では、電磁石に極があるかという電磁石の性質に関する実験や電磁石の強さを変えるにはどうしたらよいかといった実験が計画されています。そこで、電磁石の性質、強さに関することと観察・実験の基本となる目標を合わせて「電磁石の性質や強さを調べその過程や結果を正確に記録している。」という目標を設定することができます。

d　自然事象についての知識・理解

「1　教材研究をしよう」の(2)で示した〰 の部分が、自然事象についての知識・理解の目標になります。語尾のとらえるようにするを理解しているに書き換え、「電流には磁力を発生させる働きがあるとともに、電流の向きを変えると電磁石の極が変わることを理解している。」「 電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻数によって変わることを理解している。」という目標を設定します。

(4)　教える順番を決めます

教える順番を決めるためには、単元の流れを考えていくことが大切です。基本的には、教科書の順番どおりに配列していきます。「電流の働き」では、「電流には磁力を発生させる働きがあるとともに、電流の向きを変えると電磁石の極が変わることを理解している。」「 電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻数によって変わることを理解している。」という知識・理解に関する２つの目標が学習指導要領解説に示されています。そして、教科書は、その２つの目標に基づいて具体的な指導内容と方法が記載されています。学習指導要領解説の内容と教科の順番を照合し、単元の配列を決めます。学習指導要領解説の「電流の働き」の最後に、ものづくりについて述べられ、教科書にも電流の働きで学習したことを生かしたものづくりの内容が述べられています。それらのことから、学習のまとめとしての電流の働きを利用したものづくりを単元の最後に位置づけます。これに本時に必要な時数を配当すると単元指導計画となります。

学習内容	学習活動
①電流には磁力を発生させる働きがあるとともに、電流の向きを変えると電磁石の極が変わること	魚釣りゲームを行い学習への興味・関心を高める。その後、第３学年「磁石の性質」の学習と関連付け、電磁石の性質を永久磁石の性質と比較して調べる。
②電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻数によって変わること	電磁石を強くする方法について、たくさんのクリップをつけることができるようにする方法を第４学年「電気の働き」の学習を関連付けて調べる。
③電磁石を利用したおもちゃづくり	おもちゃづくりをするだけでなく、計画する段階から①や②で学習したことがおもちゃのどこに生かされているかを発表する。

(5) 本時の主眼と展開を考えます

教える順番が決まったので、本時の主眼を設定します。ここでは、学習内容の②「電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻数によって変わること」を取り上げます。理科においては、ねらうこととそのための方法（観察・実験）を設定する必要があります。また、子どもが実験方法を考えることができる場合は、子どもに実験方法を考えさせます。そのため、下記に示した主眼を設定することができます。

ア　電磁石を強くするための実験方法を計画することができる。

イ　電磁石を強くするための実験を通して、電磁石を強くする方法を理解することができる。

※本時の展開については、２の「ゴールから先に授業をつくる」で説明します。

(6) 教材の準備をします

①単元全体で準備するものを確認しましょう。

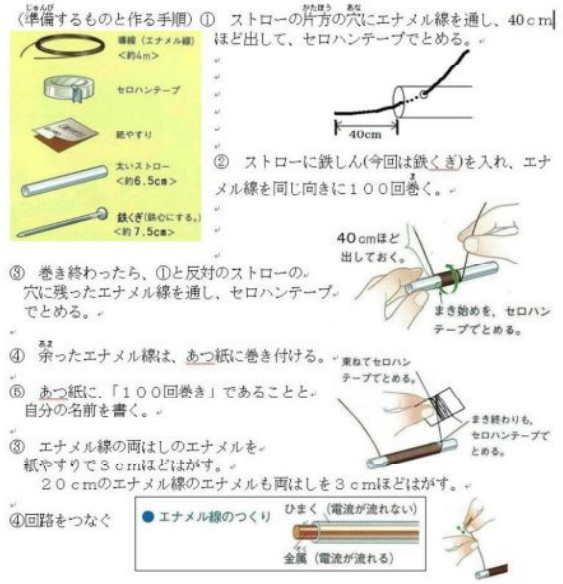
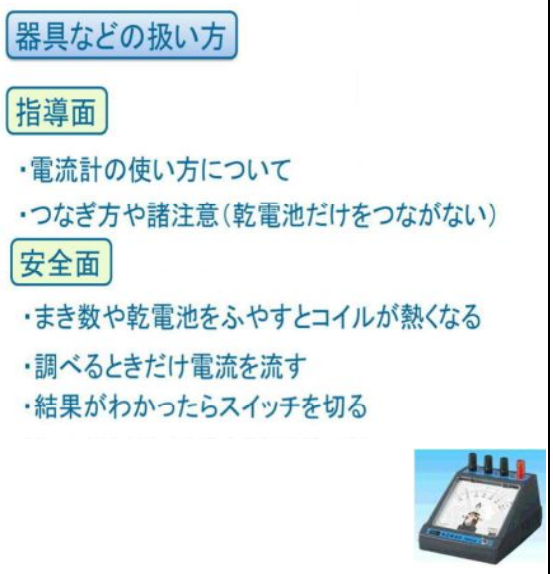
教科書の観察・実験の図や手順を見て、単元全体での準備物を確認し、準備します。そのときに個人で使用させるか、班で使用させるかを決め、準備する数を決める必要

があります。基本的には、材料、道具の確保状況や１人での操作が難しい場合、加熱器具など安全面を配慮する必要がある場合には、ペアや少人数で行います。

「電流の働き」では、電磁石は１人１つもたせます。しかし、電流計を使って電流の大きさを測定する実験に関しては、操作が困難ですのでペアや少人数で行います。

②掲示物等

電磁石の作り方の手順や実験器具の使い方、安全面での必要事項などは、掲示する必要があります。教科書から選び、準備しましょう。

電磁石の作り方の手順	電流計の使い方の説明
	

(7)　気をつけよう！

理科はモノで語ることが大切です。授業の導入では、必ず事象提示を心がけましょう。今から「電磁石について学習します。」ではなく、電磁石を使った魚釣りゲームや電磁石を利用したおもちゃを実際に見せることで、子どもの学習への意欲を喚起することができます。次に、危険なことや子どもがしてしまいがちな失敗を予備実験によって事前に把握しておくことです。この学習では、コイルが熱くなり火傷の危険があるので、実験をするとき以外は電流を流さないことや電流計の正しい使い方について実験の前に確認することが大切です。

(8)　理科の目標や内容について

学習指導要領解説の第２章には、理科の目標及び内容が示してあります。特に理科の目標に関しては、下記ア～カに示したように文節に区切り、それぞれの意図するものについての説明がされています。

ア　自然に親しむこと
イ　見通しをもって観察、実験を行うこと
ウ　問題解決能力を育てること
エ　自然を愛する心情を育てること
オ　自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図ること
カ　科学的な見方や考え方を養うこと

例えば、実感を伴った理解に関しては、3つの側面から述べてあり、その3つを踏まえた授業を行っていくと子どもたちの理解をより確かなものとすることができます。単元レベルの教材研究と並行して理科という教科の特性も学ぶ必要があります。

２　１時間の展開を考える

(1)「めあて」と「まとめ」がぶれないように

「１　教材研究をしよう」「(4)教える順番を決める」の学習内容②「電磁石の強さは、電流の強さや導線の巻数によって変わること」を例にして１時間の展開について説明します。授業の展開を考えていく上で大切なことは、ゴールから授業をつくることです。こうすることで、「めあて」と「まとめ」がぶれません。ここでは、電磁石を強くする要因を理解することが授業のゴールとなる展開を考えます。

授業のゴール（本時主眼）→電磁石を強くするための要因は、電流を強くすることと導線の巻数を増やすことである。

↓　これを子どもの言葉に直したものが「まとめ」になる。

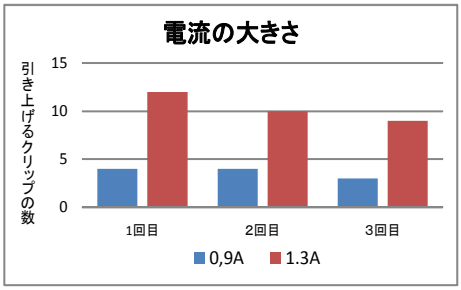
まとめ　電流を強くしたり、導線の巻数を増やしたりする。

↓　このまとめが子どもから出るようにするためには・・・

実験結果を表やグラフで整理する活動をしくむ

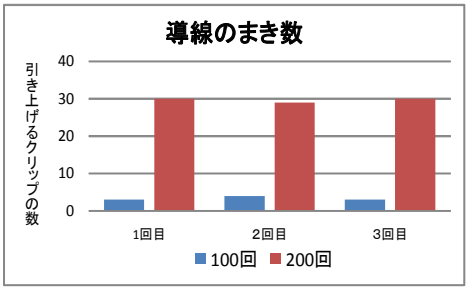
電流の大きさ

電　池の数	電流の強さ	引き上げるクリップの数		
		1回目	２回目	3回目
１個	0.９A	４個	4個	３個
２個	1.３A	12個	10個	９個



導線の巻数

コイルのまき数	電流の強さ	引き上げるクリップの数		
		1回目	２回目	3回目
100回	0.９A	３個	４個	３個
200回	0.９A	30個	29個	30個

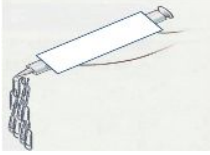


↓　このような実験方法を計画し実験を行うためのめあては・・・

めあて　電磁石を強くする方法を考え、実験によって確かめよう。

↓　この問題意識が生まれるためには・・・

比較



クリップがあまりつかなかった電磁石　　クリップがたくさんついた電磁石

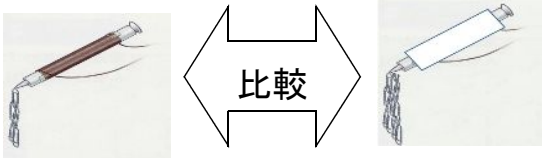
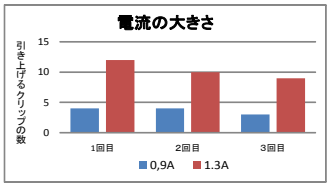
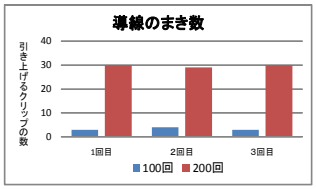
- クリップがつく数の違う２つの電磁石を準備する。
- クリップが少ししかつかない電磁石は、乾電池１個にしておく。
- クリップがたくさんつく電磁石は、巻数、電池の部分をブラックボックスにして提示する。
- ２つの電磁石は、何がどう違うのかを予想させ、電磁石を強くする方法が巻数と電池の数に関係していることをとらえさせる。

(2) 本時の展開について

＜主眼＞

(1) 電磁石を強くする方法を見いだす。
(2) 電磁石を強くする実験を通して、電磁石を強くする方法を理解する。

＜展開＞

段階	学習活動と内容	手立て
導入	1　２つの電磁石を比較し、本時学習のめあてを設定する。  ・導線の巻数の違いの比較 ・電流の大きさの比較	・本時学習のめあてを設定するために、クリップを持ち上げる数の違う２つの電磁石を比較させる。 （よくつく方は、巻数、乾電池の部分はブラックボックスにしておく。）
	めあて 電磁石を強くする方法を考え、実験によって確かめよう。	
展開	2　電磁石を強くする方法を考え、実験計画を立て実験を行う。 (1)各自で実験を行い実験結果を整理する。 ・電流を強くする実験→導線の巻数の統一 ・巻数を増やす実験→ 電流の大きさの統一	・実験方法を計画できるように、４年生で学習した「モーターを速く回す方法」について表にまとめたものを黒板に張る。
	(2)実験結果を学級全体で交流する。   ・電流を強くする実験→電流が大きい方が強い ・巻数を増やす実験→巻数が多いほうが強い	・実験結果を表、グラフに整理させ、実験結果を全体で交流することができるようにする。 （表やグラフは、電流の大きさと導線の巻数に分けて作成させる。）
	まとめ 電流を強くしたり、導線の巻数を増やしたりすると電磁石は強くなる。	
終末	3　これまでの学習を想起し、次時の学習内容を確認する。 ○これまで学習したことを整理する。 ・電磁石の性質　・電磁石を強くする方法 ○次時の学習内容を確認する。 ・電磁石の性質や電磁石を強くする方法をいかしたモノづくりについて	・次時学習への意欲を喚起するために、電磁石を利用してつくったおもちゃを提示する。

小学校　音楽科　第５学年

・題材名　様子を思い浮かべながら、リズムの特徴を生かして歌おう
・教材名　「こいのぼり（共通教材）」（小学生の音楽５“こころのうた”：教育芸術社）

１　教材研究をしよう

(1) まずは、教師自身が楽曲のよさを味わうこと（音楽的な特徴を把握する）

音楽科の授業は、楽曲の教材分析が授業づくりの基盤となります。まずは、教師自身が取り扱う楽曲をしっかりと聴き込んだり、歌ったりしながらそのよさを味わいましょう。本教材「こいのぼり」を聴くと、“付点の弾むリズム”が特徴であることに気付くでしょう。この特徴を基にどのように表現させるのかを教師自身が実際に歌って試し、様々な表現の工夫を考えてみましょう。そうすることで、「子どもたちに何をどのように感じ取らせたいか」「感じ取ったことをもとにどんな工夫をさせたいか」が明確になります。さらには、歌詞の内容を解釈したり、楽曲の背景について調べたりしておくことで、歌詞や背景と音楽的な特徴を関連付けた表現の工夫や鑑賞を仕組むこともできます。

(2) 学習指導要領解説で指導事項を確かめる（〔共通事項〕含む）

共通教材を教える場合、どの教科書も「こころのうた」や「日本の歌」などの題材名が示されています。これでは、学習指導要領のどの内容を指導すればよいかが分かりません。

そこでまず、教科書に示されている「～を生かして歌いましょう」や「～を感じ取って聴きましょう」などの学習課題を手掛かりに、学習指導要領の内容を確かめます。本教材には“リズムの特徴を生かして歌いましょう”や“情景を想像し、旋律の特徴を味わって表現しよう”などと示されていますので、歌唱の指導事項ア～エから適当な事項を設定します。教科書の学習課題から、事項イが指導内容であることがわかります。さらに、「表現を工夫し、思いや意図をもって歌う」ためには歌唱技能が必要になります。そこで、事項ウも必要な内容であることもわかります。

ポイント！

一題材に多くの指導事項を入れると消化不良になります。本題材であれば１～２事項程度が妥当でしょう。

ア　範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌うこと。
イ　歌詞の内容、曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと。
ウ　呼吸及び発声の仕方を工夫して、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌うこと。
エ　各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと。　（歌唱：第５学年及び第６学年）

次に、〔共通事項〕の内容を設定します。本教材の最大の特徴は“付点のリズム”です。この特徴を生かしながら、歌詞の内容や曲想にふさわしい歌唱表現にするためには「速度」「強弱」「フレーズ」などの表現を創意工夫する活動が考えられます。また、楽譜から作者の創作意図を読み取ったり、生徒同士の音楽表現を他者に伝えたりするために音楽に関する記号や用語について音楽活動を通して理解させる必要があります。そこで、本題材では次の〔共通事項〕の内容が必要です。

〔共通事項〕ア(ｱ) リズム、速度、強弱、フレーズ
　　イ mp、mf、f、スラー、クレシェンド、四分休符、ブレス

(3) 題材名は学習内容がわかるように設定する

指導事項が明確になったら、子どもにわかりやすい題材名を設定します。本題材では、学習指導要領の内容、教材曲の特徴、教科書に示された学習課題などから「様子を思い浮かべながら、リズムの特徴を生かして歌おう」と題材名を設定します。こうすると、学習内容がひと目でわかり、「学びのある音楽科の授業」のスタートラインに立てます。

(4) 題材の目標を観点別に設定する

題材名を設定した後は、題材の目標を観点別に設定します。歌唱、器楽、音楽づくり（創作）であれば「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」に関する目標を、鑑賞であれば「音楽への関心・意欲・態度」「鑑賞の能力」に関する目標を設定します。本題材の場合、学習内容から以下のような目標設定が考えられます。

音楽への関心・意欲・態度

歌詞の内容、曲想に興味・関心をもって、歌詞の内容や曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌う学習に進んで取り組む。

音楽表現の創意工夫

リズム、速度、強弱、フレーズなどを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫する。

音楽表現の技能

フレーズごとの呼吸に気を付けて、歌詞の表す様子、曲想にふさわしい表現で歌う。

目標設定の詳しい方法については、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（国立教育政策研究所教育課程研究センター）」を参照（http://www.nier.go.jp/）。

(5) 指導の計画を立てる

目標が決まったら、次に、どの時間にどんな学習するかの計画を立てます。

	○学習内容　　・学習活動	ポイント
第1時	○「こいのぼり」の楽曲の特徴を感じ取り旋律を捉える。 ・範唱を聴いて楽曲全体の特徴を感じ取り、その内容を発表する。 ・歌詞を読んだり、鯉のぼりの写真を見たりしながら、歌詞の表す様子や雰囲気を想像する。 ・歌詞の様子を思い浮かべながら、音程やリズムに気を付けて楽譜を見ながら歌詞唱する。	導入に当たる時間は、 ①関心意欲を持たせる、 ②楽曲全体の特徴を感じ取らせることが大切。
★第2時	○歌詞の表す様子や、曲想にふさわしい表現を工夫する。 ・拡大楽譜で音高をとらえ、曲の山や強弱の変化を感じ取る。 ・曲想を生かした表現を工夫したり、歌詞や旋律の動き（リズムの特徴）に合う「強弱」「速度」を工夫したりしながらグループで歌う。 ・フレーズを感じ取り、グループごとに交互唱する。 ＜詳しくは P37＞	展開に当たる時間は、 ☆ポイントをしぼって表現の工夫をさせることが大切。 ※曲想を生かしたり、音楽と歌詞との関連を考えたりしながら工夫させる。
第3時	○前時までの学習を基に、歌詞の内容や曲想にふさわしい表現で歌う。 ・表現の工夫を生かした表現になるようにグループごとに練習する。 ・工夫した点を紹介しながら発表する。	終末に当たる時間は、 ☆表現の工夫を生かした歌い方ができるようにさせることが大切。

いい歌だな！
～な感じの曲だな。

～なふうに歌うには
○○を工夫すると
いいかな。

思い通りに歌えた！
歌っていいな！

(6) 具体的な学習方法や手だてを考える

計画したら、次に、どのような具体的な学習方法や手だてで指導事項の内容を身に付けさせるのかを考えます。ここでは、「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」の目標達成のための手だてについての一例を紹介します。

音楽表現の創意工夫

リズム、速度、強弱、フレーズなどを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫する。

♪ 歌詞の内容から情景を想像させたり、曲が表す場面の雰囲気を感じ取らせたりする。

- 歌詞の内容を朗読し、意味を理解させる。
- 歌詞の内容を示す写真やイラストから情景を想像させる。 など

- 範唱を聴き、曲想を感じ取りながら身体表現（ハンドサインやリズム打ち、指揮など）させる。

♪ 歌詞の内容や曲想から、１段目と３段目を比較して聴いたり歌ったりして、どんな風に歌うか試しながら表現を工夫し、思いや意図をもたせる。

- 歌詞の内容や曲想から「元気なこいのぼりを表現したいな」（思いをもつ）。そのためには、「勢いよく歌おう」（意図をもつ）。

試行錯誤

「試しながら表現を工夫し」の部分

- 「付点のリズムは勢いよく」、「３段目のところはｍｐで音符も長くなるから少しやさしく」してみよう（意図の深まり）。→ 「青空に悠々と泳ぐこいのぼりを表現したいな」（思いの深まり）。

音楽表現の技能

フレーズごとの呼吸に気を付けて、歌詞の表す様子、曲想にふさわしい表現で歌う。

♪ 学級全体で旋律を練習し、曲の音程やリズムをつかませる。
♪ 母音唱で歌ったり、「ラ」「ル」など響きが確認しやすい言葉で歌わせる。
♪ フレーズごとに区切り、音の処理を丁寧に歌わせる。
♪ 楽譜にブレス記号や自分の表現記号（旋律に沿った線や丸など）を書かせる。
♪ 録音・録画で自分の演奏を振り返り、課題点をくり返し練習させる。
♪ チェック方式で部分的に歌わせる（詳細は第３章を参照）。

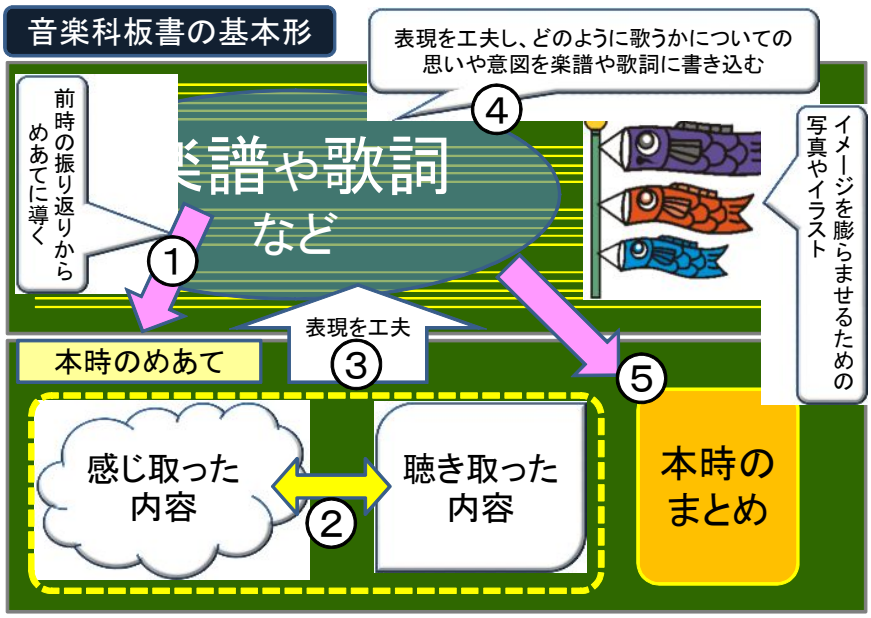
コラム：『目的に応じた指導形態を』

いつもみんなで一緒に歌ったり、演奏したりすることは楽しく、素晴らしいことです。しかし、それだけでは個人の力は育ちません。適切な指導形態による活動で、子どもたちは主体的に歌ったり演奏したりして、ねらいを達成することができます。

① 個人の活動 → 歌唱や器楽で反復練習を行い、基本的な技術を身に付けさせたいとき
② ペアの活動 → 個人の聴き方や感じ方を交流させたり、相互評価させたりしたいとき
③ 少、中人数の活動 → 器楽アンサンブルや合唱パート内で多様な意見を交流させたいとき
④ 多人数の活動 → 聴き合ったり、全体合唱・合奏のよさや喜びを味わわせたりしたいとき

(7) 板書計画を立てる

音楽科における板書は、一瞬で消えゆく音や音楽を文字や形に残す大変な作業です。音楽から得られる膨大な情報を取捨選択し、構造的な板書になるように、次の①～⑤に留意しましょう。



① 楽譜を見せながら前時の録音を聴き、本時のめあてを導く。
② 感じ取った内容と聴き取った内容を関連付けやすいように並行に書く。
③ ②の内容をもとに、表現の工夫を楽譜や歌詞に書き込む。
④ 表現を工夫した後に思いや意図を③以外の色で書き込む。
⑤ ②④の内容を文章でまとめる。
（記述内容は次頁参照）

(8) 教材、教具を準備する

本題材では以下の教材、教具を準備します。

【教師が使う物】	【子どもが使う物】
・音源ＣＤ ・縦書きの拡大歌詞 ・鯉のぼりの拡大写真 ・拡大楽譜 ・勇ましく泳ぐ鯉のぼりの映像（準備できれば） ・音楽のもと（要素）カード ※本題材では「リズム」「速度」「旋律」「強弱」「フレーズ」	・ワークシート ・付箋紙

これらの教材、教具には以下のような効果と注意点があります。

教材、教具	○長所　△注意点　×短所
音源CD	○楽曲全体を捉えられる。 △多くの演奏を聴き比べてねらい達成に最適な音源を選ぶ。
映像DVD	○演奏の様子や楽曲のイメージを一目でつかめる。 ×はじめから見せるとイメージを強要してしまう可能性がある。
拡大歌詞・楽譜	○全員が同じ目線で音楽表現でき、共通理解も図りやすい。 △ねらいに応じて部分的に提示する必要がある。
写真やイメージ画	○楽曲のイメージをもったり背景を想像したりしやすい。 ×はじめから見せるとイメージを強要してしまう可能性がある。
音楽のもとカード（要素カード）	○どの要素に着目して聴いたり工夫したりするかの着眼点が分かる。 △要素の有り様を示したカードも用意すると語彙が増える。
付箋紙	○各自の考えを提示でき、考えの変化に応じて操作しやすい。 △全体に見せるときは実物投影機等を使って拡大すること。

2　1時間の展開を考える

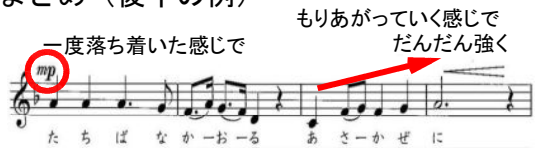
(1) ゴールから先に考えて授業をつくる

授業のゴール（本時主眼）

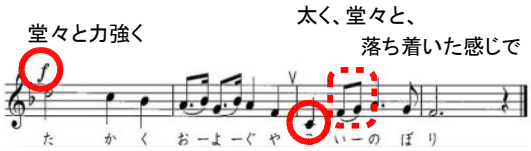
楽譜から曲の特徴をとらえたり、歌詞にふさわしいと思われる表現を何度も歌って試したりして、曲想に合う表現を工夫することができる。

これを子どもの言葉に直したものが「まとめ」になる。

まとめ（後半の例）



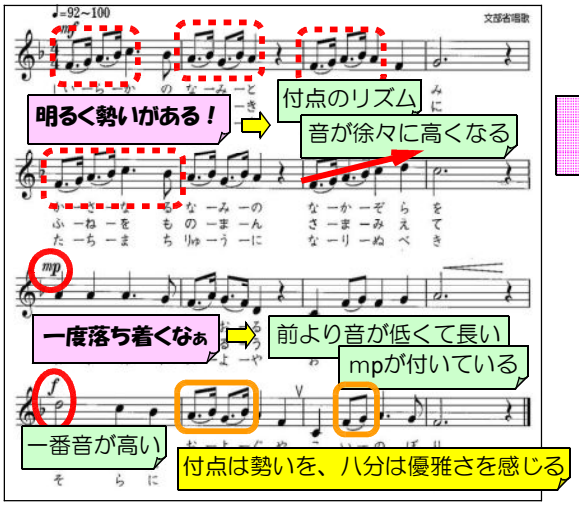
理由：前より音が低くなって音も長いし、mpも付いているから。　音が上に向かっているし次の節や歌詞に向かってもりあげたいから。



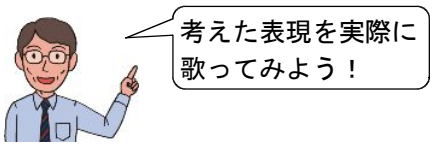
理由：堂々とした姿の歌詞で一番高い音でフォルテも付いているから。　音が低くなり、八分音符なので落ち着いた感じがするから。

このまとめが子どもから出るようにするためには…

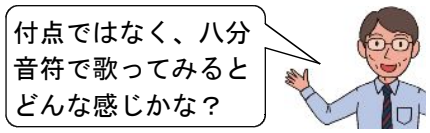
○　拡大楽譜から旋律の動きをとらえ、楽曲の山やリズムの変化に着目させたり、表現の工夫を付箋紙に書いて該当箇所に貼らせたりする。



☆　表現の工夫は、**必ず歌って確認**し、その都度、付加修正をする。



☆　あえて意図とは逆の表現を提示することで曲想にふさわしい表現に気付かせることもできる。



表現を工夫し、思いや意図をもつという課題を示しためあては…

めあて　歌詞の内容を考え、曲想に合う表現を工夫しながら歌おう。

この課題意識が生まれるためには…

○　録音した自分たちの演奏（歌）を聴かせ、「歌詞にふさわしい歌い方かな？」「曲の雰囲気を上手く表現できているかな？」と問いかけたり、自分たちの演奏と範唱ＣＤを比較したりして、足りないと思う部分を出し合う。

(2) 本時の展開

♪本時は、曲の“ヤマ（一番のピーク）”の表現に焦点化した事例

＜主眼＞

○　楽譜から曲の特徴をとらえたり、歌詞にふさわしと思われる表現を何度も歌って試したりして、曲想に合う表現を工夫することができる。

＜展開＞

段階	学習内容と活動	発問と手立て
導入	○　「こいのぼり」を通して歌い、課題を見つける。 ○　録音を聴きながら、自分たちが表現したい思いが伝わってこない部分に印を付け、課題を見つける。 大きな声で歌えていてGOOD！でも、歌詞が表す様子を音楽で上手く表現できているかな？ 大きな声では歌えているけど、優雅に勇ましく泳いでいる様子には聞こえないなぁ… めあて　歌詞の内容を考え、この曲にあう表現を工夫しながら歌おう	・課題を見いださせるために、録音しておく。 ・歌詞の内容と自分たちの表現が一致してない部分に印を付けさせる。
展開	○　曲の“ヤマ”を感じ取る。 「4段目」が力強いな。 もう一度、原曲を聴いて“一番強調したいと思うところ”を見つけよう。 ○　曲の“ヤマ”の歌詞が表す様子をとらえ直す。 ヤマの部分の歌詞はどんな内容かな？ 「1～3番ともに悠々と泳いでいる様子だな。」 ○　曲の“ヤマ”の部分について、歌詞にあう力強い様子にふさわしい強弱表現を工夫して歌う。 前半と後半で曲の雰囲気が変わるけど、それに合う表現ってどんな表現かな？ 「前半は、はずむリズムで明るく歌ったな。」、「後半は、長い音符が多いし、悠々と泳いでいる様子だから豊かな感じで歌ってみよう。」、「フォルテも付いてる！」 ○　さらに曲の“ヤマ”を生かす表現をするために３段目にある“ｍｐ”と“クレシェンド”の強弱を工夫する。 常に強い感じで歌えばイメージが伝わるかな？「朝風に」は音の高さや強弱はどうなってるかな？ 「少し優しい様子の歌詞だし、4段目を生かすために、作曲者はmpにしたのかな。」 「“朝風に～”は音がだんだん高くなっているから、徐々に強くして（練習して）みよう。」「遅すぎない方がいいな。」	・４段目の「高く泳ぐや」「物に動ぜぬ」「空におどるや」に着目させる。 ・作曲者の意図をとらえさせるために、前半と後半のリズムの違いや強弱記号（mf → mp → f）の変化に着目させる。 ・よりふさわしい強弱を考えさせるために、“ヤマ”の前にあるクレシェンドと音高とのかかわりにも着目させる。 ・楽譜上の mp の意味を考えさせるために、４段目の“ｆ”と対比し歌わせる。
終末	○　学習した表現を生かし、全員で「こいのぼり」を歌う。 ３～４段目で工夫した内容を生かして、１～２段目も自分なりに工夫しながら歌ってみよう！ 「長い音符は堂々と歌ったり、3段目からだんだん強くして歌ってみたりすると、優雅に勇ましく泳いでいる様子が表現できた！」 「1～2段目も、明るくはずんだ歌い方をすると、元気な“こいのぼり”を表現できた！」	・上手く歌えていなくても、表現の工夫ができていれば賞賛する。（主眼は表現の工夫）

小学校　外国語活動　第６学年

・単元名「できることを紹介しよう」（「Hi, friends! 2」Lesson3 "I can swim."）

1　教材研究をしよう

（1）外国語活動の目標は、コミュニケーション能力の素地の育成です

外国語活動の目標である「コミュニケーション能力の素地を養うこと」は三つから構成されています。具体的には、第一に「言語や文化について体験的に理解を深めること」、第二に「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること」、そして第三に「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること」です。そして、これらの三つを「外国語を通じて」実現をします。

小学校学習指導要領解説「外国語活動編」 P 7（第１節　外国語活動　目標）
外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、**コミュニケーション能力の素地を養う**。

（2）単元の内容は、「解説」のどこに書いているかを確かめます

外国語活動の「目標」は、３つから構成されています。「内容」は「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができる」、「日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を図ることができる」の二つです。これら二つの内容を「外国語を通じて」行うことが、結果として「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ことになります。

外国語活動の内容は、下記の通り２学年間を通して設定されているため、各学校では、児童や地域の実態に応じて、あらかじめ学年ごとの目標や内容を設定しています。そこで、「解説」で外国語活動の目標や内容を確認するとともに、各学校の「外国語活動推進計画」や「年間指導計画」で、自校の目標や内容の詳細を確認します。また、その単元で取り扱う言語材料が、どのような「コミュニケーションの場面」や「コミュニケーションの働き」であるかを「解説」（P21～24）で把握します。

小学校「解説」外国語活動編 P9～P10

［第５学年及び第６学年］
1　外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指導する。
(1)外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
(2)積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。
(3)言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。
2　日本語と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。
(1)外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
(2)日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
(3)異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。

(3) 単元の目標をはっきりとさせます

単元の目標を外国語活動の評価の観点（「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語への慣れ親しみ」、「言語や文化に関する気付き」）に沿って設定します。

＜単元の目標 例＞
○　積極的に友だちにできることを尋ねたり、自分の「できること」や「できないこと」を答えたりしようとする。**【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】**
○　I can ～. / I can't ～. などの表現に慣れ親しむ。　**【外国語への慣れ親しみ】**
○　スポーツ、楽器の演奏などの英語表現と日本語（外来語）表現との違いに気付く。
【言語や文化に関する気付き】

次に、単元の目標に基づく評価規準を設定します。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】の目標として用いられる「積極的に話したり聞いたりする」とはどんな姿でしょうか？評価規準は、「自分から行動する」、「届く声で話す」、「たくさんの人とかかわる」などその単元、時間でめざす具体的な子どもの姿で表すことが必要です。（「第３章　外国語活動」を参照）

どのように話したり聞いたりする姿が良いかが、誰にでも分かるように書きます。

＜評価規準 例＞
・　自分ができることやできないことについて、ジェスチャーや絵などの非言語で補足しながら、はっきりと伝わるように話したり、友だちのできること、できないことについての話を反応しながら聞いたりしている。（様相観察、自己評価）
・　I can ～. / I can't ～. を用いてできることやできないことを話したり聞いたりしている。（様相観察）
・　スポーツ、楽器の演奏などの英語表現と日本語（外来語）表現とでは、発音やアクセントが異なることに気付いている。（記述）

＜参考資料＞国立教育政策研究所教育課程研究センターHP 『評価の規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/11_sho_gaikatu.pdf
福岡県教育センターHP『小学校外国語活動指導マニュアル』http://www.educ.pref.fukuoka.jp

(4) 目標を達成できるような活動を選定します

外国語活動では、歌、チャンツ、ゲーム、クイズ、インタビュー、ロールプレイ、スキット、スピーチなどの様々なコミュニケーション活動を単元の中にバランスよく位置づけて、児童を目標達成へと導きます。それぞれの活動が、児童にとって楽しいだけでなく、目標に向かわせることが大切です。

（例）単元名「できることを紹介しよう(Hi, friends! 2 Lesson3 I can swim.)」
まず、第１時では、「できる」「できない」などの表現がどのような場面で使われるかについて理解させるとともに、本単元におけるゴール像をつかませます。そのために、第４時に行う**スピーチのデモンストレーション**を教師が行います。
次に、第２・３時では、「できる」「できない」などの表現に慣れ親しませます。

そのために、**チャンツ**や**クイズ**などで聞くことに慣れ親しませた後で、**インタビューゲーム**などを通して話すことに慣れ親しませます。また、インタビューゲームでは、聞き手のどのような反応が好ましいかについて考えさせた上で、実際にインタビューゲームの中で使わせます。

最後に、第４時では、「できる」「できない」などの表現を用いて、自分ができることを発表する**スピーチ**をさせます。スピーチの際には、知っている英語やジェスチャーなどを駆使して伝える体験をさせます。

(5) 活動に必要な教材の準備をします

（例）単元名「できることを紹介しよう(Hi, friends! 2 Lesson3 I can swim.)」

○絵カード（動作を表す語） ※ Hi,friends!指導用ＤＶＤから印刷可能 板書における絵カードの活用例	○ Hi,friends!指導用ＤＶＤ ○コンピュータ ○スピーカー ○電子黒板等 Hi,friends!DVD 教材 液晶ＴＶによる資料提示

(6) 板書計画をします

＜板書例＞

1時間の活動の流れを示し、見通しをもたせる。

活動のポイント

＊＊ Hi,friends!DVD 教材の音声再生に関する不具合について＊＊

「修正パッチ」を文部科学省のＨＰよりダウンロードすることができます。URL http://mext-hifriends.net/ から、該当データをダウンロードして保存してください。手順の詳細は、掲載されているマニュアルを参照してください。

2　1時間の展開を考える

(1) 本時の展開　「できることを紹介しよう(Hi, friends! 2 Lesson3 I can swim.)」第3／4時

＜主眼＞

○　尋ねたいことが伝わるように話そうとする。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

○　Can you ...? を用いてできることを尋ねる表現に慣れ親しむ。

【外国語への慣れ親しみ】

＜展開＞

段階	児童の学習活動
導入／展開／終末	1　**チャンツで、前時のビンゴゲームで使用した表現を想起し、本時のめあてをつかむ。** ・リズムに合わせて、前時までの表現を振り返る。 ・本時の活動「インタビューゲーム」の教師のデモンストレーションを見て、どのようなことに気をつけて尋ねるとよいかを考える。 めあて **友だちの「できること、できないこと」について、尋ねたいことが伝わるように質問しよう。** 2　**インタビューゲームをする。** ・友だちに尋ねたいことを 11 の動作の中から二つ選び、残りの一つには尋ねてみたいことを自由に書く。 ・教師の「インタビューゲーム」のデモンストレーションを再度見て、尋ねたい事柄の英語表現が分からない場合の伝え方について考える。 ・Can you ...?でインタビューし合い、結果インタビューシートに○や△で記入する。 3　**Who am I? クイズをする。** ・教師の紹介を聞いて、学級の誰を紹介しているかを当てる。 4　**本時学習をまとめる。** ・ふり返りシートに本時の活動について自己評価や気付いたことを記入する。 ・本時活動を通して気付いたことを発表する。 まとめ **ジェスチャーで表したり、別の英語で表したりすると伝わる。**

「チャンツ」について

チャンツとは、英語のリズムやイントネーションが崩れないように、そのままリズムやビートに乗せ、英語のフレーズを何度も口ずさむ活動です。これによって、日本語にはない文の強勢やアクセント、発音、英語の自然なリズムに慣れ親しませることができます。また、語のかたまり（チャンク）ごとにリズムに乗せるので、フレーズ全体を自然にインプットすることに役立ちます。

「インタビューゲーム」について

インタビューゲームは、ペアや班の形態で言葉やジェスチャーを使いながら自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いて理解したりさせる活動です。

中心となっている英語表現を使わせることをねらいとするとともに、「より多くの人と」「だれとでも」「相手を見て」など、コミュニケーションにかかわる態度についての目標をもたせて行わせます。

「Who am I? クイズ」について

教師が言うヒントをもとに、児童にだれについて話しているかについて当てさせるゲームです。例えば、「I can play soccer. I can play the piano. I can do Karate. Who am I?」というヒントをもとに、児童は「Takashi!」と当てます。小学校では he や she などの三人称は扱わないことが多いことから、教師は出題したい人物になりきってヒントを言うことがポイントです。

(2) ゴールから先に考えて授業をつくる本時の展開

授業のゴール
Can you ...? を用いて尋ねたり答えたりするとともに、尋ねたいことが相手に伝わるように別の言葉で言いかえたり、ジェスチャーで補足したして伝えようとする。

まとめ
Can you ...? を使うとできるかどうかを尋ねることができ、英語での言い方が分からない場合はジェスチャーで表したり、別の英語で表したりするとより伝わる。

めあて
友だちの「できること、できないこと」について、尋ねたいことが伝わるように質問しよう。

図１　インタビューシート

この「まとめ」が子どもから出るようにするために、上のインタビューシートのブランクに、聞いてみたい事柄を記入させます。記入した事柄の英語表現を知らない場合は、他の知っている言葉で言い換えたり、ジェスチャーで表したりする体験をさせます。

(3) 1単位時間の活動の仕組み方の基本

ア　導入　ーたっぷりと音に触れさせますー

「聞く」、「まねる」活動を仕組んで、英語の音に慣れ親しませます。例えば、チャンツ、キーワードゲーム、ポインテイングゲームなどの活動を用いて、楽しみながら何度も繰り返して本単元の表現を聞かせます。聞き慣れてきたら、教師の発話を真似て言わせるようにします。楽しみながら、何度も繰り返し聞いたり言ったりすることで聞いたり、言ったりすることに慣れ親しませることができます。

イ　展開　ー活動を通して本時の目標にせまらせますー

慣れ親しんだ表現を用いて、話したり聞いたりする体験をさせます。例えば、インタビューゲーム、クイズ、スピーチ、ショー・アンド・テルなどで、言いたいことを知っている外国語で話したり聞いたりさせます。この時、児童が「伝えたい。」「聞きたい。」というような話題を設定することが大切です。

ウ　終末　ー体験を通してできたこと、分かったことをまとめさせますー

本時の体験でできたこと、分かったことなどを「めあて」に沿ってまとめます。まず、「ふり返りシート」に本時の体験活動について自己評価させたり、気付いたことを各自に記入させたりします。次に、各自の気付きを全体の場で発表させ、教師がそれを集約して板書します。

－第　3　章－

各 教 科 の 技 術

どの教科にも「これだけは身に付けてほしい」という技術があります。ここでは、各教科ならではの技術を3つにしぼって紹介します。

国語科

国語科は、実生活の基盤となり、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付ける教科です。言葉を通じて的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉を伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを求めています。

1　音読指導について

(1) 国語科における音読の種類と効果・ねらい

内容の理解を促す音読となるよう動作を加えたり、速さや強弱を変えたりします。

例えば、次のような音読指導が考えられます。

○追い読み　〔方法〕教師や子どもが読んだ文と同じ文を読む。
〔効果・ねらい〕単元のはじめなど、句読点、漢字や言葉、アクセントに気をつけて正確に読ませる場合。

○一斉読み　〔方法〕全員で一斉に読む。
〔効果・ねらい〕全員に読む機会を保障する場合や何回も読ませる場合、今日の学習場面を読ませる場合。

○一文交代読み　〔方法〕教師と子どもが一文ずつ交代しながら読む。
〔効果・ねらい〕テンポをつかませて読ませる場合。

○一人一文読み　〔方法〕一人一文ずつ立って読ませ、次に読む人も立って待たせる。
〔効果・ねらい〕しっかり声を出す指導を行ったり、その子の音読の力を把握させたりする場合。

○リレー読み　〔方法〕形式段落や意味段落ごとに交代して読ませる。
〔効果・ねらい〕段落と段落のつながりを把握させる場合。

○役割読み　〔方法〕登場人物などの役割を決めさせて読ませる。
〔効果・ねらい〕書かれている内容を理解させる場合。

○対話読み　〔方法〕①　ペアで教科書を取り替え、読み手は聞き手を意識した読みを、聞き手は読めていないところに鉛筆で線を引く。
②　お互いに読み合った後、相手が読めていないところを具体的に分かりやすく伝える。
③　繰り返していく中で、読めるようになったところの線を消す。
〔効果・ねらい〕相手を意識した音読や書かれている内容を理解させる場合。

(2) 指導のポイント　－全体指導と個別指導で伸ばす－

音読・朗読の基礎的技能には、発音・発声・間・リズム・アクセント・イントネーション・プロミネンス(強調・緩急)・速さなどがあります。正しく、美しく、分かりやすい音読をするために、次のような指導を通して技能の習得をめざします。

1　よい姿勢で
① 立つ…背筋を伸ばし、足を肩幅に開き直立。あごを引き、腹をへこませる。
② 座る…背筋を伸ばし、椅子に浅く腰掛け、あごを引き、腹をへこませ、両足の裏を床につける。机と腹の間は握り拳一個分の空間をつくる。

2　正しい呼吸(腹式呼吸)
・腹部に手を当て、へこませるように押しながら、息の続く限り句読点を無視して声を出して読む。限界になって大きく吸うと、自然と腹に息が入る。これを数回繰り返すと、コツが分かります。

《小学校第１学年の段階では》

○　正しい口形指導(母音の口形指導)　※小学校第１学年の国語科教科書に写真掲載。
・鏡を見ながら友達同士で教え合ったりして口形練習する。

○　滑舌(舌をなめらかに)
・レロレロ体操する(例えば「カエルの歌」のメロディーをレロレロで歌う)。
その際、徐々にテンポを速くするとともに、一音一音をはっきりさせる。

２　作文指導について

(1) 指導のポイント　ー書く機会・方法・意欲がポイントー

多くの子どもが作文を書くことを好まない状況があります。こうした子どもたちに作文を書く意欲をもたせるためには、まず書きたくなる題材の設定と、誰に対して書くのかという相手を設定することが重要です。

また、作文用紙に向かって黙々と書くだけでなく、写真や映像を見ながら、あるいは音を聴いたり何かに触れるなど五感を働かせて書くようにします。そして、友だち同士で「伝わるか」を規準に評価させる必要があります。

１　書きたくなる題材の設定を

・時には自分以外のもの(他人や動物、物など)になりきって書くなど、普段とは異なる視点やテーマを与えて書く意欲を刺激します。

２　書き出しでの抵抗感の軽減を

・書き出し方がわからず、全く書けない子どももいます。そこで、書き出しだけは教師側がモデル文を提示したり、題材に対する自分の考えや思いを縦罫線のみが入った小さめの用紙に書かせたりします。

３　書く機会の設定を

・書くことへの必然をもたせることが大切です。例えば、日誌に「今日一日は私にどんな成長をもたらしたか」や授業後の感想に「この勉強の中で私はどう変わったか」などを短作文で書かせてみましょう。

４　書き方の学び合いを

・子どもの実態に応じて教師が書いた作品や同じ題材で書かれた作文を比較させ、分かりやすく伝えるための工夫や気づいた点を発表し合うことで書き方の視点を学びます。

３　漢字指導･書写指導について

(1) 漢字嫌いを生まない　ー楽しく習得できるようにするー

漢字を苦手とする子どもの多くは、「部首」や「漢字の由来」を知らないということです。

例えば、「２分間で『同じ部首の漢字』や『ある漢字が入った熟語』を１０個書き出させ、部首の意味や由来などについて、漢字辞典を使って漢字学習ノートに整理させます。そのうえで、ノートを使った「漢字版クロスワードパズルを作ろう」や「意味から漢字熟語を書く」といったゲーム形式を取り入れた学習を行うと、思考しながら楽しく漢字を習得できます。

(2) 言語事項を取り立てた学習を設定する　ー言葉の特徴やきまり、書写指導を確実にー

１　国語辞典の引き方について　ー授業での活用のためにー

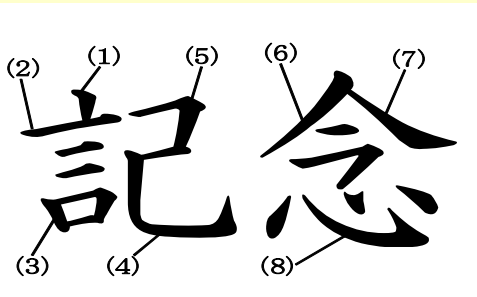
・言葉の意味や使い方、漢字で書く時の表し方などを調べるときに使います。「見出し語」「つめ」「はしら」などの用語を教えた後に、見出し語の配列のきまり(五十音順、清音・濁音・半濁音の順など)を実際に引きながら確認します。

２　漢字辞典の使い方指導について　ー漢字学習での活用のためにー

・漢字の読み方、筆順、画数、さらにはその意味や使い方などを調べるときに使います。子ども達が苦手としている漢字も、部首、音訓読み、成り立ちなどを知ることにより、意味のある文字として学習を進めていきます。

３　書写指導のポイント

・書写の学習では、「とめ、はね、はらい」や「字形」など、難易度を上げながら確実に指導します。特に、(1)点(2)横画(3)縦画(4)曲がり(5)折れ(6)左払い(7)右払い(8)そりの８つの基本点画を意識した楷書を書かせます。また、学習や生活に役立てる態度を育てるために、手紙や封筒、はがき、原稿用紙の書き方やノートのまとめ方、荷物の送り状、のし袋や願書の書き方なども合わせて指導します。**※国語科や書写の教科書に掲載**



社会科

社会科の学習内容は、過去・現在・未来における社会の出来事（社会事象）です。授業ではそれらを具体的にとらえる資料が必要です。ここでは、この資料の用い方を紹介します。

1　グラフや文献等の資料について

(1) グラフや統計資料の読み取らせ方について

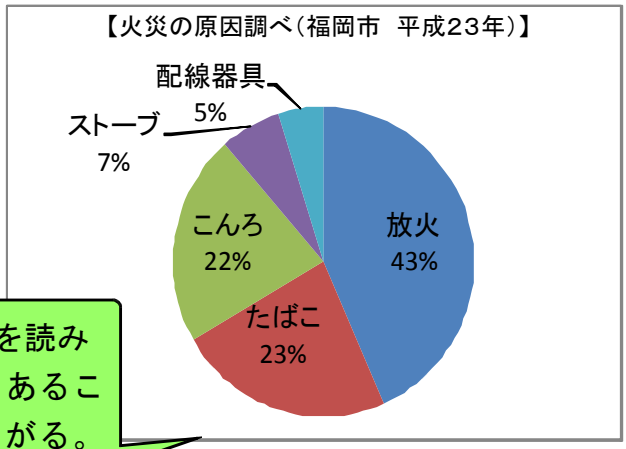
グラフや統計は社会の動きやその変化の特徴を表してます。抽象的な文字、数量、グラフから必要な情報を以下のように取り出す指示が必要です。

①グラフや資料から何を読み取ったらよいのかを指示する。

まず標題・作成時期・調査期間を確認し、次に数値を見ます。最大、最小の数量値や変化が激しい部分などに着眼させます。

②何と何を比較するのかを具体的に指示する。

右のグラフは中学年単元「安全なくらしを守る」で提示したグラフです。第５学年算数で学習する割合によるグラフです。こうしたグラフも「『放火』と『こんろ』を比べてごらん。」と指示することで約２倍になっていることがわかります。



火災の原因に放火が多いことを読み取ることで、その防止が急務であることがわかる。＝学習問題につながる。

(2)　新聞や雑誌の記事などの読み取らせ方について

②の見出しを読ませ、朝市が人気である理由を「出荷費用が減っていることや、小さい魚も売っていることから考えさせる。

新聞などは文字が多いので、配付前に、何の記事なのかを説明した上で、どこを読んだらよいかという目的意識をもたせることが、情報を読み取らせるポイントです。

また、発達段階や子どもの実態に応じて必要な箇所にアンダーラインを入れて強調したり、難しい語句には注釈をいれたりするなどの加工しましょう。

また、日頃から家庭で新聞を読ませ、読み取る力を育成することも有効です。

①の見出しを読ませ、「なぜ朝市が人気なのか」を予想させる。

２　写真や動画など映像資料について

テレビやインターネットから入手したり、教師が取材で撮影した映像資料は、社会科の授業において、実感を伴った社会事象の理解ができるとても有効な資料です。

(1) 理想は３０秒以内で　最大でも１分間を目安に編集しよう。

映像は、写真やイラストのように静止していないので、時間とともに情報量が増えていきます。そのため映像資料は短く編集し、どこを観たら（聞いたら）よいかを焦点化して視聴させます。

(2) テロップを入れるかキーワードを板書で提示しよう。

自分が取材した映像は、編集の際にテロップを入れると伝えたいことが明確になります。テレビなどで放送された番組は、キーワードになる言葉を視覚的に板書で示します。子どもにどんな情報を取り出させたいかを決めることが大切です。

テレビニュースのテロップが参考になります。

(3) 何を見せるかをはっきりさせてから

映像資料のよさは、①場の感じ②人や物の動き③気持ちをより実感を伴って伝えられることです。①～③から１つを重点化して見せると効果的です。

３　GT（ゲストティーチャー）とは、綿密な打ち合わせを行うこと

ＧＴは子ども相手へ、説明した経験が少ない場合が多いものです。こうしたＧＴへ何を、どのくらい話してほしいと事前に伝える必要があります。また、子どもへはＧＴの話や作業の様子などから何をとらえさせたいのかを事前に示し、考えさせることも大切です。

ＧＴは専門的な内容が伝わる道具や作品などを用いて話したり、実演したりしてもらうと伝えたいことがわかりやすい。

＜ＧＴを活用するときの３ポイント＞

１　授業中に子どもが質問する場合は、事前に質問を伝えておき、答えを確認しておく。

２　事前にシナリオに書いて相手に読んでもらい、ＧＴと教師で学習のねらいや内容を共通理解しておく。

３　相手が忙しい時は職場等でインタビューし、録画映像を編集の上、授業中に見せる。

算数・数学科

算数科の特徴として、次の２つが上げられます。
１．学習内容の系統が強いこと
２．算数（数学）的活動を学習内容としていること
　そこで、これら２つに関連して次の３つの授業のポイントを示します。

１　授業スタイルを選定して、学習内容と数学的な見方や考え方を育成します。

(1)　数学的な考え方を育成する授業（しっかり考えさせ育てる授業）

　この授業スタイルは、子どもたち主体で進められる学習形態で、子どもの活動や追究が中心となります。教師がいかにして子ども自身に課題意識をもたせ、その課題意識を連続発展させていくかが重要です。

(2)　学習内容の理解を深める授業（しっかり教え育てる授業）

　この授業スタイルは、教師主体で進められる学習形態で、講義・説明が授業の中心となります。この授業スタイルにおいても、子どもに活動させたり追究させたりしますが、最終的には教師が子どもたちに説明・補充を行います。

(3)　学習内容の定着を図る授業

　この授業スタイルは、上記２つの授業スタイルで学習した内容・方法を再学習し、確実な技能の定着を目指す学習形態です。

授業のねらいから適した授業スタイルを選択し、学習過程を組み立てます。
基本的な展開例を下に示します。

	めあての例	学習過程	学習内容例
数学的な考え方を育成する授業	○○の～を調べよう(確かめよう) ・～の考えで　・～の方法で ○○の表し方や約束に基づいて～を考えよう	課題 → めあて → 見通し → 追究 → 交流 → まとめ 課題 → 見通し → めあて → 追究 → 交流 → まとめ	(小4)L字形の面積 (中2)星形五角形の内角の和
学習内容の理解を深める授業	○○を知り、～ができるようになろう ○○を1として、～を表そう	課題 → めあて → 説明 → あてはめ → 交流 → まとめ めあて → 追究 → 説明 → あてはめ → 交流 → まとめ	(小2)筆算の仕方 (小3)コンパスの使い方 (中1)投影図のかき方
学習内容の定着を図る授業	○○の練習(ゲーム)をしよう (まとめをしよう)	めあて → 練習1 → 練習2 → 練習3	・計算練習

２　学習内容の系統を踏まえて授業をつくる

　算数・数学は、これまで学習してきた内容を基に、概念や法則を拡大していく教科です。そのためには、小・中学校の他学年の教科書を見比べて学習内容（教材）を把握したり、同学年の複数の教科書を見比べたりして、学習内容の系統性を知り、指導に生かすことが大切です。

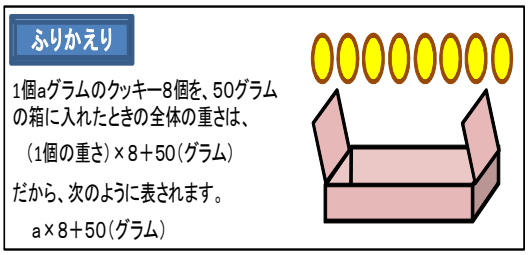
(1)　何を学習してきているか？

　例えば、小学校３年生の三角形の学習をする前に、１年生、２年生で何を学んで

きたかを確認することができます。また、「頂点」ということばを使ってよいかなども知ることができます（小学校学習指導要領解説 算数編 P40）。解説書は学習の連続性を読み取るための大切なツールです。

(2) どこの学習に活かせるか？

単元の導入ページには脚注や右図のような挿絵などで既習事項を整理しているものがあります。これを使って本時の未習事項をどのように教えたらよいのかを考えます。

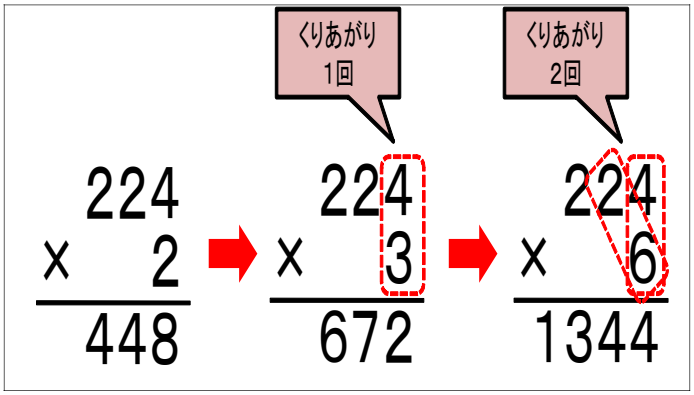


3　問題の数値や事象を変えて、意欲を高める

単純な問題のくり返しでは、子どもの学習意欲は下がって逆効果です。次の３つのねらいに応じて問題をつくっていきましょう。

(1) 数値を変えて、同じ解決をくり返す

かけ算の筆算など、くり上がりのないものからあるものへと難易度を上げるといった場合には、乗数の数値のみを変えることが有効です。何をどのような手順で理解させるかによって、どの数値をどのように変えていくかを考えることが大切です。

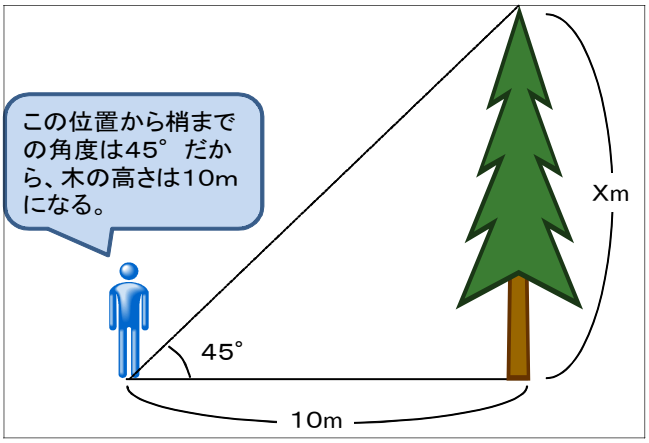


(2) 解決のスピードを上げる

時間と問題数に制限を加えて解決の能力を高めます。授業開始後の前時復習や、終了前に行う練習問題などで行うと効果的です。

(3) 実の場面で解決させる

相似の学習などの発展問題として、校舎や木の高さなど、実際に測量できないものを求める場合があります。（右図参照）日常生活など、実社会で利用されている算数や数学のよさを実感すれば、学習意欲も高まります。毎時間ではなく、トピックとして取り上げると効果的です。



【直角二等辺三角形の性質を利用して、木の高さを求める場合の例】

(4) いろいろな考え方を組み合わせる問題をつくる

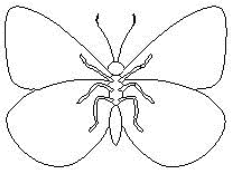
どこから解いたらよいのかを見通すことで、答えを求めるまでの順序や立式する数を考え、習得した公式や作図の方法を活用する力が育ちます。また、解き方について話し合う活動を通して複数の考え方を身に付けることができます。

理　科

理科は自然事象を学習の対象とし観察・実験を行い、科学的な見方や考え方を育成します。そのためには、学習の対象となる自然事象を何にするのか、観察・実験したことをどのように言語化していくのか、そして、観察・実験そのものをどのように進めていくのかが大切になります。

1　取り扱う自然事象について

理科の学習では、観察や実験を行い科学的な言葉や概念を子どもに理解させることが大切です。このときに観察・実験の対象を決めなければなりません。ここでは、第３学年の単元「昆虫」を例に説明します。学習指導要領解説では、昆虫について、昆虫の成長のきまりや体のつくりについて学習することが示してあります。しかし、取り扱う昆虫については、明確に述べていません。自然界には多くの昆虫が存在するので、どの昆虫を観察して昆虫の概念を形成させるかを決める必要があります。昆虫の場合は、変態の仕方、体の特徴のわかりやすさ（典型的である)、地域に見られる昆虫といった観点から観察する対象（昆虫）を決めていくことが大切です。次に、取り扱う昆虫が決まったら、学習の進め方を決めます。学習の進め方として次の２点が考えられます。１つの昆虫から昆虫についての概念を形成し他の昆虫を見ていく方法です。もう１つは、２つ以上の昆虫を比較して、共通点を見出し昆虫概念を形成していく方法です。前者は、モンシロチョウの育ち方や体のつくりの学習を行い、昆虫の概念を形成した後にトンボやバッタについてもモンシロチョウと同じような特徴があるかを調べていく方法であり、後者はモンシロチョウとトンボ，バッタの学習を行い、共通性を抽出し、昆虫の概念を形成していくという方法です。



2　理科における言葉の指導について

(1) 感覚的な言葉から客観的な言葉へ

観察・実験して気づいた点を発言したり、ノートに書くときに、すごかった、おもしろかったといった表現が見られます。これは、感覚的な言葉です。基本的な観察・実験の観点は、「色、形、大きさ、数」になるので、「色は・・・でした。形は・・・でした。」といった客観的な言葉で表現しなければなりません。

子どもは、「暑い、寒い」などの言葉も用いますが、これも感覚的な言葉です。例えば、「今年の夏は昨年の夏より暑かった」と表現します。この表現を「今年の夏の平均気温は28度で、昨年の夏の平均気温が25度だったので、今年の夏は昨年の夏より暑かった。」と言えば、客観的な表現となり、誰もが納得できます。観察・実験で気づいたことの発言やノートへの記述が、感覚的な言葉から客観的な言葉へ変更することが大切です。

(2) 命題として表現

理科のきまりや仮説、事象の説明は、命題で表現します。命題とは、「真偽を判定できる文であり」「ＡはＢである。」「Ａを○○すると、Ｂになる。」の形式で、下記のように表現します。

「人の呼気には、二酸化炭素が多く含まれている。」
「石灰水に二酸化炭素を溶かすと、石灰水は白くにごる。」
　よって
「人の呼気を石灰水に通すと、石灰水は白くにごるであろう。」

３　観察･実験の留意点ついて

(1) 安全に観察・実験を行うこと。

観察・実験は、安全第一です。そのために次の点に留意しましょう。

a	板書提示	観察・実験の手順、安全に行うための注意事項を黒板等に掲示しましょう。
b	事前注意	必要な指示、注意事項は観察・実験の前に行いましょう。
c	整理整頓	机の上を整理整頓して観察・実験を行わせるようにしましょう。
d	直立操作	薬品や火を使うときは、椅子を机の中に入れ、必ず立たせて行わせましょう。
e	合図徹底	教師の制止の合図に従うよう、繰り返し指導を行いましょう。

(2) 予備実験を行っておくこと

観察・実験は、事前に予備実験をします。予備実験は、以下に示すポイントで教科書に載っている観察・実験を実際に行います。

①時間を計測し、子どもが行う場合時間がどれくらいかかるかを予測します。

②観察・実験の形態を考えます。

形態には、個人、ペア（２人)、グループ（３人～５人)、学級全体（教師の演示）が考えられます。 時間配分を考え、どの形態が適切かを判断します。

③子どもがつまずきそうな場面を確認します。

実際に行うことで、子どもにとって困難や危険な場面が明らかになります。
例えば、「電流の働き」に関しては、実際に電磁石をつくり、巻数、電池の数によって、どのくらいクリップがつくか、電流を流し続けるとどのくらい電磁石が熱くなるかを確認し、実験しているときだけスイッチを入れ、終わったらスイッチを切ること等を子どもに徹底させます。

(3) 実験器具の安全な操作について

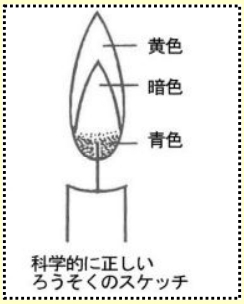
実験器具の安全な操作は、教科書の操作手順や注意点を参考にします。特に、事故の起きやすい加熱器具やガラス器具は、教師自ら事前に習熟しておきましょう。「小学校理科の観察、実験の手引き（文部科学省)」等も、参考になります。

コラム「観察の理論負荷性」

観察・実験のときに、教師は、見たままを記録するような子どもへの指示は、子どもが記録可能なのでしょうか。

観察の理論負荷性という言葉があります。これは、その人の理論によって見えるものが異なるということです。例えば、右に示したろうそくの炎をスケッチする場合です。人によって描いたスケッチはさまざまです。これを、科学的に正しい図を提示して、ろうそくの炎を提示すると、提示したスケッチどおりに見えます。

さて、このことを授業に生かすには？、初めに理論を示して、観察・実験させるのでしょうか？そうではなく、観察・実験で、気づいたことを子どもに発表させ、共通していることを抽出して、科学的に正しいことを確認して、もう一度観察・実験をします。



音楽科

音楽の授業は「音や音楽を媒体とした活動」が中心ですので、しっかりと音楽活動する時間の確保が大切です。しかし、単に歌ったり、聴いたりする活動では子どもたちは飽きてしまいます。授業のポイントや基本的な流れを考え、音楽活動を通して音楽科の目標を達成できる授業を展開しましょう。

1　音楽科の基本的な授業の流れ（音にあふれたメリハリのある授業を）

(1) はじまりは「音楽科ならではのあいさつを」

音楽科の学習では、音楽活動したくなる雰囲気づくりが重要です。そこで、音楽を生かしたあいさつで授業を始めましょう。

例えば…
「始めましょう～♪」「終わりましょう～♪」などのあいさつを和音で歌ったり、お気に入り曲のワンフレーズに当てはめたりして歌うと「よし！今から音楽するぞ！」という気分になります。

(2) 常時活動「今月の歌やリズム打ちなどでウォーミングアップ」

常時活動は、「準備体操（ウォーミングアップ）」です。スムーズに音楽活動に入るために、「“今月の歌”や“リズム打ち”」などで心と体のウォーミングアップとともに、音楽活動の雰囲気づくりをしましょう。

(3) めあてにつながる導入は「音や音楽を用いた活動で」

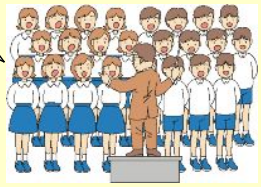
例えば…
♪クイズ形式で楽曲名を想像させたり、楽曲の共通点を考えさせたりする。
♪前時の活動（録音・録画等）を振り返って「課題」に気付かせる。
♪模範演奏を聴かせて「あこがれ」をもたせる。

(4) 音楽の授業でも「“できるようになったこと”と“わかったこと”をまとめる」

終末では、練習の成果を演奏したり、知覚・感受したことをもとに鑑賞したりすることはもちろんですが、本時の音楽活動を通して、わかったことをまとめることも重要です。「できるようになった」ことに加え、「わかったこと」を記録し、残すことで、本時の学びが次の学習へとつながります。

例えば…
学級全体での合唱（合奏）　＋　学習内容のまとめをワークシートに記入

歌えるようになった！



・声をだんだん大きく(クレッシェンド)していけば、気持ちが高ぶる様子を表わせることがわかった。
・AとBと歌い比べたので、〇〇の部分は▲▲のように歌った方が作曲者の思いが伝わると思った。

2　音楽の聴かせ方のコツ（「聴くこと」は音楽活動を支えるカギ！）

「聴くこと」は鑑賞の学習に限らず、表現の学習においても重要な役割を果たしています。今回の学習指導要領の改訂では、「音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること」がすべての音楽活動を支える最も基礎的な能力と示されました。つまり、「聴くこと」は全ての音楽活動を支えるカギ。次の点を重視しながら、限られた時間で効果的に音楽を聴かせましょう。

(1) 何はともあれ、「教師自身がたくさん聴く！」こと

授業において、子どもたちからどのような音楽的感覚や能力を引き出すかのを構想・計画するためには、教師が教材である楽曲の音楽的な特徴を理解することが大切です(同じ楽曲でも演奏者や演奏形態でよさや特徴は異なります)。

♪複数の音源を何度も聴き込み、気に入った、気になった部分をチェックする。
♪チェックした特徴から、ねらいに最適な音源(視聴覚教材)を選ぶ。

(2) ねらいに応じて意図的、計画的に聴かせること

楽曲から何を感じ取らせたいのか、何を聴き取らせたいのか、どの部分や要素を感受させたいのかを明確にして聴かせます。とりあえず「聴かせれば何か感じるだろう」ではねらいは達成されません。

♪聴くことに集中させたいときは音のみで聴かせる（映像は見せない）。
♪一定のイメージをもたせたいときは映像とともに聴かせる。
♪楽曲全体のイメージをもたせたり、まとめの鑑賞をさせたりしたいときは「全体」を、特徴を感じ取らせたいときは要素を焦点化し「部分」をくり返し聴かせる。
(例)導入では「全体」を、展開では「部分」を、終末では「全体」を聴かせるのが一般的です。

(3) 音の出だし、終わり、音量などはこだわりをもって聴かせること

曲の途中で「ブチッ」と止めたり、中途半端な音量で聴かせたりすると楽曲への印象が大きく変わってしまいます。また、ざわついた状態のまま聴かせても何の効果もありません。

♪音楽が始まる前後は静かな状態にする（音に集中できる環境をつくる）。
♪音楽の途中で切るときの基本は「フェードアウト（だんだん小さく）」で。
♪できるだけ生の演奏に近い音量で聴かせる。
♪部分で聴かせるときは音源を編集する（きちんと頭出しをしておく）。

３　音楽表現の技能を身に付けさせるコツ（小さなことから“コツコツ”と）

(1) チェック方式で部分的に歌わせる（演奏させる）

①サビだけ、②出だしだけ、③難易度が高いところだけ、と部分的に歌わせることで、歌うことのハードルが一気に下がります。その際、子どもたちにチェック項目（評価の観点）を明確に伝え、その場で瞬時に判定することが大切です。

(2) 録音する

自らの録音を客観的に聴かせることで、主体的に課題に気付かせたり、成長の跡を実感させたりできます。安価なＩＣレコーダ等を上手く活用したいものです。

(3) イメージを具体化する

「頭の上から声を出すように」のように、一見分かりやすそうで分かりにくい比喩を用いることがあります。できるだけ具体的な例を用いて指導しましょう（「お母さんが電話に出るときの声で」「犬の遠吠えで」「奥歯の上下間に指一本入る幅で」など）。

コラム『伴奏CDを上手く利用しましょう』

伴奏（特にピアノ演奏）に自信がないため、市販の伴奏ＣＤ等を用いることは決して恥ずかしいことではありません。むしろ、机間指導の充実や個に応じた指導が可能になります。しかし、最初からできないとあきらめるのではなく、まずは主旋律から弾きはじめ、和音、簡易伴奏、本伴奏へとステップアップできるように日々の練習を行いましょう。そうすることで、本時のヒントが生まれてくることも期待できます。

表現の定着を目的とするパターンプラクティスや英語の文章の暗記などは、外国語活動のねらい達成の手段としてはふさわしくありません。子どもが楽しみながら自然に音声に慣れ親しみ、進んで英語でコミュニケーションできるようにするために、以下の３つの指導のポイントを押さえましょう。

1　Same word, different way.　（同じ言葉に異なる方法で繰り返し触れさせます）

(1) 英語表現を聞いたり話したりさせるための活動例

言葉に慣れ親しませるためには、繰り返し音声を聞いたり、発話させたりすることが必要です。そこで異なる様々な活動を仕組み、英語を聞いたり話したりする必然性を設定し、楽しみながら音声に慣れ親しませます。

表１　英語表現を聞いたり話したりさせるための活動例

名　称	活動のねらい	子どもの活動
チャンツ	英語表現の文の強勢やアクセント、発音などの英語の自然なリズムに慣れ親しませる。	リズムの心地よさを感じながら、指導者や音声教材の音をまねて、何度も英語表現を口ずさむ。
ポインティングゲーム	英語表現を何度も繰り返し聞かせ、音声とその意味をマッチングさせる。	指導者が発話した音声に合った絵やアルファベットを指す。ペアで競争したり、協力したりして素早く指す。
キーワードゲーム	英語表現を注意深く聞き取らせ、真似させることで英語の音に慣れさせる。	指導者が「キーワード」を言ったら、ペアの間に置いた消しゴムなどを素早く取り合う。
ミッシングゲーム	カードを記憶させることで、意味や音声を印象づける。	掲示された板書用絵カードの中から、目を閉じている間に、指導者が隠した絵カードを答える。
ステレオゲーム	はっきりと大きな声で言わせたり、音声を注意深く聞かせる。	代表者は数名で同時に異なる言葉を言い、その他は何と言ったかを当てる。
スリーヒントクイズ	英語の音と意味をつないで考えさせる。	音声による３つのヒントを聞き、何について言っているかを推測して当てる。

(2) Hi, friends!の活用

Hi,friends!には Let's Listen、Let's Sing / Chant、Let's Play、Activity など、児童が英語を繰り返し表現を聞いたり、口ずさんだりしながら英語に慣れ親しみ、その表現を用いて行うコミュニケーションの活動が掲載されています。（図１）文部科学省

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1314837.htm

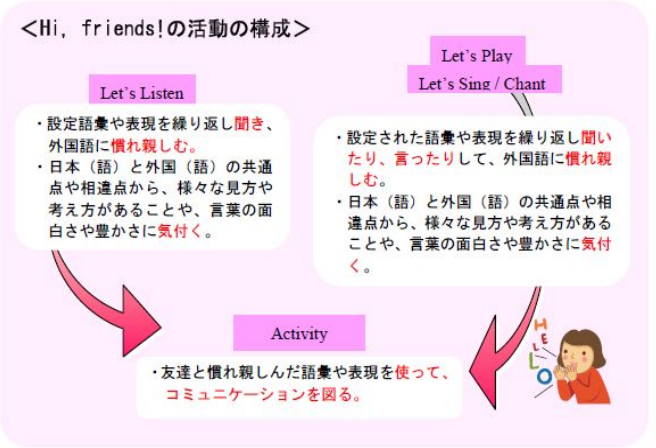


図１　Hi, friends!に掲載されている活動

2　ALTとのTTでコミュニケーションのモデルを示します

(1) ＡＬＴと学級担任とのＴＴの利点

ＡＬＴなどのネイティブ・スピーカーとＴＴ（ティーム・ティーチング）を行う利点は主に右の３つです。特に③は、学級担任は学習者の代表として、

①生きた英語に触れさせられる。
②言葉だけでなく文化などを伝えられる。
③学級担任と実際にやり取りする姿を見せられる。

ＡＬＴとのやり取りを提示できるというよさがあります。学級担任が自ら英語を使って楽しそうにＡＬＴとコミュニケーションをする姿は、子どもを英語好きにします。

(2) ＡＬＴとのＴＴのコツ

ＡＬＴの言葉を一つ一つ和訳して言ってしまうと、聞こえた音声を手がかりに、何と言っているのかを推測するという貴重な子どもの思考や体験の機会を奪ってしまいます。そこで、ＡＬＴとＴＴで指導する際には、右のように、ＡＬＴが話した英語表現を簡単な英語で意訳して伝えます。

ALT: Please make groups of five.
HRT: Groups of five.（キーワードで）

ALT: Does everybody have a card?
HRT: Card/partner okay?（別の表現で）

ALT: Which country's flag is this?
HRT: Guess. America? Canada? New Zealand?
（求めている答えの例を挙げて）

3　外国語活動の評価のポイント

(1) 目標に準拠した評価規準の設定

外国語活動評価の観点は、設置者が小学校学習指導要領等に示す外国語活動の目標を踏まえ設定することになります。「小学校外国語活動における評価方法等の工夫のための参考資料（国立教育政策研究所）」では、**【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】、【外国語への慣れ親しみ】、【言語や文化についての気付き】**の３つの観点が例としてあげられています。

①言語や文化についての体験的な理解
→ **①言語や文化に関する気付き**
②コミュニケーションを図ろうとする態度
→ **②コミュニケーションへの関心・意欲・態度**
③外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ
→ **③外国語への慣れ親しみ**

表２　外国語活動の評価規準（例）

コミ　ニ ケ　シ への	し	●　で、　を　て、　を　して ●　く　、　り　し、　い　え、　す を　、　や　の　を　し ●　から、　くの　に、だれとでも、 の　で、　して→　している
	き	●　で、　を　て ●うなずき、Yes. OK.などで　して ●　き　し(　)して→　いている ●　かけをする。
へ の　れ　しみ		●　の　ち、　え、　などを　す に　、　ズム→ をつけて　す ●　、　ズムのある　を　いて　する
や　に する　き		●　、　、　ズム、　の　い　じ ●　、　、　の　い　じ→ がわかる ●　や　に　、　な　ち

また、単元や各時間の目標に照らして評価規準を設定します。評価規準を設定することで、本時の授業の中で求める児童の具体の姿とともに、どう指導すればよいかが明確になります。評価規準を設定する際には、表２に示すようなキーワードを参考にしてつくります。

国立教育政策研究所　http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/11_sho_gaikatu.pdf

(2) 評価の方法

外国語活動では、①行動観察、②制作した作品や Hi,friends!などへの書き込み、③自己評価・相互評価などで評価します。全員の毎時間の評価は不可能ですから、どの場面で、誰を、どのように評価するかの計画も必要です。

(3) 評価の記入の際の注意事項

外国語活動では評定は行わず文章で評価を記録します。各観点から見取った児童のよさを記入し、能力や技能（スキル）の定着状況は評価しません。したがって、評価の文章に「～できる」という表現は使わず、「～していた」「～しようとした」などの表現を用います。

外　語科
（英 語）

英語は実技科目です。子どもの知識・理解の向上に偏重した指導は慎み、子どもが、英語で実践的にコミュニケーショ　できるだけの力を身につけさせましょう。そのために授業では様々な言語活動を行うことが重要です。

1「授業を英語で行う」

(1)　「子どもの実態に応じた英語」を使う

子どもの日常生活では、実際に英語を使ってコミュニケーションをする場面は限定されています。ですから、教室を英語でのコミュニケーションの場とするために、教師が出来るだけ英語を使って授業を展開することが必要です。その際、次の３点に留意し、英語使用が子どもにとって必然的な言語活動を設定しましょう。

① 学年毎の「教師が使う英語表現の一覧」や「子どもが使う英語表現の一覧」を作成し、教室で主に使用される英語のレベルを段階的に高めましょう。初期の段階ではナチュラルなスピードや音変化等を偏重した指導は避けます。

② 複雑な構文や文法事項、その他、日本語で説明した方がわかりやすいと思われる内容については、日本語で指導していくことも大切です。

③ 教師の英語の発話量と子どもの英語の発話量の割合を３対７を目標にし、子どもの発話量を徐々に高めてることを心がけましょう。

英語で指導することで、子どもがますます英語がわからなくなるというのは本末転倒です。子どもにとって難しすぎる表現等を無意識に使わない配慮は不可欠です。

(2)　「多様なほめ言葉・励ましの言葉」を駆使する

実際に授業を英語で行い始めると、子どもの学習状況等に応じて、ほめたり励ましたりする場面がたくさん出てきます。その際、常に "Very　good." 等の通り一遍の繰り返し評価では、子どもは嬉しくありません。子どもの学習意欲の向上につなげるためにも、英語にの　めにぞ　　や励ましの言葉をたくさん準備しましょう。これはAE　に相談したり、イ　タータ　　トで検索することで簡単に行えます。

(3) 子ども同士の話し合い活動は日本語で行わせてもいい？

子どもへ英語で協議をするように指示しても、なかなかうまくいきません。それよりも、話し合いを日本語で充分に深めさせる方が、彼らの思考力や判断力の向上に結びつくことがあります。その際、話し合いの結果等を英語で表現することが活動のゴールであると、子どもたちに明確にして話し合わせましょう。

2 多様な音読活動

(1) 音読できない子どもは黙読もできない

ある程度のまとまった内容の英文を黙読させて指導する際に、子どもはつまずいたり、時間がかかりすぎたりしていませんか？彼らはどのようにして黙読をしているのでしょう？例えば、friend　をフリエ　ドとローマ字読みにしていませんか？それともエフ・アール・アイ・イー・エヌ・ディとアルファベテトで読んでいませんか？英語学習の指導の初期段階では、充分に時間をかけて、ゆっくりでも正しく音読を繰り返す指導がリーディ　グ力の向上にとても有効です。

(2) 音読練習の前にすべきこと

意味がわからない表現も、単純にリピート練習を繰り返せば、ある程度までは音読できるようになります。しかし、それは意味もわからずにただ唱えているだけにすぎません。多様な音読練習の前に押さえておくべきポイントが二つあります。

① 意味内容が完全に理解できている（和訳ができるということではなく、英語としてそのままでも意味や内容を理解できている）英文を使うこと。

② 音読練習の前に充分にモデルの音声を聞かせること。CD を１～２回聴くだけで、「それでは読んでみましょう」というのでは効果はほぼ見込めません。

(3) 多様な音読法を取り入れる

どのくらい子どもに音読させれば上達するのかという研究は、様々あります。例えば、「５０回聴かせて、５０回シャドーイングをさせるとイントネーションや音変化を含めて完璧に読めるようになる」という説もあります。しかし、どのような研究においても、２回聴かせて、２回言わせれば充分という報告はありません。一定の成果を上げるには、リスニングと音読それぞれ２０回程度行うというのが一つの目安になります。授業中では練習時間が充分にとれないのが現状ですから、次の３点を参考に、出来るだけ初期の段階で子どもを指導しましょう。

① 家庭学習でリスニングやシャドーイングに取り組ませる。

② 音読の指導方法を "Repeat after me." 以外に３０種類程度は身につける。
※多様な方法の具体例は「音読指導法」というキーワードでネット検索すると様々なアイディアや書籍が見つかります。

③ ペーパーテストでは子どもの音読の到達度は評価できません。音読テストやインタビューテストなどを年間数回程度は実施しましょう。

３ Ｑ ＆ Ａ 活動

(1) 目的に応じた発問を選んで子どもに問いかけよう

英語で授業を行うようになると、この Q&A 活動の使用頻度は高まります。しかし、ただ漠然と子どもに質問するだけでは、その活動自体が目的化して、子どもの思考力・判断力・表現力の高まりに結びつきません。次の発問の分類を参考に、目的を明確にして、計画的に Q&A 活動をしましょう。

Fact - Finding・・・・・・・・	重要な情報を本文中に検索させる発問
T / F・・・・・・・・・・・・・・・	内容の正誤を尋ねる発問(その判断の根拠まで求める)
Outline Grasping・・・・・・	一連の Q&A を繰り返して概要を把握させる発問
Quick Response・・・・・・	子ども個々への問いかけで交流を重視した発問
Detail Understanding・・	文構造、代名詞の特定、因果関係等を明確にする発問
Inferential・・・・・・・・・・・	行間の情報を推測させ、意見を求める発問
Evaluation・・・・・・・・・・・	読んだり聞いたりしたものについて評価や批判をさせる発問
Personal Response・・・・・	個々の経験や学習にもとづいた、意見や印象を求める発問

(2) 子どもの返答を具体的に予測しておこう

Q&A 活動を行う際は、子どもの具体的な英語の Answers を事前に予測することが大切です。特に「誤答」を予測することで、教師の支援の準備が適切にできます。そうすれば教師の授業は劇的に向上します。

図画工作科

図画工作科は、子どもたちに人気の教科です。その理由は、自分の思いや願いを形にできるからです。そこで、子どもたちの豊かな表現を実現するための、図画工作科指導での「知っておきたい」ことを紹介します。

１　授業づくりは、子どもの活動をイメージしてつくりましょう

図画工作科における授業づくりは、「たのしいなぁ」「できるようになったよ！」と夢中になって制作する子どもの姿をイメージすることが大切です。その際、子どもの活動を授業のゴールから①鑑賞（よさや美しさを感じ取る）→②表現（材料や用具を用い表現方法をつくりだす）→③構想（表したいことを考える）→④感受（見たり感じたりする）の４点でイメージしましょう。

２　授業イメージをもって、実際にやってみましょう

ここでは、４年生Ａ表現（２）「ねん土でナイスプレイ」という題材で考えてみます。

＜①鑑賞＞

まず授業のゴールをイメージするために、本題材のテーマから３つ、モデル作品をつくってみましょう。その過程で児童の活動に必要な事柄を考えます。

最初に、モデル作品をつくる上で、児童が作品のよさや美しさに気付き、友だち相互に感じたことが伝え合える感動するスポーツ選手の一瞬の動きを見つけます。例えばサッカーのシュート、野球のダイビングキャッチ、陸上競技のやり投げなどダイナミックかつ一瞬でしか見れない写真の姿です。

＜②表現＞

次に、モデル作品をつくりながら児童がどのような技法や道具を用いるかを考えます。その際、重要なのが表現対象が平面から立体に変化することで、今までの粘土をたたいて横に広げることを中心としたものから、ひねりだしたり、曲げたり、つないだりしながら作品をどうすれば安定して立つかを確かめます。また、立体的に表現するためには、対象を正面からだけでなく横や上から眺めるます。多視点からバランスよく造形できているかを確認することが大切です。特にイメージしにくい箇所はどこなのかを教師が事前に知り、写真等を準備します。

さらに、児童の手のサイズを考え、どのくらいの粘土の量がよいか、粘土を曲げたり、ひねったり、つなげたりするときにヘラやドベが必要かについてもを確かめましょう。

＜③構想、④感受＞

最後に、粘土の可塑性を活用し、ひねりだす、くっつけるなど、どのような技法があるか、またその際、難しいと感じるところを教師自身が確認しておきます。今回は粘土を立たせることが課題になりますので、くっつける技法を多用すると接着面から折れることがあります。また、安定して立たせるときのバランスを取るポイントを見つけます。例えば、作品上部が重い時は、下部粘土量を増やし、設置面を広げるなどです。

この③構想、④感受における児童の活動は、つくりたい形に合わせてひねり出したり、くっつけたりと思い通りになるまで繰り返され、試行錯誤しながら表したいことや表現主題について見出す重要な活動です。ここでは、十分に時間を確保しながら、「○○すると、どうなるかなぁ」などのアイディアを引き出す教師の言葉掛けを準備しましょう。

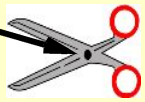
３　安全で正しい道具の使い方を理解しましょう

◎はさみやカッターなどの刃物の指導では

≪はさみの使い方≫

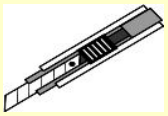
・切る心地よさを楽しみながら親指と人差し指を開いたり、閉じたりする感覚を味わわせます。

・切る時は、はさみの刃元（支点の近く）で、はさみをたてて切ります。



・紙を切る時は、はさみでなく紙を動かします。

≪カッターの使い方≫



・刃の長さは１，２目盛分だし、鉛筆と同じように持たせます。

・切れなくなった刃は、力を入れすぎるので危険です。適切なタイミングで刃を折ります。

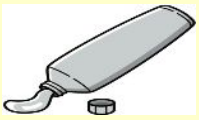
・紙に対する角度は、刃を立てすぎると切れにくいため、刃を立てすぎないように気をつけます。

※渡す時は刃先を人に向けさせないエチケットを指導しましょう。

◎目的や種類に応じた接着材の指導　　注：必ず使用上の注意を確認し、使用します。

≪でんぷんのり≫

・不要な紙にのりを出し、中指でのりをすくい接着部に付けます。その後、張り付けるときは、のりのついていない親指と人差し指を使います。



≪アラビアのり≫

・液状で手を汚さず使用できます。丈夫に接着ができる長所と薄い紙だとしわになる短所があります。

≪多用途接着剤・瞬間接着剤≫

・様々な材料の接着に使えます。シンナー臭のため換気が必要です。また、目に入ると大変危険です。「その都度、使ったら手を洗う」や「終わったら回収する」など、使用方法と管理に注意が必要です。

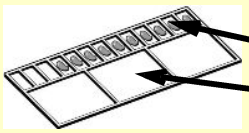
◎水彩絵の具の指導

≪パレットの使い方≫

・「絵の具は、小指の先くらいの量でいよ」と指導し、出し過ぎを防ぎます。

・絵具を置く「部屋」、色を混ぜる「運動場」を説明します。また、色を混ぜるときは薄い色から濃い色を加え、色の変化を楽しむよう指導します。

３分の２まで絵の具をつける



部屋

運動場

≪水差しや筆の使い方≫

・水差しの３つの役割を伝えて理解させます。

筆をすすぐ水…最後の仕上げに使う

筆にふくませる水…絵の具をつける前にふくませる

筆を洗う水…色を変えるときに使う

・筆の種類は平筆、丸筆（太）、丸筆（細）等があります。画面の大きさや線の強弱、向きに合わせて使い分けます。

・紙の上で色が混ざった時は雑巾で拭きとるか、乾くまで待って上から塗り直します。

生活科

生活科は、体験活動が中心の教科です。そのために、子どもが発表したり書いたりする活動ができず気付きの評価が難しい教科です。ここでは、活動中の考える姿を評価する方法を紹介します。

1　行動の評価について

生活科の活動は、「二重跳びができるために跳び方を練習する」と体育のような、目的に向かう活動ではなく、「葉っぱの形がおもしろいからお面にして遊ぶ」のように活動自体が目的です。ですから**「どこまでできたか」ではなく「なにをしたのか・どうしてしたのか」を評価すること**が大切です。以下の 2 点で行動の様子を評価しましょう。

(1) 遊んだ中身を評価する。

「葉脈の違いを生かした模様のあるお面づくり」は素材の特性に着目した図工の造形遊びになります。お面にして遊ぶ姿を評価しましょう。なりきったり、遊ぶ場やルールを考える姿が評価すべきその子の「関心・意欲」なのです。

(2) 自分のよさや成長を子ども自身に気付かせる。

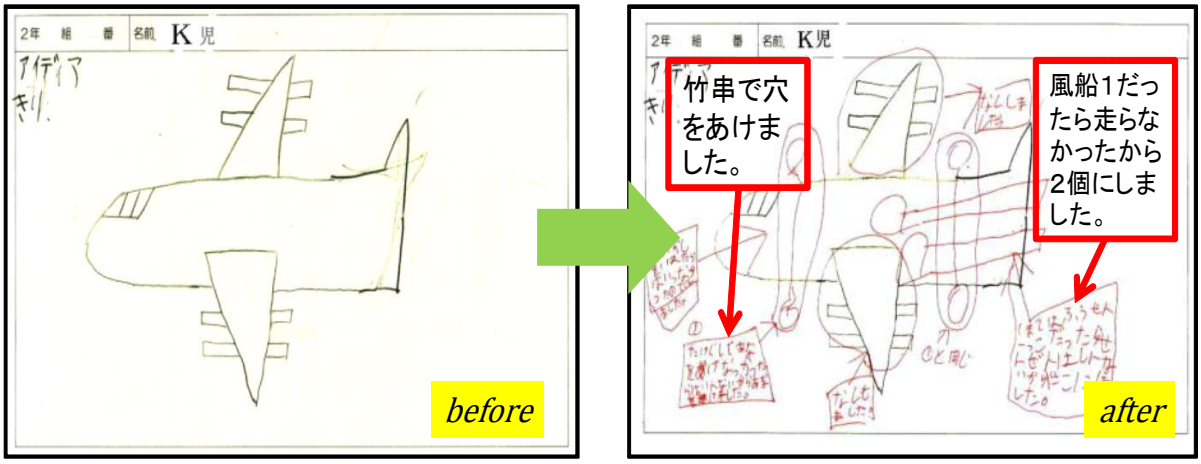
子どもが遊びを繰り返し、その過程での作品や遊び方の変容を「成長」ととらえ、子どもに気付かせることが大切です。そのためには「こうしたらどうなるかな」「もっと楽しくするにはどうしたらいいかな」と活動をくり返し変容させることが大切です。難しいことに挑戦して、できないと子どもが判断したことをほめることも自分の成長への気付きとなります。

2　作品の評価について

生活科でつくったおもちゃや遊び方はゴールではありません。時間が続く限り作品は更新されます。ですから、その時点での結果までつくりかえた姿を評価しましょう。

(1) 作品の製作過程を記録しておく

はじめに計画したことがどのように変わったか、なぜ変わったのかを記録・蓄積させ、それを振り返ることで子どもは自分の作品がだんだんよくなってきたことに気付きます。毎時間の終わりにどこが変わったかをカードに書いたり、次はどうしたいかを書いたりするように指示しておくと、その積み重ねで作品が変わったこをとらえることができます。



【おもちゃを作りかえながら設計図を更新させていく例】

※参考　評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（国立教育政策研究所　平成２３年１１月）

(2)　必ずしも「書く」ことにこだわらない。

短作文などで感想を書かせる場合があります。この時、作文が苦手な子どもは考えをうまく表現できません。このような時は作文で評価するのではなく、気付いたことを話させたり、絵で描かせたりして評価しましょう。

【口答は、記述回答よりも抵抗が少ない。】

３　普段の評価について

授業時間だけで気付きの高まりや成長を見取ることは難しいです。できなかったことができるようになったり、おもちゃで何度も遊んでいるうちに別の遊び方を発見したなど、むしろ休み時間など授業以外の時間で成長することが多いかもしれません。生活科の時間で以下のような発表が見られたら「すごいですね。生活の時間だけでなく、いつもがんばろうと思っているからできるようになったんですね。」と評価します。

例えばこんなことです。

○　トマトが嫌いだった子どもが、ミニトマトの栽培を続けて行く中で食べられるようになった姿を給食の時間で見取る。

○　お手伝い大作戦の学習をしている中で、そうじの時間で効率よくぞうきんがけをしたり、机を運んだりすることができるようになったことを見取る。

○　遊びのルールを作りかえ、昼休みに下級生と一緒に遊ぶ姿を見取る。

技術分野
（技術・家庭科）

今後の日本経済の中心となるであろう「ものづくり」。技術分野の学習は、その基礎を培う大切な学習です。ここでは、少ない授業時数での効果的な指導法や安全面について、そのポイントを示します。

1　安全指導について（技術分野全般に関わること）

(1) ケガ（やけど）・感電等に注意すること

工具の正しい使い方をしっかり教えて、安全に作業ができるように徹底しましょう。技術室の機械などには特に注意し、勝手に触れさせないようにします。また、作業機械への衣類巻き込みを防ぐためにも作業服装には体操服を着用させるなどのきまりが必要です。さらには、栽培における農薬の取扱や有害生物への接触、疫病感染にも注意し、作業後は必ず手洗いをさせます。

(2) 工具の点検・管理を徹底すること

工具は予め保管場所を設定し、複数ある工具についてはナンバリングして紛失を防止します。また、作業前後だけでなく、定期的に安全点検を実施し、不良箇所は即時に補修します。危険な工具については、保管場所を施錠するなどの対策も必要です。

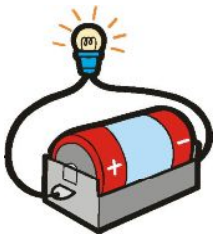
(3) 指示は「作業前に確実に」行うこと

作業が始まると、作業音で指示が通らなくなります。指示は必ず作業前に確実に行います。また、生徒が作業手順を振り返られるように、見える位置に工程表や設計図を掲示します。

2　少ない授業数の中での効果的な授業づくりのために

(1) 小学校や他教科の学習内容を把握しておくこと

理科では「エネルギー」（電気の働き、電流、エネルギーとその変換など）や「生命」（植物の発芽、成長、結実、生物の観察など）を、図画工作科では「のこぎりの持ち方と切り方、釘の打ち方など」を学習しています。また、中学校音楽科では「知的財産権（著作権）など」も学習しています。技術科教員は、事前に生徒の学習状況を把握し、少ない授業時数で技術科として教えることをしっかりと焦点化させることが大切です。事前に状況を把握し、上手く過不足を補いながら授業を組み立てましょう。



(2) ガイダンス的な内容を設定すること

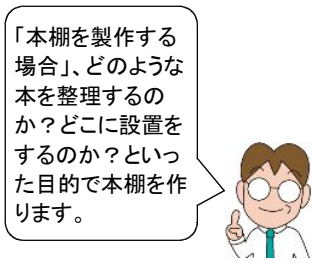
中学校で初めて技術の学習に接する子どもたちです。これからの技術分野の学習の３年間の見通しや学習内容へ関心をもたせることが重要です。具体的には、技術が人間の生活を向上させ、我が国における産業の継承と発展に影響を与えていることに気づかせ、技術が果たしている役割について、３年間の学習内容と関連させながら説明するガイダンス的な時間を設定します。このことにより、題材全体を通して、少しずつ気づきや思いを増しながら、評価・活用する能力や「関心・意欲・態度」の素地を育てることができます。

３　各内容におけるポイント

(1) 材料と加工に関する技術について

ア　使用目的に応じたものづくりをさせる

製作では、使用目的に応じたものづくりをさせることが大切です。例えば「身の回りを整理したいな」「台所にあると便利なものは？」など、生活に役立ったり、生活が便利になったりするものを考えさせ、製作させましょう。

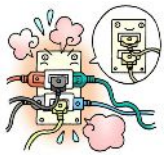


イ　構想・設計のさせ方のコツ

子どもたちへ「設計しなさい」「構想してみよう」といきなり指示しても戸惑うだけです。まずは、モデルとなる製作物等を提示し、「何のために作ったのだろう？」「どのような工夫があるかな？」などと問いかけ、製作者の意図を考えさせましょう。そうすることで、使用の目的や条件が明確な構想や設計をさせることができます。

(2) エネルギー変換に関する技術について

ア　学習内容を実生活に活用させる



授業で身に付けた電気機器の事故防止の知識や保守点検方法などは、自宅で活用する課題（宿題等）として、意図的、計画的に提示することで、生きた知識・技能として身に付けさせることができます。

イ　可能な限り実験・観察する

実感を伴った理解、新たな疑問を持たせるために、身の回りの“自転車の発電機”や“音響スピーカー”などを用いた体験を実際にさせましょう（※パソコンや視聴覚教材だけでの説明では「工夫・創造の能力」は育ちません）。

(3) 生物育成に関する技術について

ア　最新情報を積極的に取り入れ、教師自身が育てる

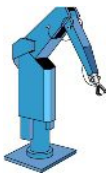
設備や生徒数、日当たりなど学校によって栽培環境等が異なります。また、生物ですので予想通りに育たない場合があります。教科書だけでなく、園芸雑誌、農業関係者、先輩教師などから学び、実際に教師自身が体験し、学校や子どもの実態に応じた教材を選択しましょう。

イ　年間指導計画に上手く位置付ける

生物はある一定の月日をかけて育成されます。また、育成場所によっても育ち方が異なります。生物の変化が著しい時期やタイミングを予め調べ、他の技術の内容の合間に生物育成の内容を位置付けます。

(4) 情報に関する技術について

ア　「制御」の学習は模型やロボットなどのアクチュエータを実際に動かす



「制御」の学習は、簡単な計測・制御で構いません。その際、プログラムを作成し、実際に模型等を動かしてコンピュータが身の回りの機器を制御していることを理解させましょう（※事例を説明・紹介するだけ、パソコン上だけの学習では、確かな理解に結びつきません）。

イ　情報セキュリティ、情報モラルについてはきちんと押さえること

ネット上の犯罪が多発、深刻化している現代において、技術分野の担う役割は重大です。身の回りの事件等を事例に、誰にでも起こりうることとして捉えさせ、ルールやマナー、安全対策について必ず押さえましょう。

家庭分野
（技術・家庭科）

家庭科は、「生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる」ことを目指す教科です。体験的・実践的な学習活動を通して、生活に必要な知識・技能を身に付けさせること、生活を大切にする心情を育てることが大切です。

1　家庭科で身につけさせたいこと

(1) 日常生活に必要な知識と技能を身に付けさせること

子どもの生活体験の減少は、技能だけでなく知識の低下にもつながっています。そこで、子ども一人一人に対し、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能をしっかりと身に付けさせる必要があります。

しかし、身に付けさせるとは、ただ単に作業を繰り返し行うことではありません。「なぜこのようにするのか」といった理由を子ども自身に考えさせることが重要です。例えば、小学生段階で身に付けさせたい「材料の洗い方」について、解説には「葉菜類は、水中で振り洗いをした後、よく洗う。特に生で食べるものは、衛生に留意して流水でよく洗うようにする。」と書かれています。このことについて、まずは教師が正しく理解しましょう。それから子どもに実践させ、「なぜそうしなければならないのか」を考えさせることで、実感を伴った確かな知識と技能を身に付けさせることができるのです。

(2) 衣食住を中心とした生活の営みや家族の大切さを理解させること

子どもは、家庭科の学習を通して、日常の生活の中では意識しにくい、一つ一つの家庭の仕事の価値や大変さ、家族の大切さを実感することができます。

題材構成においては、家族の生活とかかわらせながら、衣食住の内容を取り扱いましょう。例えば、家族のために朝食を作ったり家族への贈り物を製作したりするなど、家族とのかかわりを意識した活動が、日々営まれる家庭生活と家族の大切さに気づくことにつながります。

2　体験的･実践的な学習活動を

家庭科には「体験的・実験的な学習活動を通して学ばせる」という教科の特性があります。学習対象を観察する、触れる、聞く、味わうといった直接体験、インタビューなどの情報の収集、実験、製作や調理などの実習を通して学ばせましょう。そして、「楽しかった」「おもしろかった」だけで終わることのないよう、気づいたこと、分かったことを実感を持って表現する活動を取り入れましょう。

毎日の食事で気をつけていることを家族にインタビューする。

家族が喜ぶバランスのとれた一食分の献立について話し合う。

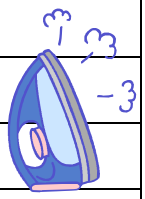
調理実習で実践し、学んだことを言葉で表現する。

３　実習上の留意点

実習においては、安全管理・安全指導を徹底する必要があります。次の事項に配慮して指導しましょう。

(1) 服装を整え、用具の手入れや保管を適切に行うこと。

服装	・活動しやすく安全性に配慮した物を準備して着用する。 ・清潔で付いた汚れが分かりやすいエプロンを着用する。 ・袖口は、まくったり腕カバーをつけたりする。 ・髪の毛などが食品や調理用具に触れないよう三角巾を付ける。 ・手指を十分に洗うなど衛生面にも留意する。
こんろ	・回りの汚れを拭き取る。
調理用具	・使用後はなるべく早く丁寧に洗い、よく水気を取る。 ・油汚れは紙や古布などで拭き取って洗う。
包丁	・安全に気を付けてよく洗い、水気を拭き取る。
まな板	・流し水をかけながら洗い、十分乾燥する。
茶碗等	・重ねすぎないようにしたり、清潔な場所に収納したりする。
アイロン	・冷めてから収納する。
針・はさみ	・本数を確認し、保管箱に入れたりカバーを付けたりする。



(2) 事故の防止に留意して、熱源や用具、機械などを取り扱うこと。

洗剤類	・誤用のないように十分留意する。
調理台	・熱源の回りに燃えやすい物（ふきんやノート類）を置かない。 ・熱源の適切な点火・消火の確認、調理中の換気をする。 ・こんろや調理器具の余熱に注意する。
針	・本数の確認や折れた針の始末などを徹底する。
アイロン	・使用場所や置き方に留意し、やけどなどを起こさないようにする。
ミシン等	・重量のある物の配置、コードの取り扱い方などについて十分に留意する。

(3) 調理に用いる食品について、安全・衛生に留意すること。

材料	・調理に用いる材料は、安全や衛生を考えて選択する。 ・家庭から持参する食材については、実習の前に指導者が腐敗していないか匂いや色などを確かめる。 ・実習前の材料等の保管に注意する。 ・小学校では生の魚や肉は用いない。卵は新鮮であることを確認し、加熱調理する。 （中学校・高等学校でも卵や肉類は加熱調理が望ましい。）

コラム：授業評価チェックシート

研究授業では、その後の話し合いを有意義なものにするために、共通したチェック項目を設けておく必要があります。チェック項目には研究テーマに関わる内容（テーマ実現に向けた方策が有効であったか等）も入れますが、ここでは一般的な内容のものを例示しますので、参考にしてください。

項目		観　　点	評　価
1	教材研究	○教材研究を深め、子どもの実態をふまえた教材化が図られているか。 ○学習指導要領をふまえた授業になっているか。	５ ４ ３ ２ １
2	目標評価	○達成目標が明確で、授業を通してめざす児童生徒の姿が具体化されているか。 ○具体的な評価規準や評価方法が明確になっているか。	５ ４ ３ ２ １
3	学習過程	【全般】 ○学習過程は、子どもの意識がつながる展開になっているか。	５ ４ ３ ２ １
4		【導入時】 ○本時のめあてに結びつくような導入になっているか。 ○子どもの学習への意欲を喚起することができたか。	５ ４ ３ ２ １
5		【展開時】 ○子どもの主体的な活動が仕組めているか。 ○学習形態等の工夫が見られるか。	５ ４ ３ ２ １
6		【まとめ時】 ○めあてに照らして本時の学習をまとめることができているか。 ○本時の学習の振り返りがなされているか。	５ ４ ３ ２ １
7	教　具 手だて	○必要な道具や資料等が準備できているか。 ○分からない子どもへの手だてが準備されているか。	５ ４ ３ ２ １
8	発問	○的確でわかりやすい指示になっているか。 ○子どもの思考を促すような発問になっているか。 ○わかりやすい説明になっているか。	５ ４ ３ ２ １
9	助言	○子どもの発言を引き出そうとしているか。 ○ＫＲなど、子どもの発言や質問に対する適切な対応ができたか。 ○机間指導など、学習中の子どもの状況をよく把握していたか。	５ ４ ３ ２ １
10	板書	○視覚的で、１時間の流れがわかる構造的な板書になっているか。 ○子どもの多様な考えや表現を表した板書になっているか。	５ ４ ３ ２ １

・自分の授業を振り返ったり、他の先生に見ていただく時の参考にしてください。
・どこに課題があり、どのように改善すればよいかの方向性が明らかになると思います。
・観点については、教科や学校種によって異なりますので適宜付加・修正してください。

－第　４　章－

学び方などを身に付けさせる技術

指導案はできた。板書計画もできた。掲示物やプリントなどの授業準備もできた。
だけど実際に授業をしてみると、子どもがなかなか発表しない。ノートに書かない。
どうしてそうなってしまうのか？
ここでは、普段の授業でうまく行くコツや、子どもの考え方をベテランの先生に聞き、答えてもらうＱ＆Ａのコーナーです。

Ｑ１　人の話を聞くことが苦手な子どもがいます。
どうしたら、しっかりと話を聞かせることができますか？

子どもと一緒に聞き方のルールをつくり、定着させます。

「静かにしなさい！」「こっちを向いて！」おしゃべりに夢中になっている児童・生徒に注意を向けさせる時に、教師はつい大きな厳しい口調で注意をしてしまいがちです。聞くことは学習の第一歩です。大きな声で注意しなくても、全員が話を聞く態度を身に付けるようにしたいものです。

教師の話し方をふり返りましょう

まずは、教師自身の話し方に問題がないかふり返ってみましょう。教師の話し方が、「聞かない子を育ててしまっている」時があります。下記のような言動に心当たりはありませんか。

- 子どもたちに聞く構えができていないのに話し始めている。
- つい話が長くなる（一度に多くの情報を発信している）。
- 繰り返しや言い直しが多い（的確な話し方ができていない）。
- 語尾があいまいである。
- 表情が乏しく、話し方も一本調子である。　　など

教師の魅力的な話し方は、「聞き上手」の子どもを育てます。本書P９～13に掲載している「発問と助言」を参考にしながら、「話し上手」になりましょう。また、先生が「聞き上手」のお手本となることも大切です。

聞き方のルールをつくりましょう

授業中の発言を聞く時に、どのような聞き方が望ましいかを示す規準が聞き方のルールです。「聞き上手」の学級には、どのような良いことがあるかを考えさせながら子どもと一緒にルールをつくり、そのルールが定着するよう繰り返し指導します。

一度ルールが定着できたとしても、時々確認して、常にルールを継続・維持することが大切です。また、最初に決めたルールが定着したら、新しいルールを少しずつ加えていくことも必要です。右ページに聞き方の指導例を紹介します。

校内放送の聞き方にルールを適用

校内放送も「発言」の一つととらえさせ、聞き方のルールで聞くように指導し ます。そうすることで、必要な情報が、確実に伝達されるようになり、学習中に身につけた態度が実際の生活の中で役立つことを子どもたちに体感させることができます。

聞き方のルールをつくる

（例）☆顔を上げ発言者に体を向ける
（へそを向ける、作業を止める。）
☆発言している時は話をしない
（雑音も立てない。）
☆話に反応する
（うなずいたり、返事をしたりする）等

※学年の発達段階に合わせたルールをつくります。

POINT

ルールをつくる際は、聞き方のルールを守ると「発表がしやすくなる。」「学習が分かるようになる。」、その結果、「学習が楽しくなる。」などのよさがあることを説明しましょう。ルールの意義を理解させることで進んで実行しようとする意欲を高めます。

聞き方のルールを繰り返し指導

POINT

ルールをつくっただけでは、児童・生徒はできるようにはなりません。また、言葉で促すだけでも十分とは言えません。次のアイディアをヒントに、粘り強く、繰り返し指導することが大切です。

★発言者の方を向いて聞かせる指導
・教師が話をする場面では、全員が教師の方を向くまで待つ。できていない子へは注意せず、黙って凝視し、「私の聞く姿勢を先生が待っているんだ。」と気付かせる。
・発言している子どもの後ろに立ち、全員の視線が発言者に向いていることを確認する。
★発言を最後まで聞かせる指導
・教師が話している場面で、子どもが口を挟んだり、音を立てたりした場合は、話を中断する。子どもの発言場面では、教師が発言者の発言を一時静止させ、状況が改善されたら再開する。
★反応しながら聞かせる指導
・教師が聞き方のよい子どもをみつけ、「〇〇さんの聞き方は上手だけど、どこがよいかな。」と他の児童・生徒に尋ね、モデルとして真似させる。
・発言者に、安心して話せる聞き方をしていたのは誰かを発表させる。

子どもの姿や聞き方のルールを評価

POINT

・毎時間の学習の中で、聞き方のよい子どもの姿をみつけて、賞賛する。

・2、3ヶ月に一度は、できるようになった「聞き方のルール」が増えたことに気付かせたり、新たなルールを付け加えたりする。

Ｑ２　学習に集中できない子どもがいます。
どうしたら、学習に対する集中を持続させることができますか？

授業に集中させるポイントは２つ。「仕掛け」と「誉め」です。

学習とは関係ない道具をずっと触っていたり、窓からぼんやり外をながめていたりする姿は気になります。なぜ、このような姿の子どもが出てしまうのでしょうか。子どもの実態によって、様々な原因*1が考えられますが、多くは「授業が分からない。」ということが原因となっていることが多いようです。つまり、授業に集中できない子ども本人に原因があると言うよりも、授業者である教師の指導方法に原因があることが多いのです。

授業への集中で大切なことは、まず、授業へ引き込むこと、そして、引き込んだ子どものやる気を持続させることです。

様々な原因*1　子どもによっては見たり聞いたりすること自体に「困難さ」を抱えている場合があります。
詳しくは、本冊子「配慮を必要とする子どもたちの授業技術」（P77～）を参照してください。

参加する「仕掛け」を

参加する「仕掛け」には、「全員でする仕掛け」と「テンポを生む仕掛け」があります。「全員でする仕掛け」は、子ども一人一人に「私もしよう。」という気持ちを生み出します。また、「テンポのある仕掛け」は子どもを飽きさせません。

○　全員でする仕掛け

（例１）行動を具体的に指示し、その反応（行動）を確認する

「教科書P3を見ましょう。」と漠然とした指示ではなく、「教科書P3の上段にあるグラフを指で押さえなさい。」などの行動を促す具体的な指示を出した上で、全員が指で押さえているかどうかを教師が確認します。また、「隣の人がちゃんと押さえているか確認しましょう。」と相互評価させるのも有効です。教師は指示を出したら、必ず全員ができているかを確認することが大切です。

（例２）一人一人に考えをもたせる

例えば、「この問題に対するこの式は、正しいですか。」と教師が子どもに尋ねる場面では、子どもに挙手させることで考えを表現させます。しかし、すぐには挙手で自分の考えを表現できない子もいます。そこで、「正しいと思う人は○、正しくないと人は△をノートに書きなさい。」と指示し、書かせてから挙手させるようにすると、全員に挙手をさせることができます。

○　テンポを生む仕掛け

（例１）**時間を区切る**

上の「行動を促す具体的な指示」に加えて、学習場面によっては、時間を区切るとより効果的です。例えば「このグラフを見て分かったことを書きましょう。」と指示を出すより、「ノートに○分間で書きましょう。」と時間を区切って指示する方が集中力を高めます。教室には、指定した時間をいつでも計れるように、キッチンタイマーなどを常備しておくと便利です。

（例）このグラフを見て気づいたことを、ノートに
「３分間」で「五つ以上」書きましょう。

（例２）**子どもが発言したり活動したりする時間を保障する**

教師が話をし過ぎると、子どもは聞くだけになってしまいます。どんなに上手な説明を聞いても、聞いただけではスポーツは上達しないのと同じで、授業でも、教師がどんなに上手な説明をしても、子どもは「分かる、できる」ようにはなりません。子どもに考えて発言させたり、活動させたりする時間を保障することは、集中力を高めるだけでなく、「分かる、できる」授業づくりにつながります。

学習意欲を高める誉め方を

教師の賞賛は、子どもの学習意欲を高めます。特に、望ましい言動の直後に行えば、その言動を行った子どもだけでなく、周りの子どもへも「こうするんだ。」という具体的なモデル提示となり、効果は絶大です。そこで、何を賞賛するかについて２つから述べます。

（例１）**変容した姿に対する称賛**

他者と比較したよさではなく、その子自身が前時と比較してできるようになったことを誉めて認めます。

○　変容した姿に対する称賛

考えをたくさん
書けるようになってきたね！

×　他者と比較する称賛

Aさんより
たくさん書いているね。

（例２）**最後まで取り組んだ努力に対する称賛**

課題が達成できたこととともに、取り組もうとした意欲、最後まで粘り強く頑張った態度を誉めます。

○　取り組もうとした意欲に対する称賛

「取りかかりが
速くなってきたね。」

「鉛筆の先から
目を離さないで取り組んだね。」

賞賛だけでなく、指導・助言も大切です。「ダメなことはダメと伝える」、「こうしなさい」と指示する、こうしたことも勇気をもって行っていかなければなりません。

Ｑ３　いつも決まった子どもばかり発言します。

どうしたら、たくさんの子どもに発言させることができますか？

一人一人に考えをもたせ、発言の仕方を教え、少しずつ発言することに慣れさせます。

子どもは、「何を話したらよいか分からない。」と発言内容への不安や、「どう話せばよいかが分からない。」という発言方法への不安をもっています。そこで、「考えに自信をもたせる」、「発表の仕方を知らせる」コツを示します。

考えに自信をもたせます

（例１）発言の前に考えをノートに

発問の後に、「考えをノートに書きましょう」と指示し、その後、「書いた人は手を挙げましょう。」と指示します。

（例２）「ノートサイン」で簡単評価

子どもがノートに考えをかいている間に、教師は机間指導*1を行います。その際、図１のような「ノートのサインの約束」を決めておくと、限られた時間内でできるだけ多くの子どもとかかわることができます。教師が認めることで、子どもの発言に対する不安を軽減できます。

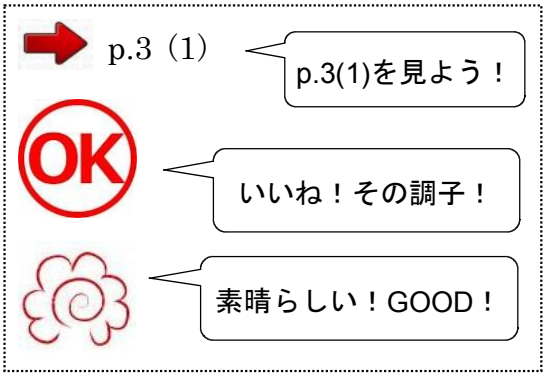


図１　ノートのサイン約束例

机間指導*1の目的

◇子どもの反応を見とり、理解の状況を把握する。

◇観察の視点を決めて回り、指導・助言する。（指導と評価の一体化）

○　ハンドサイン・意図的指名

子ども全員が、自分の学習の状況や意志を示すことを通して、授業に積極的に参加させるために、図２のようなハンドサインが用いられることがあります。

教師は、机間指導の際に把握した児童の考えやハンドサインをもとに、多様な考えが出るように意図的に指名します。

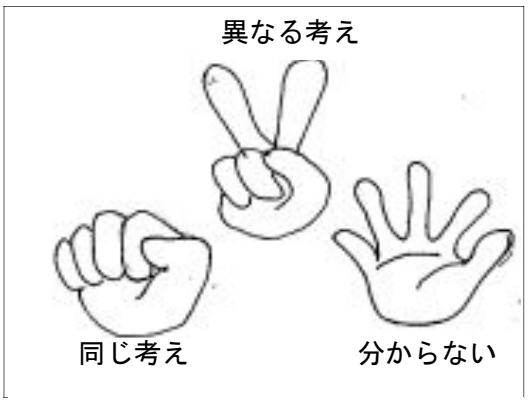


図２　ハンドサインの例

「構え」「発声」「話し方」を徹底

○　聞く・話す「構え」の指導

（例１）発言のルールの指導

ア　指名されたら、返事（「はい。」）をして起立する。

イ　最後まではっきりと話す。

ウ　聞き手の方を向いて話す。

＊「発言のルール」の定着には、「聞き方のルール」の指導が欠かせません。支持的に聞く態度も合わせて指導しましょう。（「Ｑ１」P64参照）

○　「発声」の指導

（例１）声の大きさの指導

場の状況に応じた声の大きさを示し（図３）、繰り返し指導する。

（例２）声量・口形の指導

音読、群読、朗読等の機会をとらえて、声をしっかり（声量）、はっきり（口形）出す練習を繰り返しさせる。

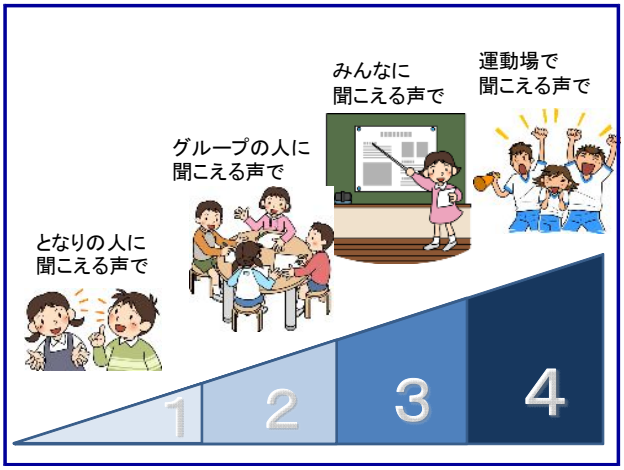


図３　「声のものさし」の例

○　「話し方」の指導

（例１）話型を用いる指導

学級・学年に応じた話型を掲示して、その中から選んで話すよう指導する。

	＜話型例＞
説明・ 発表の仕方	ア　返事、主述をはっきり「はい、……は……です。」 イ　結論を先に「私は……だと思います。理由は……だからです。」 ウ　ナンバリング「私は……と思う理由は３つあります。１つは……。２つは……。３つは……。」 エ　発表の題目を「私は……について発表します。」
意見の出し方	ア　賛成「私は賛成です。理由は……です。」 イ　反対「私は反対です。理由は……です。」 「私は～さんと違って……だと思います。理由は……です。」 ウ　修正「私は～さんの……には賛成ですが、……は違います。私は次のように考えてみました。」 エ　補足「私は～さんの考えに付け加えます。……もあると思います。」
質問の仕方	ア　聞き直す「～さん、もう一度行ってください。」「～の部分をもう少し詳しく説明してください。」 イ　理由を尋ねる「……はどうしてそうなるか理由を教えてください。」 ウ　確認「今～さんが言ったことは……ですね。」

（例２）「つなぎ発言」の指導

「つなぎ発言」は、前の発言者の意見を認めていることを示します。具体的には下のようなステップアップの指導が効果的です。

第一段階　「～さんは□□と言いました。私は△△です。」

前の発言者の発言を繰り返して言う（下線部分）ことで、前の発言者に所属感をもたせるとともに、聞く力をつけることになります。

第二段階　「～さんの□□という意見に私は△△です。」

「～さんや～さんの意見をまとめると◇◇です。」

第一段階の「つなぎ発言」で聞く力がつくと、前の発言者の発言内容をまとめて言うことができるようになります。

そのわけは」、「たとえば」、「つまり」、「まとめると」などのつなぎ言葉のカードは掲示しておくと効果的です。また、「○○さんの～という意見に似ていて、わたしも～です。」「○○さんは～と言いましたが、わたしは□□です。」など、友だちの意見や考えを受けて発言させるようにすると話し合いが深まります。

発言することに慣れさせます

教師が発問して、挙手した児童を指名する発言のさせ方以外には、次のような方法もあります。

（例１）縦列や横列による列による「順番指名」

前時の復習や答え合わせなど誰でも答えられるような質問において、この順番指名を活用します。子どもにとっては、指名される順番を予想できるので、発言に対する心構えができます。また、「１回パス」も認めることで安心感を与えます。

（例２）ノートに記述された考えをもとに行う「意図的指名」

机間指導でノートの記述から子どもの理解度を把握し、教師が最初に発言させる順序を決めて指名します。一人を指名するのではなく、複数の子どもを指名して発言させ、本時の主眼の達成にせまるように、子どもの考えをつないで考えさせます。

☆意図的指名では、机間指導で把握した以下のような子どもの意見をつないでいきます。
起：考えが浅く根拠が弱い意見
承：少しずつ正解に近づいていく意見
転：それまでの流れを断ち切る、対立した意見
結：対立を越えた、総合的な意見

（例３）「指名無し発表」

教師が指名を行わず、子どもに自分のタイミングで起立して自由に発言させる方法です。例えば、「この２つのグラフを比較して、気付いたことを発表しましょう。」という場面のように、たくさんの答えや気付きがある場合は有効です。教師は、子どもたちが発言している間はメモを取り、子どもたちの発言をいくつかに分類します。その後、その内容を板書上にまとめて子どもたちの考えを整理させます。

コラム「発言の声が小さい子への指導」

発言の声が小さい子へは、初めは教師が傍に寄って復唱し、次第に近くの友だちに復唱させます。本人に「その通りですか？」と確認させるなどの配慮を行うことで、まずは発言に慣れさせます。その際には、できたことを誉めて認めます。また、誰の発言であっても、温かく受けとめる指示的風土で「聞く」指導も大切です。

Ｑ４　グループでの話合いを深めることができません。

どうしたら、上手なグループでの話合いをさせることができますか？

話し合いの「目的の明確化」と「手順の徹底」が重要です。

目的の明確化

グループでの話合いは、多様な考えに触れさせるという効果が期待できます。しかし、話合いの目的をはっきりとさせないと、単なる考えの「出し合いの場」に終わってしまいます。

グループでの話し合いの目的の例

- ○要点を確認したり、事実を報告したりする。
- ○自分の考えを深める。（多様な考えに触れることにより、自分の考えをもたせる）
- ○グループで一つの意見に練り上げる。

グループでの話合いは、授業の中で右上のような目的で行います。効果的な話し合いをさせるには、授業を計画する時に、教師が「この場面で、なぜ、グループの話し合いを行わせるか」を明らかにしておくことが大切です。また、授業場面では、その話合いの目的を子どもにも明確に伝えてから話し合わせることが重要です。

手順の徹底

少人数のグループで話し合う手順を教え、徹底させます。右のような話し合いの手順を各グループに１枚準備し、何度も繰り返し使えるようにラミネート加工などをしておくと便利です。

グループでの話し合いの手順の例

１ 順番に自分の意見を言う
「私は○○だと思います。そのわけは、　・・・だからです。」
「私は△さんと似ていて（ちがって）、□□だと思います。わけは・・・。」

２ 分からないところを質問する
「△さんへ質問です。○は◇ですか。」

３ 友だちの意見に対しての意見を言う
「私は△君の考えは○○だと思います。」

話し合わせる際のポイント

○　グループ編制を工夫する。

座席の近い子ども同士で編制するだけでなく、課題別、主張別などで編制することで、より目的に沿った話し合いにすることができます。「学習が始まる前までに、国語の学習の座席に座っておきなさい。」と学習する教科によって座席を指定しておくこともできます。また、一グループの人数は、４～５人程度を目安とします。

○　まず自分の考えを書かせる。

グループでの話し合いに入らせる前に、自分の考えをまとめて、記述させる時間を確保しましょう。自分だけの力で考えを書くことができなかった子どもは、話し合いの際にそのことを他のメンバーに伝えるとともに、メンバーが出した考えについての意見を必ず言うように指導します。

○　付箋紙や短冊などを効果的に使用する。

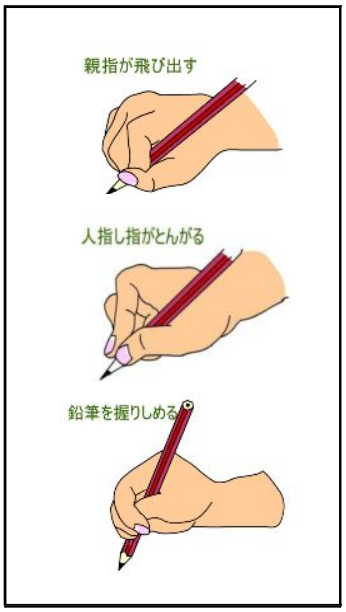
グループで一つの考えにまとめる場合には、考えを書き込んだ付箋紙や短冊を操作させながら話し合わせると、互いの考えの共通点や相違点をつかませやすくなります。

Ｑ５　文字を書くのが遅い子どもや雑な子どもがいます。
どうしたら、速く丁寧に文字を書かせることができますか？

「鉛筆を正しくしっかりと持たせる指導」、「速く書かせる指導」、「丁寧に書かせる指導」を実態に合わせて個別に行います。

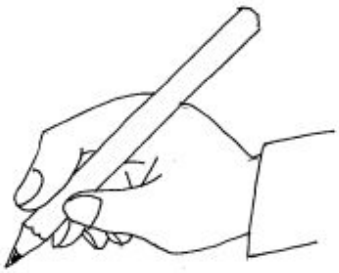
鉛筆の持ち方の指導

左のような持ち方をしている子どもはしっかりと字を書くことができません。まずは、下のように持ち方から教えます。



【正しい持ち方（例）】

中指／軽く曲げて鉛筆の枕にする
　　（ねかす）
　　指の横で鉛筆を支える（そえる）
薬指・小指／紙を軽く押さえる
親指／しっかりと鉛筆を持つ（つまむ）
人差し指／軽く当てて進む方向を導く



（例１）「つまむ、ねかせる、そえる」

① 親指と人差し指で丸い輪を作り、鉛筆の３分の１下方をつまむ。
② 鉛筆を親指の付け根の部分に倒して寝かせる。
③ 中指を鉛筆の下に添える。

子どもに「つまむ、ねかせる、そえる」と声に出しながら指導します。

（例２）矯正用グッズを使用する

渦巻き鉛筆、三角鉛筆などの鉛筆を正しく持つようにするための矯正用グッズも市販されています。

速く書かせる指導

（例１）声に出して読ませてから書かせる

板書をノートに写させる場面では、書かせたい部分を一度音読させ、耳からの情報を加えた上で書かせると、字を書くスピードが上がる子どもがいます。

（例２）教師の板書のスピードに合わせて書かせる

「先生と同じスピードで書きます。」と言ってノートに書かせます。教師がチョークを置くのと同時に子どもが鉛筆を置けることを目標にさせます。

（例３）視写で書くことに慣れさせる

手本の文章を写し書く視写とういう方法があります。３分で書くことができた文字数の記録を取り、その子の成長を実感させます。多くの子どもたちは、回を重ねるだけで記録が伸びますが、特に書くことが苦手だと思う子どもには、ひらがなは速く漢字はゆっくり書く、一度に５文字程度覚えて書く、行の終わりで合っているか確認するなどのポイントを指導します。

丁寧に書かせる指導

（例１）丁寧に書くことのよさを話し合う

丁寧さは正確さに繋がり、間違った情報を発信したり受信したりすることを防ぐことに気付かせます。また、丁寧な字は見る人にとっては読みやすく、読む人にとっての思いやりの心の現われともいえます。

（例２）連絡帳を使う指導

朝の会で明日の連絡を行い、連絡帳を書かせ提出させます。教師は、帰りまでに目を通して「OK！」や「△（書き直し）」などの朱を文字の横に入れます。書き直しのチェックが入った子どもは、帰りまでにその字を書き直して教師に再度提出します。

（例３）「ノート名人」ノートの掲示

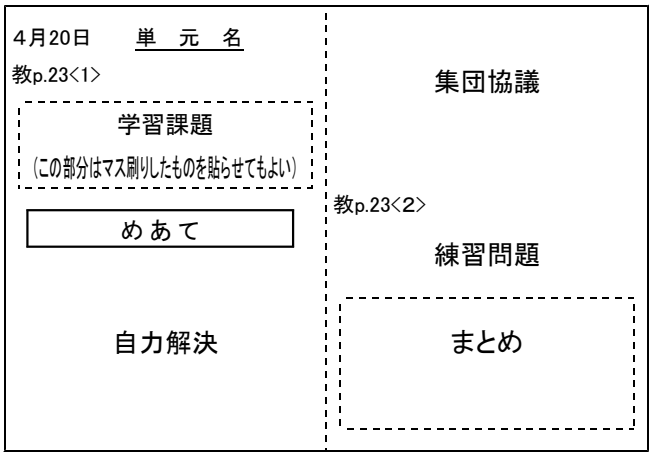
丁寧に書かれたノートのコピーを教室に掲示し、「良いと思うところを真似しましょう。」と呼びかけます。掲示するノートはいつも同じ子の物ではなく、努力をしている複数の子どもの物を定期的に取り上げます。

★ノート指導について★

授業の中でノートを上手に活用することにより、子どもたちに考える内容を明確にさせたり、思考過程を整理させたりすることができます。ノートの使い方には様々な方法がありますが、教師が何のために、どこに、何を書かせるかを考えた上で、ノートの書き方の指導を行うことが大切です。

＜ノートに書かせる内容の例＞

① 日付・教科書のページ等
② 学習のめあて（学習課題）
③ 自力解決（自分の考え）
④ 集団解決（友達の考え）
⑤ 要約（まとめや感想）



「速く」と「丁寧に」を同時に指導することが難しい場合は、どちらかに重点を置いて指導します。

－第　5　章－

配慮を必要とする子どもへの技術

本章は特別支援教育の視点から、うまく集団になじめない子どもや教師の指示が通りにくい子どもへ、どのような支援を行うのかについて紹介します。

教師の話が伝わらなかったり、ささいなことで友達とトラブルになったりする子どもへは、どのような配慮で指導すればよいでしょうか？ここでは、配慮を必要とする子どもたちへの指導する技術を紹介します。

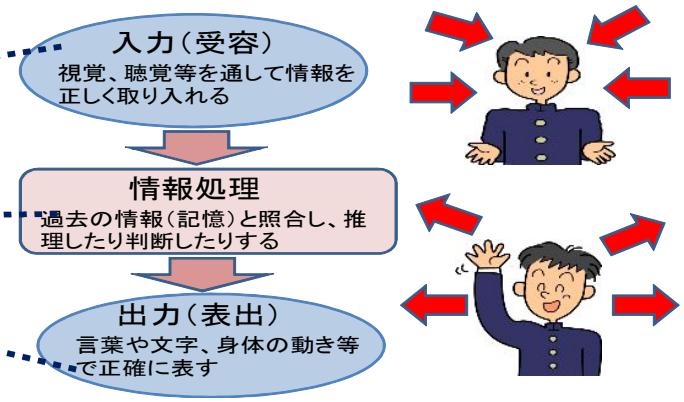
授業で気になる子どもの姿		子どもたちの思い	
グループ学習で話し合いへ参加しようとしない	⇨	友だちが話していることが分からない。 僕の話を聞いてくれない。	
学習活動を提示しても、始めない	⇨	難しい問題だし、 何をしたらよいか分からない やりたくないな！	

実は、普段、教師が気になる子どもたちは、周りの子どもたちも「ふざけている」「怠けている」「努力が足りない」「変わった子ども」などと誤解されたり、理解されにくかったりすることがあります。そんな子どもの姿を、教師側から「困った子」ではなく、子ども側から「困っている子」に見方を変えることが大切です。

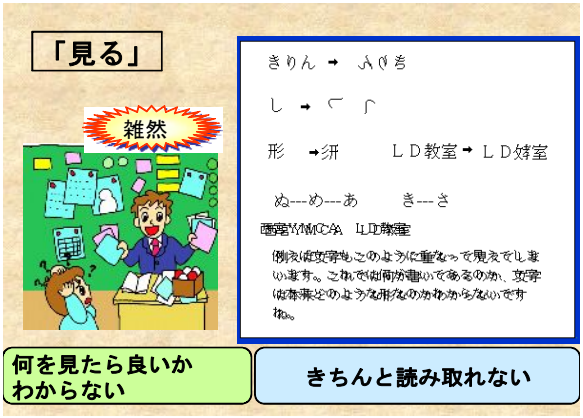
1　「困った子」でなく、「困っている子」に見方を変えてみましょう

「困っている子」いわゆる配慮の必要な子どもは、視覚や聴覚などから入ってくる情報をうまく処理できないことが多く、混乱していることが考えられます。

人間の誰しもが、情報の入力、情報の処理、情報の出力の過程において様々な特性があり、一人一人違います。
配慮の必要な子どもたちの中にも、通常の指導や支援では、その特性に合わず「分からない」「できない」状態におかれている子がいます。



このことから、学習場面では例えば、次のような困難さを感じることがあります。



何を見たら良いかわからない

きちんと読み取れない

周りの音が，同じ強さで入ってくる

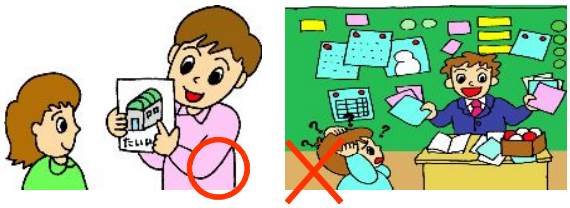
上記のような「見る」「聞く」の学習場面において、その情報を選択し、取り入れること、取り入れた情報を整理すること、あいまいな状況に臨機応変に対処することが苦手です。また一方で、ある感覚に対し過度に敏感であったり、鈍感であったりします。そのため、周囲の状況とその変化に混乱してしまうことも少なくありません。その子の最適な状況や方法で、その子の「学び」を保障しましょう。

そこで、三つのキーワード「シンプル・クリア・ビジュアル」で環境を整えながら支援をします。

２　支援の基本　「シンプル･クリア･ビジュアル」

「シンプル・クリア・ビジュアル」とは、**余分な刺激を減らすこと、簡潔に指示すること、情報を視覚的に提示すること**を 表しています。

シンプル



余分な刺激を減らし、伝えたい情報や指示に絞って示す。

【例】　指示は大事なことに限定して示す。
言葉の指示を整理して伝える。
活動する場所には不要なものは置かない。

クリア

活動の順序、方向、内容を明確に、具体的に示す。

【例】　事前に活動内容や順序を示す。
スケジュールや手順は固定化する。

ビジュアル

情報を視覚的に提示し、見て分かるようにする。

【例】　活動の場所を分けて、一場所一活動を原則とする。
指示は文字や絵、図を使って説明する。
チェック表等を用いて、することを示す。

3　環境整備での支援

○　配慮の必要な子どもは、環境や状況に大きな影響を受けます。具体的な支援は、黒板、席周辺の整理、机や椅子の位置を揃えるためのラインや印、ロッカーや引き出しを整頓する写真や絵カードの活用などが挙げられます。

余分な刺激がある状態

は

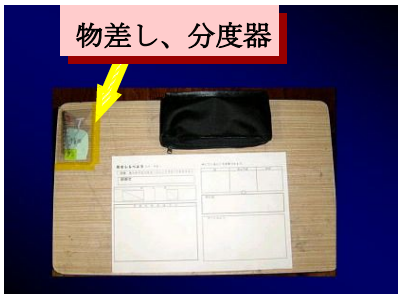
余分な刺激をなくした状態

黒板の周りは、必要な掲示のみとし、最小限にします。
掲示物は必要な時に貼り、板書が際立つようにします。

道具がかかっている状態

道具がかかっていない状態

机の並び方を揃えると活動しやすく落ち着いて学習できます。
また、机の横にカバン等を下げません。動線を確保し、子どもの支援を容易にするためです。



置き場所を明確にする目印

教具の収容棚

机や収納棚を整理することで、関心を授業に向けることができます。

位置の確認テープ

課題順の整理かご

靴を置く場所カード

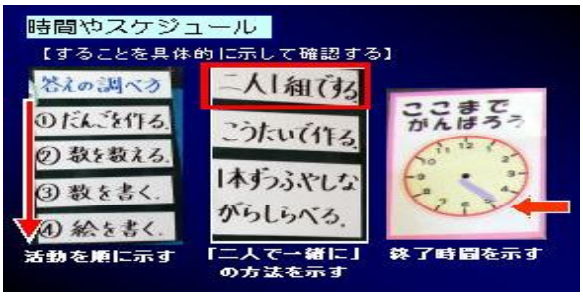
生活や学習の見通しが持てず、不安定な子どもたちには「何を」「どのように」「どの程度」行うかを具体的に提示することが大切です。このことで、混乱しないだけでなく、主体的に活動を促すことができます。

4　学習具･掲示物における支援

(1) 見通しをもてるようにしよう

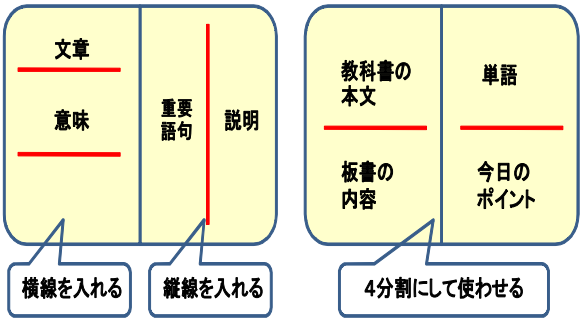
学習の内容や学習時間が分からないことが子どもの不安定さを引き起こしています。

いつまでに、何をするのかを具体的に示すことで、子どもたちは落ち着いて行動させられます。

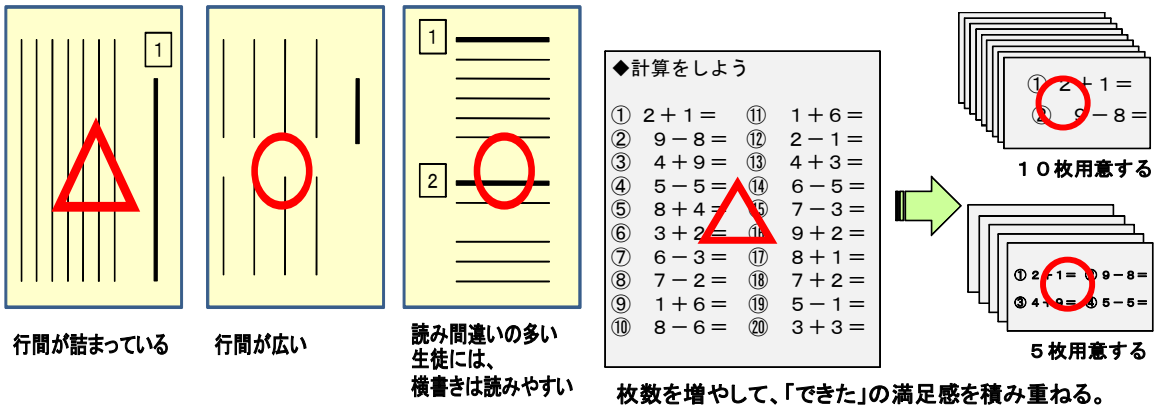


(2) ノートは仕切って使わせる

どこに何を書くのかを明確にするため、ノートを仕切るなど、ノートの取り方も分かりやすく指示します。学習内容等に応じて、一番適したノートを選択し、使用させます。



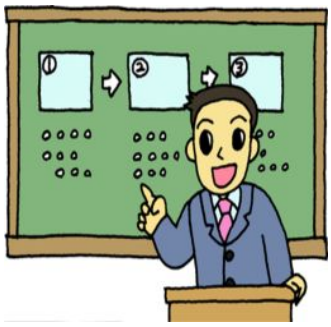
(3)　子どもの実態に応じた学習プリントを作成する



枚数を増やして、「できた」の満足感を積み重ねる。

5　かかわるときの支援

○　ニュース番組の構成と授業は相手に分かりやすくて伝える点で共通です。ここに支援のヒントがあります。多くのニュース番組では、番組の「型や枠組み」が決まっています。そのため、視聴者は一定の流れを想定して「次は、スポーツだな」と見通しをもってテレビを視聴できます。視聴者はこのパターンに安心します。授業も同じで、指導過程を一定させると、子どもたちの気持ちや行動を安定させます。教科別に授業の型をつくり、それを繰り返すことで、子どもたちは期待感と見通しをもちやすくします。



○　机間指導の目的の一つは、子どもの形成的評価で子どもの理解度を授業の途中で評価し、授業進行にフィードバックできるのです。加えて、子どものつまずきに気付き、個別指導する貴重な機会を設定できます。机間指導により賞賛や丸付けによる評価を実施しましょう。

　さらに、正面あるいは後ろから立ったままでもよいので、頭をくっつける等スキンシップを深めたり、多くの子どもに接するように座席位置の配慮や机間の回り方を工夫したりします。

○　授業では、空書き、指書き、教科書へのアンダーライン引き等の「動きや作業」を取り入れ、子どもの集中力を高めます。また、音読する時に、列ごと、班ごとに立ち上がって読むなど「立つ、座る」動作を入れると学習へ集中する効果があります。

○　子どもが一人でノートに書くときや何かの作業をしているときの、教師の指示は避けたい光景です。「書きながら、説明を聞く」の二つの作業は、大人でも大変です。今、すべきことに集中できる状況をつくることを心掛け、必要な追加説明や次の作業課題は、いったん区切ってから伝えます。特に子どもの書字には注意を払い、書く時間をしっかり確保します。また、書くのに時間がかかる子、何度も黒板を見て書いている子など、書字の困難な子どもに気付き、支援のきっかけをつくりたいものです。

○　私たちは「あっち・こっち」「たくさん」「あと少し」「だいたい」「ちゃんと」等、多用する言葉があります。しかし、目的や終点、量や回数が不明確で正解がいくつもあるような言葉は、子どもたちに混乱を招きます。

　「時計の針が○まで」「あと○個」「あと○回やろう」と具体的な指示を心掛けると、子どもたちが見通しをもちやすくなります。

○　私たちは日常生活で、禁止や否定の表現を使っています。「廊下を走らない」ではなく「廊下は歩こう」等の肯定的な前向きな表現を心掛けたいものです。禁止や否定の言葉は、お互いの気持ちをいらだたせてしまいます。子どもが、ふっと前向きになる肯定的な言語環境は分かりやすいだけでなく、人の心を優しくします。

○　話す際に、声の大きさ、抑揚、スピードなどを変化させることは、強調したいことを的確に子どもに伝えるために是非留意したいことです。また「では、大事なことを言います。」と言ってから、適度な間をとって話し始める方法も効果的です。

　絶妙な間や話の流れは、自然と子どもたちの関心を話に集中させます。

応援します！

学校支援なんでも相談室

授業づくり、教育相談の進め方、校内研修の在り方など、さまざまな教育活動の相談に応じます。
また、教育情報の提供も行います。

お気軽にご連絡ください

TEL/FAX 092−947−0008

eメール support@educ.pref.fukuoka.jp